
勇者の妹と温和な兄

とんび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者の妹と温和な兄

【Nコード】

N8541W

【作者名】

とんび

【あらすじ】

兄と妹の二人は異世界に召喚されてしまった。
魔王を倒してほしいとのことだが・・・

兄は最初から強いです、ハーレム、ご都合主義が多々あります。

プロローグ（前書き）

はじめまして、初投稿になりますゆえ、誤字脱字等があるとおもいます。

そのときは、遠慮なくもうしつけください。

プロローグ

「お兄ちゃん外にでかけようよ〜!」

そんな声が、どこからか聞こえてきた。お兄ちゃんと呼ばれた人の名前は、三城^{みしろ} 秀太^{しゅうた} 17歳で高校生だ。ドタドタと階段をのぼる音が聞こえ、バンッ!と扉が開いた。

「お兄ちゃん今日くらい外に出かけようよ〜」と声をかけてきたのは、秀太の妹、麻衣^{まい}だ。

絶世の美少女で誰もが振り向く。秀太とは、違う人だ。ちなみに麻衣は16歳で秀太より一つ下だ。

「なんで〜?今日は昼寝の日だからいきたくないな〜」と秀太は言った。

「いつもお昼寝してるでしょ!今日はお兄ちゃんの誕生日だから、いいでしょ今日くらい!〜」と少し困り顔でいつてくる。

「…わかったよ〜」といいながら着替えをしようとすると、

「お兄ちゃん、女の人が居る時は着替えちゃダメでしょ」と怒られる。

「家族だからいいと思うけど…」

「家族でもダメ!」と胸のまえでビシッとバツ印をつくる。

「わかった、んじゃ先に行つてて」

「じゃあ、玄関で待つてゐるね」と笑顔で答えて出ていった。

俺はため息をつきながら、着替えをする。正直、麻衣とは出かけたくない。いろんな人に絡まれるのだ。

ヤンキー、いけ好かないナンパ野郎、美人な女の人、高校生など色んな人に……正直うんざりだ。

そうなるなら、家で音楽を聴いたり、昼寝をしていたほうが、絶対いい。

そう考えながら、部屋を出て玄関に行くと、麻衣が箱に包まれたモノを差し出してきた。

「お誕生日おめでとう、お兄ちゃん」と笑顔でいつてきた。

「あゝ、うん、ありがとう」とプレゼントを受け取った。

「あけていい？」

「いいよ」と言うのであけた。

箱の中身は黒のブレスレットだった。

「お兄ちゃん黒が似合うでしょだからそれにしたの」

「まあ、黒好きだし服はほとんど黒色ばっかだしな」と苦笑いで秀太は自分を見る。

秀太の格好は黒をベースとした服装だ。黒のスボン、Ｔシャツ、上着、ひとつだけ違うと言えばベルトが白だ。

「アクセサリーが欲しいなと思っていたところだったんだ。今日はこれつけて出かけるね」と言つと

「ほんと！？気にいつてくれたの？ありがとう！！」と俺に飛びつく。

「重いよ」と困りながら言つと

「女の人に重いつていうのダメ！重くてもそこは軽く受け止めて、軽いね」つて言つてあげる！！」と憤慨しながら言つてくる。

「わかった。今度からそうするよ」と欠伸しながら言つ。

「もうっ！じゃあ、早速行こっ！」と秀太の手を引きながら玄関を一緒に出た瞬間、光に包まれた。

1話 異世界にきた

「あれ？ここはどこだろう？」麻衣は思ったことをそのまま言ってみた。

「日本ではなさそうだな」とのんきに秀太は言う。

麻衣たちがいたのは、洞窟だった。壁にあるたいまつがあたりを照らしていた。

「あなたが、勇者ですね！」と声がする。

振り返ると、そこには、綺麗な金髪と碧眼で巫女の服を着た美少女がいた。

「初めまして、私はスフィード王国第一王女、レイリスフィードと申します。あなたたちには、魔王を倒してもらいたいのです」と唐突に言ってきた。

「勇者？僕たちが？」と首をかしげながら秀太は言った

「ははは、はい、そ、そうです。でも、あにや、たには【魔力】を感じま、しえんね」と顔を赤くして王女様は囁みながら言う。

麻衣は王女様の反応を見て惚れたかな、と思った。秀太は顔立ちが良すぎるのだ。しかもタチが悪いことに自覚がない。二人で街を歩くと注目を浴びるのだ。お兄ちゃんはその私を私のせいになっているが、

実際、秀太も悪い。それでさらに、どこかが抜けている。

「【魔力】？それって何ですか？」と麻衣が首をかしげて言う

「おおっ！ーあなたには凄い【魔力】を感じます！あなたが勇者なのですね！」と麻衣の言葉を見無視して少し興奮しながら言ってきた。

「えっと、レイ王女様あの〳勇者とはなんですか説明してもらわないと……」と少し困ったふうに言う

「も、申し訳ございません。…えーと、勇者様、魔王と言うのはこのイヴァードの世界を滅ぼそうとする邪悪な存在です」と言う。

「あ、私の名前は三城 麻衣です。麻衣とお呼びください」と私は言った。

「僕の名前は三城 秀太。秀太と呼んでいいよ」と笑顔で言う。

「うっ！…わ、わかりました。私のこともレイでいいですね。シュ…シュウタ、マイ」と顔を赤くしながら言ってきた。

「レイ様、馬車の準備が出来たので二人を連れて行きましょう」と騎士の服を着たショートカットの赤髪で碧眼美女が言ってきた。

「レイ、その人は??」と秀太が言う。

「あ、はいこの人は、私の側近で魔法騎士団隊長シャーサル＝アー スレイドです」と言う。

「魔法騎士団隊長シャーサル」アースレイです。シャルで構いません」と秀太たちに一礼する。

「私は三城 麻衣です。麻衣とお呼びくださいシャル」

「僕は三城 秀太。 秀太でいいよ」シャル。そういえば、魔法キシダンってことは、魔法がつかえるの？」

「あ、はい使えますが…」とシャル言った。

…おお！！お兄ちゃんの攻撃が効いてない！麻衣は少し驚いてシャルを見る。

「見せてくれない？」

「…し、しかし今から「シュウタ私が見せてあげます」とレイが突然言ってきた。明らかに我慢しきれず言った感じだった。

「レ、レイ様あまり時間がないのでは？」

「問題ありません！」ときっぱり言った。

「シュウタ今から、魔法を出しますね」とうれしそうに秀太を見ると

「うん！」と笑顔一杯にお兄ちゃんは頷く。

「でで、では、いきましゅ！」と動揺しながら魔法を放つ

【火よその姿を変え、我に力を貸したまえ、いでよ火炎玉】
ファイアーボール

ボウッ！ ドッカッーン！

という音を立てて馬車が燃えた。

「レ、レ、レイ様！！」とシャルは驚愕して言った。

「す、すみません、方向を間違えました」とレイは恐縮しながら言
った。

まああからさまに動揺してたからなーと思いながらシャルに尋ねる。
「えーと、どうします？」

「とりあえず…歩きましょう申し訳ない」と頭を下げるシャル。

「いえ、うちの兄もあんなことをいったので…こちらにも負がありますし…」と言いながら秀太を睨む。

「えっ？僕が悪いの？」

「シユ、シユウタは悪くありません。すべての責任は私にあります
！」とお兄ちゃんのためなんでもという感じでレイは言った。

はぁーとシャルがため息をついて

「お城までは近いので大丈夫です。では行きましようか」

こうして私たちは城に向かって歩きだした。

城につくと、秀太たちは部屋に案内された。王様に会うために着替えをするとのこと一度、麻衣とは別れて着替えることにした。

「わー！黒の装備だー！それにローブとブーツもー！」僕は素直に喜んだ。

着ている服を脱ぎ早速着て鏡の前に立った。…冒険者になっていた。

「これで旅に出るのか…でも気になることをレイは言っていたな
」

レイは秀太には【魔力】がないと言っていた。普通の人の中には【魔力】があり個人差はあるが、誰でもある。【魔力】があれば空気中の精霊や粒子を媒介して魔法が使えて【魔力】は魔法を使えば消費をし、休んだら回復する。あと、魔法には精霊魔法と創造魔法がある。精霊魔法は安定しているけど使える魔法が固定される。創造魔法は自分で創れて使い勝手がいいが魔法の制御が安定しないことが多い。この国では魔法を創れる人が、一人もない。なのでこの国の人は精霊魔法を使う。…余談だが一般の人は一つ精霊が操れば良いほうで、二つ使えると国の宮廷魔法師に選ばれるとのこと。ちなみにレイは火と水が操れるらしい

なんとか使える方法ないの？秀太がレイに聞いたが彼女は無言だった…。

ようするに、秀太は、魔法が使えない。落ち込んだ死ぬほど…麻衣とレイが慰めてくれた。

コンコンと音がしたので、はいと言いながら出ると、可愛らしい自分と同じ年くらいのメイドさんが立っていた。

「初めまして、シユウタ様あなたに務めさせていただくメディア」クレイアと申します」と笑顔で言ってきた。

「初めまして、メディアさん三城 秀太です。秀太でいいよ。後、敬語もなしで」と笑顔で軽く言つと、

「ッ！いい、いえ私はメイドの身でありましてそのような無礼な行為は…」と何故か顔を赤くしながら言ってきた。

「いやいや、そんなの気にしないでいいんだよ？僕、ここに来たばかりだから、色々教えてね」と笑顔で握手した。

「ッ！エッ！あの…よ、よ、よろひくシユウタ私もメディアでいいかりや…」と顔がリングゴみたいで真っ赤だった。…マズイ

「あゝごめんね不謹慎だよね。女の手に触るなんて」と少し反省しながら言つと

「ッッ！…ひゃ、そんなことないでひゅー…！」と言いながら自分に突進してきた。

「おわっ！つと危ない危ないあゝやっぱり怒ってたんだ…」と心の奥底から反省した。

「みゃうー！あ…も…うダメ」と自分の胸の中で気絶してしまった。するとドアから、

「おにーちゃん、どうどう？私の白の…って、ええっ！？」と素っ頓狂な声を麻衣があげた。

「お兄ちゃんの胸の中で女の子が…お兄ちゃんまたやったの？」と呆れていた。

「おっ！やっぱり麻衣は白が似合うね」

麻衣は喜んで「ホントに！？ありがとう…じゃなくて、どうしたのその子？」

「いきなり突進してきて腕の中で気絶したんだ…そんなに握手が嫌だったのかな？」秀太は、はあ…とため息をついた。

「まあとりあえずベットに寝かして置けば？」

「そうだね、んじゃ」と言ってメディアをベットで寝かせた瞬間

「準備できましたか？ではこれから…シュウタ？」とレイが綺麗なドレスを着て呆然としていた。

「どうしたんだい？」と首をかしげる

「シュ、シュウター！！いきなりメイドをお、お、押し倒すなどいけません！！」と剣幕顔で言っ僕をベットから引きはがす。

「そ、そ、そんなにしたいのであればわた「いけませんレイ様！」「とレイの後ろからセリナが言ってきた。

「あつ！シャル来てたんだ。」秀太がそう言う

「ええ、私は彼女の側近でもあるので…レイ様あなたは皇女なので。もう少し相応な態度を…」とレイに言う。

「わかりましたわ、それでは行きましょうか」と何事もなかったの
ように言ってきた。

シャルは、はあゝと息を吐きながらついて行く。秀太たちも後に続
いた。

シャル大変だなと秀太は同情した。

1話 異世界にきた（後書き）

10 / 1 魔法の詠唱と魔法の設定をかえました。

2話 王様に会おう

「お父様、勇者である。ミシロ マイ様とその兄であるミシロ シュウタ様を連れてまいりました」とレイが言う。

「うむ、ご苦勞であった。ではレイ今日はもう下がってよいぞ」と威厳のある声で言ってきた。

「わかりましたお父様、それでは失礼します」

「お初めに掛かります。私は三城 麻衣と申します。魔王を倒すために呼ばれたと存じます」

「初めまして、麻衣の兄の秀太です。秀太でいいですよ」と無敵スマイルをかます。

すると、「まあ、なんて可愛らしい子なのでしょうシュウタ君はいくつなの？」と王様の隣にいた美しい王妃様が、言ってくる。

「エ、エリーシャ、今はわた「あなたは黙っていて」「はい」王様を一喝して黙らせる美しい王妃様
ああ王様の威厳がなくなっている…。麻衣は苦笑いをする。

「僕は17になります。王妃様」

「まあ！17歳！？もう成人しているのですか！シュウタ君なら私

と結婚しない？」とんでもない発言をしてきた。そうこの国では16歳で成人なのだ。

「エ、エリーシャ！？私「離婚よ」はい…ってエッ！？」王様が慌てている。

…もう王様がただあわてているオジサンにしか見えないよ。麻衣は内心でため息をついた。

「結婚はお断りします。王の仕事は忙しいと聞きますし…」

「心配しなくても大丈夫だわ、あなたは必要な時だけ座っていればいいのよ」と微笑むレイナル王妃様

…無理だと思うな。お兄ちゃんを落とすのは、と麻衣は冷静にかんがえる。

「えっと…じゃあそれ以外は、何してもいいのですか！？」と目を輝かせながら言う。

…まさかの食いついた！？麻衣は驚いた。

「ええ！もちろん食事とかそういうものも心配しないでいいわ…それじゃあ、けっ「お待ちくださいお母様！！」「チッ」王妃は舌打ち？をしながら声の主の方を見る。

「お母様、さすがにそれはいけません王妃様は相応の態度でしめさないといみんなが動揺してしまいます」と金髪で縦ロールの赤のドレスをきた美少女が言う。

…うんさつきから周りがざわついているもんね。と麻衣はその意見に納得した。

「う…ゴホン…大変失礼いたしました。王、続けてください」どう

やら周りの雰囲気気付いたらしい。

「あつ… ああ、えーと、私は、アレイスⅡスフィードだ。よろしく頼む」一番最初と同じ態度で言ってきた。

「私は王妃のエリーシャⅡスフィードですわ」と微笑みながら言う。
…あれがなければな…と麻衣は勝手に思う。

「私は第二王女のファームⅡスフィードよ」と金髪縦ロールの子が言った。

…さつきはありがとう。でもお兄ちゃんの方を見て赤く顔を染めるのは気のせいかな？麻衣はそう思う。

「ほら、セリー又あなたの番よ」とエリーシャさんに言われて後ろから顔を出す。

…うん、かわいい。麻衣は笑顔でその子を見る。

「わ、わ、私はセ、セ、セリー又…5歳です」と小さく金髪で青い目の美少女が答えた。

そしたら、お兄ちゃんが「セリー又ちゃんこっちにおいて飴あげるよ」と笑顔でこたえて、片膝をつく

…ああ、お兄ちゃん子供を見るとすぐこれだから麻衣は内心で苦笑いをする。

「アメ？あめってな…に？」と首をかしげて答える。

…ヤバイかわいい！麻衣は笑顔でセリー又を見る。

「あまゝい食べ物だよ。甘いものは嫌い？」とこちらも首をかしげて答える…いい勝負だ

「甘いものしゅきゝゝ！！」と言いながら階段を急いで降りようとするがセリーヌがつまずく。

「セ、セリーヌ！！」驚愕の顔でエリーシャが叫ぶ。

10段位の階段を顔から落ちようとした瞬間秀太が動いた。…いや動いていた。

「…えっ！？」「」

あまりにも速すぎる行動に誰も何が起こっているか分かっていない状態だ。セリーヌまでの距離は約15メートルだった。ざわざわとざわめく会場…しかし秀太は気にすることなく

「こらこらゝだめだよ。階段を急いで降りようとしたらゝ」と優しく微笑む。

「ごめんなしゃい、…お兄ちゃん」と泣きそうな顔でそう言った。

「うん、いいよ、いいよ、それじゃあ、はいこれ」そう言って秀太は飴をわたす。

「おいしゝゝい！！ありがとうお兄ちゃん」そういってお兄ちゃんに抱きつく。

…ムッ、いかなそれは…ちょっと麻衣は嫉妬した。

「はーいどういたしまして、セリーヌちゃん偉いねー」そういつて頭を撫でていた。とても嬉しそうだ

…いいなーそのポジション変わってー麻衣は羨ましそうに見る。

なぜだろう…私は女性の人たちが嫉妬と羨望の眼差しをセリーヌちゃんに送っているのは気のせいだと麻衣は願った。

騒動も一段落ついて、僕たちは、世界の情勢について聞いた。

「今、世界では魔物が多くある」と王様は睨みながら言う。

どうやら、大変なことになっているな。秀太は思う。

「…お兄ちゃんそろそろおろしたら？」と麻衣が心配そうに秀太をみてる。

「セリーヌ、こちらに来なさい。私が抱っこしてあげるから」と王様は言う

「イヤだ、ここがいい。とーさまのところはイヤ」とセリーヌは王様から顔をそむけながら言う。

「ぬ、ぬうつ！？そ、そうか…」と秀太の方を見ながら王様は言う。

「まあ、僕は別に気にしていませんし、それにセリーヌちゃん軽い
ですから」と麻衣から習った。体重軽いよアピールを使う。＜プロ
ローグ参照＞

「えっ！？今それここで使う！？」とかなり驚かれた。

「えっ？…褒めるんじゃないの？」と不満をぶつける

「いやいや、気づいてよ。てか何で気づかないの？」と意味のわか
らないことを言ってくる。

麻衣がそう言つてようやく気がついた。兵士やお偉いさん達が麻衣
をばーっとしながら見つめていたのだ。…けしからん。このことを
言っていたのか。秀太は周りを警戒する。なるほど、これは後で一
言いわないとな。秀太は思った。

「心配するな、麻衣。僕がなんとかするさ」

「いや無理でしょ！？…ああ、お兄ちゃん勘違いしてるでしょ？」
と呆れ顔で言ってくる。

「何で僕がしょうがない子だなみたいな顔をされなきゃいけないの
？」

「ゴホンッ！お主たちそろそろいいかね」と王様は何故か僕を睨み
ながら言う。

とりあえず秀太たちは謝り質問をする。

「この国の他に勇者はいないのですか？」

「いや、勇者はこの国だけのものだ。ほかの国にはない」

「魔王は勇者以外には倒せるのですか？」麻衣が言った。

「それが…恥ずかしいことに私は魔王の前までたどり着けないのだ」と申し訳なさそうに言ってきた。

「そうなんですか…」と麻衣は落ち込んで言った。

「あ、そういえば勇者を召喚したのは何回目なんですか」場の雰囲気を変えるため僕は言った。

「あ、ああ、今回で三回目だ」と王様は言った。

「ふん、ということは魔王も今回で三回目ということか」

「お兄ちゃん、何当たり前のことを言ってるの？」

「んっ？お主たち何をいつとる、魔王はまだ死んでおらんぞ？レイから聞いておらんのか？」と眉を潜めて王様が言った。

「…へ」

「えええーーーー！！！」と麻衣が叫んだ。

「うん、お姉ちゃん、うるさい」セリーヌが不満顔で言ってきた。

「あつごめんねセリーヌちゃん」麻衣はセリーヌに頭を下げる。

「ごめんよセリーヌちゃん」そういいながら、僕は頭をなでる。

…嬉しそうだ。やはりこれが一番だよな秀太はそう思いながら撫でる。

「…それで勇者はどうなったんです？」と麻衣が聞いた。

「うむ…そのな…死んでしまった」と言いにくそうに王様は言った。

「なっ！？そんな…魔王に殺されたのですか？」

「いや、このあいだ魔物に殺された…」と王様は言った。

「えっと…なんですか？最近殺されましたよみたいな感じなのは…」

「うむ、一回目の勇者は一ヶ月前、二回目は五日前だ」きっぱり、はつきり言った。

「……あの洞窟にある魔法陣は最近出来たのですか？」麻衣が言った。

「いや、あれは最近になって、起動しだしてそれを使ったのだ。勇者が来るのをレイだけが感じてな、あそこの洞窟は、レイ意外のものを入れないように結界が張ってある」と王様は言った。

「でも、心配しなくて大丈夫よ。マイちゃんから感じる【魔力】は前の二人と比べ物にならないとレイが言っていたわ」と王妃様が微笑みながら言ってくる。

「うむ、そうだ。お主はただならぬ感じがするからな」と王様は言った。

「はあ…そうですね」麻衣は納得のいかない様子で言っていた。

3話 模擬戦をやるう

王様の謁見が終わった。正直ものすごく疲れた。王妃様はご乱心になるわ、王の間にいた。女の人達を虜にするわ、王女様達の心を驚かすわ、など、とんでもないことをお兄ちゃんはやらかし続けた。麻衣はため息をつきながら思う。

このあとは宝物庫で武器を選べるというので、秀太たちは、宝物庫に案内された。

「ここの中から好きなものを選んでくださいますようお願い申し上げます」とメイドさんが丁寧に答えた。

「おお〜すっごーい！」お兄ちゃんはワクワクしながら言っていた。

「あ〜あ〜メイドさんが愛おしそうに見てますよ〜気づいて〜お兄ちゃん。麻衣は内心で苦笑いする。

気づくはずもなく秀太はサクサク奥に進んでいく。

「あつ、待つてよ〜お兄ちゃん！」

「う〜ん、ないな〜」

「何を探しているの？」

「えっとね、刀だよ」

「この国にあるのかな？聞いてみれば？」

「うん、そうだね。んじゃ、さっそく！」と言ってピューっと入口まで走って行った。

「相変わらずだな。お兄ちゃん…」

そう言っただけで麻衣は考え事をする。

私は恐いのだ。魔物というのが…勇者を殺したという魔物が…正直に言っただけで逃げ出したい。元の世界に帰りたい。でもそんな我侭は言えない。…私があの時、外にでなければこんなことにはならなかった。…今更ながら後悔する。お兄ちゃんは、怒ってないのかな？恨んでないのかな？どうなんだろう…。

「おい麻衣なんかね。ないらし…麻衣？」秀太が真剣な顔で私を見ってくる。

「なんで泣いているんだ？…何かされたのか？」秀太が周りを警戒しながら言う。

「えっ？泣いてるの？私？」泣いてることに麻衣は今、気がついた。

「いやいや、何でもないよ！心配してくれてありがとねお兄ちゃん」麻衣は笑顔でごまかした。

「…そうか、わかった。でも何かあったらすぐに僕に言ってね」笑顔で秀太が言ってきた。

「うん！」私はそう言っただけでもううのが嬉しくて元気よく頷いた。

話が戻りどうやら刀はないらしい。…仕方ないよ元気出してお兄ち

やん。麻衣は苦笑いする。

「うゝん、そしたらあとはナイフみたいな…あっ！！」秀太は突然さげんだ。

「ど、どうしたの」

「そういえばね、僕、ナイフ持ってきてたんだ。」と嬉しそうに秀太は言った。

「えっ？…なんで持ってきてるの？」驚いて私は聞く。

「いつも、護身用のために持ってるよ？」当然だよって感じで麻衣に言ってきた。

「そ、そうなんだ…それでどこにあるの？」

「部屋の中だよ…それじゃ早速——」

「あっ…お兄ちゃんそれならあと…行っちゃった」麻衣は苦笑いでそう言った。

「うゝんどれにしようかな」

「やっぱり、持ちやすい片手剣かな」そう言って一つの片手剣を手取る。

全体が白で統一されたものでよくわからないが剣の刃の部分だけ黒色だった。

「なんか、色に惹かれたしこれでいいか」適当に決めた。

…適当一番ってお兄ちゃん言っていたしね。麻衣はそう思う。

「おつ、麻衣それにしたのかい？」と秀太が言ってくる。

「あつ、お兄ちゃんナイフあったの？」

「うん、ここに来るときに着ていた服の裏ポケットに」そういいながらナイフをみせてくる

全体が黒色のサバイバルナイフだった。

「それで本当にいいの？」私は眉をひそめて言う。

「うん、これ愛着あるしね」そう言ってお兄ちゃんはナイフを見る。

「ああ、そういえば、シャルが模擬戦を中庭でやろうって言ったよ」

「えっ！？模擬戦！？いきなり！？」私は突然のことではびくりする。

「まあ、とにかく中庭に試してみようよ」お兄ちゃんは私の手を引いて連れ出した。

中庭にメイドさんに案内してもらつと、…なんかたくさん人がいた。

「おお、勇者様のおでした。」

「綺麗〜！かわいい〜！」

「俺と結婚してくれ〜〜!!」

「前の勇者様よりぜんぜんいいわ〜」などと、あちらこちら声があがる。

「麻衣、まっていました!」とレイが声をかけてくる。

「いったいこれはどういうこと?」わたしは慌てて声をかける。

「何って模擬戦の会場作りですけど…」

「いや、これはいくらなんでも人がおおすぎ…」と麻衣は呆れながら言う。

「きたか、では麻衣、早速はじめるぞ」とシャルが言ってくる。

「えっ!? あっ…うん」さすがに断れなかった。

シャルは、私から3mくらい離れたところに立った。

「レイ…そういえばシャルはどのくらい強い?」立ち去ろうとするレイに声をかける。

「えっと…一般の兵士を10人くらい一気に相手できるくらいですけど」と普通に答える。

「…強すぎじゃん」シャルはとんでもない人だった。

「あ!そうそう麻衣ちよつと耳かして〜」

「何?お兄ちゃん」

「うん、あのねいきなり本気で戦わないほうがいいよ」

「えっ！？何で？」

「セリー又ちゃんを助けたとき、明らかに身体能力が上がっていたんだ。だから、体が慣れてから本気をだしたほうがいいよ」と言ってくる。

「へえ、そうだったんだ」と納得する。…もつと早くそんなこととは言つてよ。とは言わなかった。お兄ちゃんだから許す。麻衣はそう勝手に納得した。

「なんだ、作戦会議はもういいのか？」シャルがにやつと笑って言うってくる。

「うん、もういいよ」

「では、ルール説明を致します。相手に直接剣を当ててはいけません。それと剣を落とした時点で負けとします。降参はあります」と審判をする人が言った。

「はじめ！」「審判の掛け声と共に二つの剣がぶつかりあった。

4話 模擬戦をやるう2

キンッ！——ガギン！キーン！剣の打ち合う音が中庭に響き合う。

「やあ！！」麻衣は突きを繰り出したが、寸前で剣で止められる。「フッ！！」シャルが少しできたスキを狙って麻衣の脇に当てようとしてきた。しかし、わたしはバックステップで後方に下がって、すぐに間合いを詰める。「くっ！！」シャルが辛そうな声をあげた。正直言つて、シャルは驚くほど強い。いつもの麻衣ならすぐに負けていただろう。しかし、今の麻衣はシャルと五角にやりあえている。しかし身体能力の差をシャルは剣の技量でカバーしている。「はあゝ！！」シャルは突きをしてきた——今だ！麻衣は、体をひねって最小限でよけ、そして首を狙って剣を振る。「かかったな」シャルはそう言つて、体を縮めた。「なっ！！」私の剣はそのまま空を切り、私の首筋にシャルは剣をつけた。

「勝負ありだな」

「…参りました」

「「オオオオ~~~~~！！！！」」
と大歓声があがった。

「負けた原因は経験の差だろうな、あそこで本気できたとおもったのだろう？」とシャルは聞いてくる。

「うん、本気で来たと思ったから…」と麻衣は落ち込みながら言う。
「まあ、そんなに落ち込むな。剣の技量が私より上だったら確実に麻衣が勝っていたぞ?」

「ありがとうございます。今度よかったら剣を教えてね?」と麻衣は手を差し出す。

「ああ、もちろんだ」シャルも手を出して握手をした。

「…さてと、次はシュウタお前だな」シャルはそう言って真っ直ぐ秀太を見る。

「えっ?…ぼくもやるの?」めちやくちや嫌そうだ。

「当たり前だ。お前の実力も知っておきたいしな」

「いや、でも…僕はシャルより強いよ」…とゆるく言った。

「何?それは本気で言っているのか?」と少し怒った感じだ。

「シュウタ…無理です。シャルにはかてませんよ?」とレイが心配そうに見つめる。

「お兄ちゃん…さすがに謝ったほうが…」

「えっ?でも…事実だし…」

「そうか…なら本気の殺りあいでしょう」シャルが我慢の限界と言った。

「シャル！？あなたは自分が何を言っているのか分かっているのですか！？」「レイが驚愕を露にしながら言った。

「ええ無論分かっております。大丈夫です。私は負けません」そうシャルは言い放った。

「…僕またやらかした？」お兄ちゃんが私に聞いてくる。…うん、もう今回ばかりはもう知らない。麻衣はそう思ってそっぽを向く。

「はあゝもう本気でやっちゃえば？」

「…わかった」お兄ちゃんが、いつもと違う雰囲気で言ってくる。

私はその瞬間、しまったと思った。

「おにいちゃ」「おい、シャル…本気でやってやるよ」「ッ！」「…もう遅かった。

「シュウタ？お前どうしたんだ？」シャルが眉をひそめて言うてる。

お兄ちゃんはそれを無視して、「おい、審判さつさと始めろ」と冷たく言う。

「し、しかし、…殺しとなると」オロオロしながら言った。

「聞こえなかったのか？さつさと始めろ…二度目はねえぞ」冷たく静かに審判を睨む。

「ヒッ！ヒイイイーーーー！！」　そう言いながら審判は逃げ出す。

「ちっ、腰抜けが…まあいい。…いつでもいいぜシャル」

「ほう…それがお前の本性か、だが…武器も何も持たずに本気とは笑わしてくれる…！」　そう言って一気にお兄ちゃんに詰め寄る。

しかし、秀太は居なかった…いつの間にかシャルを通り過ぎていた。バタツと倒れる音がする。…シャルがうつ伏せで倒れていた。

シーンつと中庭が静まり返る。少しして「なんだ？…何が起こった」「どういうこと？」「何をした？」とざわざわとする。

「あ…あれが、…シユウタの本気なのですか？」とレイが呆然としていた。

「えっと…うんそうだよ」

「そ、そうなのですか…しかし恐ろしいですね。シユウタ…」

「嫌いになった？」

「いえ、そんなことはありませんむしろ好きになりました」

「ふゝん、お兄ちゃんのこと好きなんだ？」とレイをからかう

「ツツ！…い、今の、なしです！なゝしゝ…！」と顔を真っ赤にしながら言ってくる。

「お兄ちゃん、レイがね、おにいちや、何でもありませんよ！
！シユウタ！」「ムッ！」

お兄ちゃんはシャルのケガの具合を見ていたみたいで顔をこちらに向け「何？」といったもの調子で首をかしげていた。

中庭の騒ぎから、数時間たち今は夜…壮絶な一日だったと我ながら思う。これが毎日続くとなると…死んじゃうよ…今は、部屋で就寝だけど眠れない…う…んどうしよう…あつ！そうだお兄ちゃんと寝よう。麻衣はそう思っただけで自分の部屋を出てお兄ちゃんの部屋を訪れた。ノックをしようとしたら部屋の中から声が聞こえてきた。

「シユウタわたしのほうが…いいですよ」

「私の方がいいもん」

「いや、そんなとこ…ダメです！」

「あつ！？そこもダメ！」

「別に…いいじゃん…」

「あゝ…ダメ…！」

「バンッ！！」お、お兄ちゃん！？」素っ頓狂な声をあげて私は扉を開ける。そこには三人のネグリジェ姿をした王女たちがベットのの上にいた。

「…いったいそこで何をしてたの？」と少し怖い口調で言った。

「いや、これはその…って麻衣も何しに来たんですか？」と慌てながらレイが言ってきた。

「私はお兄ちゃんと一緒に寝ようと思って」

「えっ！？ シュウタと… い、一緒に寝るんですか…」と恨めしそうにレイが見てくる。

「なんだい？ 眠れないのかい？」とソファでくつろいでいる秀太が言ってくる。

「うん、それにお兄ちゃんに話したいこともあるし…」そう言って俯く。

それを察したのかお兄ちゃんは「ごめんね、大事な話があるから今日は帰ってくれるかい？」と三人の王女達に言った。

レイもそれが分かったらしく駄々をこねている妹達を言い聞かせて「それでは、おやすみなさい」と言って出ていった。

「…ねえお兄ちゃん何でレイ達がいたの？」

「んっ？ ああ、セリーヌちゃんがここに来たかったらしくてねそれで付き添いでついて来たらしいよ」

「そう…でも何でベットの所で？」

「なんかここで寝るってセリーヌちゃんが言い出してね。それなら自分たちもここで寝るって言ってね。僕をどこの位置にするかレイ達が揉めていたのさ、僕は別にソファでいいって言ったけど、それも却下されてね」と微笑みながら言ってきた。

私はふーっと息を吐いて

「…お兄ちゃん、私を恨んでない？」 勇気を出して聞いてみた。

「いきなりどうしたんだい？…恨む？何をさ？」

「私がお兄ちゃん外に連れ出したせいで、ここに来んだよ！？」 麻衣は強く言った。

「そんなわけないよ」とソファから立ち上がる。

「でも…でも…！！」

お兄ちゃんはそつと私を抱きしめて、「なんだい？そんなことを気にしていたのかい？優しいね」 麻衣は「

私はそこで泣いた。 声を出さずに静かに

「いいよ、いっぱい泣きなさい。 僕がいつでも麻衣を守るからね」

「おウチ…かえ…りた…いよ」

「大丈夫、僕が絶対になんとかするから、…絶対に」 お兄ちゃんはそう言つて、私をベットまで運んで

「おやすみなさい麻衣、今日はいい夢が見れるよ」 そう言つて微笑んだ顔を見ながら私は眠りについた。

5話 覚醒

ここはどこだろう…。秀太はそう思いながら、なにもない世界にたずんでいた。

『あなたを待っていましたたよ秀太』
そんな声がきこえてきた。

—あなたは誰？

『わたし？わたしは———よ』つと黒髪黒目の妖艶な女の人がかたえる。

—ごめん名前が聞き取れなかった。もう一回言ってくれる？

『———よ…その様子じゃまだ聞き取れないみたいね』すこし悲しそうに言ってきた。

—えっと、ごめん？

『いいえ、あなたが気にすることではないわ』

—ここはどこなの？

『ここは、そうね…【狭間】とでもこたえておくわ』

—【狭間】？そこに何で僕がいるの？

『それはね、わたしがここに呼んだから』悲しそうに言ってくる。

—どうしてそんなに悲しそうなの？

『…ここからでられないからよ、そしてあなたに力を与えるために呼んだの』

—力？

『そう、あの【七柱神】^{セブンスゴット}を倒すための力よ？さっそく与えるわ』

—【七柱神】^{セブンスゴット}？何それってうわっ！！

僕の中黒い光が入ってくる。そして…

『使い方は分かったはずだわ、もう時間がないの。ごめんなさい。』
彼女は悲しそうに微笑みながら言った。

—待ってまだ話したいことが！

『また、会えるわ心配しないで』

そうして、秀太は意識をなくす。

「おに…ちゃん、お兄ちゃん」

誰だ？秀太そう思いながら目を開ける。

「お兄ちゃん！お兄ちゃん朝だよ起きてよ〜！」

「ん…朝か…おはよう麻衣」

「うん、おはよう…お兄ちゃん大丈夫？ずいぶんうなされていたけど…」

「えっ？うなされていた？…そうか、心配してくれてありがとね」
秀太はそう言って、麻衣の頭を撫でた。

「えっ…うん、どういたしまして」そう言って、目を細めながら喜んでいた。

「さてと、今日はなにするんだっけ？」

「もう忘れたの？今日は常識のお勉強と魔法の訓練って昨日言われたでしょ…」

「ああ、そうだったね、とりあえず、準備しますか」

コンコン、「失礼します。朝食の準備ができましたので…」メデイアが入ってきた。

「し、し、失礼しました！！」ボタンッ！！とドアを勢いよく閉めて、メディアは出て行った。

「あゝ！！ちよつと待って色々と間違っているからメディアさゝん！！」麻衣はなぜかそう叫びながら出て行った。

「いったい、なんなんだ？」理解不能であつた。

とりあえず、朝食をすませて、王城の図書室に向かう。
図書館に着くとメディアとメディアのそっくりさんがいた。

「はじめまして、シュウタ様。わたしは、メディアの姉でマイ様の専属メイドのメープル・クレイアです」ニコニコでふわふわしている感じの人だ。

「あ、どうも三城 秀太です。秀太でいいですよ。あと敬語はなしでもいいですよ」

「…ええ、しかし敬語は自然口調なのでお気になさらないでください。よろしく願います…シュウタ」

「こちらこそ、よろしく」僕はそう言った。

（どういうことですかメディア？握手してくれないのですが…）

（そんなはずは…もしかしたらわたしだけ特別かも…）

（それはいけませんね、抜け駆けは許しませんよ。メディア）

（お姉さま、あきらめてください）

「二人とも！そこまでだよ！」麻衣が怒りながら言う。

「申し訳ございません」「二人は麻衣に頭を下げる。

二人はなにかこそこそ言っていたが…僕は何か間違えたのだろうか。

「二人ともすまない、気を悪くしてしまつて…」

「いやー！ち、違うよ（ます）！！そんな顔しないで（ください）

」」ほとんど揃って言われた。

「そうか…気を使つて「お兄ちゃん」は黙つてて！！」「…ごめん」麻衣に怒られた。

「とりあえず、はやく常識について教えてもらおうね」麻衣は笑顔でいったが…目が笑つてない。

「わかりました、まずは世界の国ついて教えます」メーブルさんはそう言つて説明をはじめめる。

この世界は5つの国があるわけで獣人の国、リムール王国、エルフの国、ユイシャル神国、竜人の国、シュバーツ帝国、魔人の国、テリユート魔国がある。今回戦争の原因になったこのテリユート魔国の魔王を倒さないといけない。…あれ僕が想像していたものと違うようなまあいいか。秀太はそう思いながら説明を聞いていた。

「えっと、次は通貨について、はなすね」メディアがそう言つて説明をはじめめる。

この世界は銅貨100枚で銀貨1枚、銀貨10枚で金貨1枚、金貨10枚で白金貨1枚となり、そして、平民の一ヶ月の収入が1金貨だ。

「まあこのくらいですかね。後は魔法についてですけど…」ドンッ！と本の山を置く。

「まずは、これをよんでください」メーブルが言った。

「や、よかったな麻衣まあ頑張れよ」

「え…お兄ちゃん読まないの!？」悲痛な顔で言ってくる。

「今回はかりは無理でしょ僕これは扱えないし…」

「うつつ…今日中に終わるかな」かなり泣きそうだった。

「とりあえず俺は部屋にもどるよ…頑張つてね」

「あっ！待って〜シユウタ〜！」

僕とメディアは図書室をでた…さあて、もらった力でも試みますかね。秀太はそう思いながら部屋に向かった。

部屋に着いて、僕はもらった力について考える。

あの黒い光が体に入ってきて、力の使い方や、能力についての知識が頭に流れ込んできた。女の人くれた力の名前は【終始魔法】^{エンディレス}と

言う。

この魔法は対象をなかったことにすることができる。つまり、この場から移動させたり、跡形もなく消しさせることができる。他にはケガをなかったことにするなど応用も利く。そして、もうひとつが対象をあったことにするだ。これは対象が死んでいたり、この場になかったりしても、生き返らせたり、近くに呼び寄せたりする。これも、ケガがあったことにするなど、こちらも応用も利く。さらに制限がない…どこでもできるのだ。この魔法を使えば、瞬間移動ができる。この魔法を使えばあらゆる場所が把握できるのでいけないところがない。しかし、問題が一つ…この異世界から移動できない宇宙は行けるみたいだけど…絶対に酸素ないよね。と秀太は思う。

というわけで、魔王をなかったことにしようかな。まあ、魔王の顔くらい見てあげようかな。と秀太はそう思う。

「メディア」

「はい、何？ シュウタ？」 どうやら、部屋の掃除をしていたらしい。

「ちょっと、散歩してくるね」

「私もついていっていいですか」 メディアは上目遣いで聞いてきた。

「ごめんね、散歩っていつでも用事なんだ、2時間くらいしたらもどるよ」

「そうなんですか…」 少し俯いて言ってきた。

「ごめんね、じゃあさ、今度一緒にどこかに買い物に行く？」

「ほ、ホントですか！！無論、雨が降ろうと、嵐が来ようとも絶対いきますよ！！ヤッター！！」なんかかなり喜ばれた。…なんか高いの買わされるのかな。

そして、喜んでいるメディアから見えない位置で瞬間移動を使った。

あゝ、つかれるな。麻衣はそう思いながらため息をつく。

魔法は、【火】【水】【風】【雷】【光】【闇】で構成されている。これを操るには精霊と契約を交わすか、魔法を自分で作るしかない。精霊で契約するには、自分の【魔力】を外に放出して、精霊にあたえる。気に入られたら精霊が契約に応じてくれる。契約はどこでもできる。ちなみに、メーブルは【火】と契約をしている。

「実際にやってみていいかな？」麻衣はメーブルに聞いた。

「最初に精霊と契約をかわさないダメだと思いますけど…」

「精霊ってどこにもいるからここでもいいよね？」

「まあ、そうですが…できるんですか？」怪訝な表情で聞いてくる。

「たぶん…え」と、不安だからやっぱり中庭に行こう「そう言っただけで中庭に移動をした。」

「んじゃ、やってみますか」私はそう言って、【魔力】を放出するイメージを作る。

「す、すごいですわ…【魔力】が相当量でているのが肉眼でもわかります！」メーブルは興奮しながら言った。

精霊？が私の目ではつきりとみえた…【光】？かな。麻衣は疑問に思う。

私は光っている物体をじっと見つめる。そしたら、急に私の中に入ってきた。

「わわ、は、入ってきたよ！」私はかなり慌てた。

「えっ！？精霊が見えるんですか！私は見たことなんてありませんわ！」メーブルは驚きながら言った。

「いや、なんか体の中に入っていた…」

「とりあえず魔法を使ってみたらどうですか？」メーブルはそう言っ
て木の方を指す。

「よし、いくよ！【火槍】」ファイアランス私が出した数本の火の槍は数本の木々に刺さった瞬間、一瞬にして炭化した。

「…短詠唱でしかも創造魔法に匹敵するほどの威力…規格外ですね麻衣…」驚きを通り越して呆れていた。

「いや、ちょっとやりすぎちゃったね、ごめんね」

「これは、育てがいがありますね。これからもがんばりましょ麻衣」
メープルはそう言って私に言った。

この後、麻衣は宮廷魔法師に色々と聞かれ揉みくちやにされた。な
んで遠くから笑ってるの？助けてよメープル。麻衣はため息をつい
た。

やっと、宮廷魔法師に解放されたときは。もう夕方だった。：そん
なに珍しいのかな。ここに来て二日目だな。と麻衣は部屋のベッ
トの上でぼーっと思っていると

「麻衣！シュウタ知らない？」なんかメディアが慌てているようだ
った。

「メディア、ノックはきちんとしないといけないでしょ？」とメー
プルが注意をする。

「お説教は後で聞きます。お姉さま。それよりもシュウタが。！！」

「お兄ちゃんがどうかしたの？」麻衣は疲れている体を無理やり
起こした。

「朝からずっと帰ってきてないの。2時間くらいで帰って来るって
言ったのにまだ。！！」悲痛な顔で言ってきた。

「うそ！？…お兄ちゃん言ったことは大概守るのに…」

今は夕方だから…8時間くらい帰ってきてない…何か巻き込まれたのだろうか。と麻衣は考える。

「お兄ちゃんは何かに何か言っていなかった？」

「分かりません…2時間でもどること意外は…」メディアはしゅんつとうなだれた。

「メディアこのことは、王様たちに報告しましょう！」メーブルはそう言って落ち込むメディアを引っ張って颯爽と出て行った。

お兄ちゃん絶対に無事でいてね…もしもなんて絶対私は嫌だよ！！
麻衣はそう思いながら、部屋を急いで出た。

5話 覚醒（後書き）

9 / 2 2 火の槍↓火槍に変更しました

6話 魔王狩り（前書き）

お気に入りにしてくださった方、評価をしてくださった方
本当にありがとうございます。これを励みに頑張りたいと思います。

6話 魔王狩り

「よつと」

秀太は魔王城の前に降り立った。なぜ魔王城の前だつて？それはね、魔王城の構造が把握できなかったんだ。でも、今はそのことは正直どうでもいいです。なんか居るんだよね。秀太はそう思いながら前を見る。

「ガルアアア！！」

犬？いや、これは狼だね。しかも真っ白なんだよ。…全長100mくらいかな？大きすぎるよね。秀太は若干冷や汗をかく。

「ガルアアア！！」 あっ、突撃してきた。秀太は横によける。狼が正面を向いたので、あれを使う。

——キツ！！

秀太は睨みつけた。狼は急に止まり、秀太の前でひれ伏す。がくがくと震えていた。

「大丈夫、君には何もしないよ…その首輪は拘束具みたいだから外すね」 秀太は優しく声をかけた。

【その首輪をなかったことにする】

狼の首輪が跡形もなく消え去った。

「さあ、君は自由だ。どこでも好きなところへお行き」

「ガウツ」なぜか狼は秀太の前から動かない。

「一緒に行きたいの？」

「ガウ」狼は首を縦に動かす。

「うゝん、別に僕は構わないけど、その大きさじゃ不便だなゝ」

「ガウガウ！」そう言っただけで狼はみるみる小さくなって、50cm位になった。

「おお！それなら、持ち運びができるよ。そうだ、ここにおいで」

僕はそう言っただけで胸の中に入るように促す。

狼はトテトテ歩いてきて、秀太の胸の中に入る。首だけをちょこんと出しているのが可愛い。そして、毛がふわふわのもふもふだ。最高すぎて眠く…いかんいかん、目的を果たさなきゃ。秀太は自分を激励して城に目を向ける。どうやら魔王城は結界が張られている感じだった。…だから構造把握できなかった訳ね。この魔法、意外に欠点あるんだな。秀太はそう思いながら手を前に出す。

【その結界をなかったことにする】

結界は壊れる音も立てず消え去った。

「さあて、魔王狩りはじめますかゝ」

「ガウガウ！」

そして秀太は瞬間移動を使った。

「なにものだ、そのアリよ」静かに響きわたる声が聞こえた。

秀太は周りをゆっくり見渡す。正面に王座に座る男が居て両脇に…女の人を抱えている。そして横には側近が居て、王座に続く道は、兵士がずらりと並んでいる。

「聞こえなかったのか、人間のアリよ。貴様はなにものだと聞いている」男が言ってきた。

「ああ、それ僕のこと？」

「貴様以外に誰がいると言うのだ？人間のアリよ」男は秀太を見下してくる。

「人間なのか、アリなのかはつきりしてほしいんだけど…」

「ならば、アリよ貴様はどうやってここに来た？」

「えっ？僕がアリにみえるの？…医者を紹介しようか？」心配なので聞いてみる。

「…馬鹿にしているのか貴様は！！」

「馬鹿にはしてないけど…」

「馬鹿にしてるではないかー！！こいつを殺せ！！」男が兵士たちに指示を出す。

【お前の存在をなかったことにする】

僕は兵士達が襲いかかる前に魔王を消した。

「魔王様？」男の隣にいた人が訳がわからないという感じだった。

「あなたは一体何をしたんです？」

何故かその人は落ち着いた感じで言う。

「いや、魔王をこの世から消しただけだけど…」

「「「フアアアアーーーー！！！！」」」

城中から大歓声があがる。

秀太はいきなり起こった歓声にびっくりしてその場で呆然とする。

「あ、ありがとうございますあなたは私たちの救世主です！！」

「い、いや…よかったね」

「はい！これでこの国にも平和が訪れます。おい、お前たち宴の準備だ」

「「「はい！！」」」

「えっと、僕はこれで…」そう言って、城を出ようとするが…何故か魔法が使えなかった。

どういうことだ？。…あれ、なんか暗く…。秀太は突然倒れた。

——ここはまたあそこ？

秀太は周りを見渡す…いた。黒髪黒目の女の人

『お久しぶり、でいいのかしら？』女の方はくすくす笑いながら言ってくる。

——いやそうでもないと思うけど…

『あらそう、あなたには言わなくてはいけませんね』唐突に言ってくる。

——何をさ？

『あなたにあげた魔法はすごく魔力を消費するということよ』

——今更ですか？遅いですよ

『あら？怒らないの』女の方は不思議そうな顔で聞いてくる。

——あの時は時間がなかったって言ってたし、この魔法を使い切れてない僕も悪いし…

『あなた優しいのね。ホントあなたでよかったわ』嬉しそうに言うてくる。

——僕でよかった？どういうこと？

『それはまた今度ね』僕の頬に手で触れてくる…暖かい

『それじゃあ、またね。シュウタ』寂しそうにこちらを見ていた。

そこで僕は意識を失った。

秀太は目が覚めた。ここはどこだろう？

「あつ目が覚めましたか？」浅黒い肌の綺麗な顔立ちの少女がそこに居た。

「…あなたは誰？」

「申し遅れました。私はテリユート魔国王女、ナーレス」テリユートと申します。英雄王」

「英雄王？僕が？」

「はい！そうですわ、あなたはこの国を救ってくれた英雄ですわ」
嬉しそうに言ってくる。

話を聞いてみると、どうやらナーレスの義理のお父さんを秀太が倒した魔王が殺した。そこで絶対的な力をもってこの国を支配していた。魔王は戦争を起こしたり、国民に重い税金を課せたりなど、酷いことをやっていた。

「そ、そうなんだ。あつ！僕の中にいた狼は？」

「はい、それならあそこに」彼女が指差す先にいた。

狼はすやすやと気持ちよさそうに寝ていた。

「あの子は、あなたの傍にずっといたんですよ？」

「ずっと？…そういえば僕が倒れてどのくらいたつの？」

「え〜と二日ですね」

…やばいやばいやばい！！麻衣が皆が絶対に心配してる！秀太は冷や汗をかく。

「えっと、一旦国に帰っていいかな？」

「えっ！？かえられるんですか？まだ何もお礼をしていませんのに…」寂しそうな表情で言ってくる。

「また来るからさ、待っていてよ。お礼はその時でもいいでしょ？」

「…わかりました。お急ぎのようですし…でも絶対にまた来てくださいよ」「上目遣いで言ってくる。」

「もちろんだよ。また来るね」

秀太は寝ている狼を連れて城に帰った。

自分の部屋に着いた。ああ、いいね、このベットも。秀太は狼をおろしてベットでまた寝ようとする。

「お兄ちゃん？どこに行っていたの？」

そこには笑顔で立っている麻衣がいた。…目が笑ってないよ

「さ、散歩？かな」秀太はおそろおそろ言った。

「そうか、へえ、二日間も散歩するんだ、そんな散歩があるんだ、知らなかったな」

「い、いや、こんなに長くなるなんて思わなかったな」

「お兄ちゃんのバカーーーー！！！！」麻衣はそう言って秀太に殴りかかる。

「ぐぼっ!!」素直に拳を受けとった。

「うぐ、ひぐっ! ううつゝ誘拐されたと思ってたよ」麻衣はそう言って秀太に抱きついた。

「ごめん、本当にごめんなさい、もうどこにもいかないよ。次からはちゃんと相談する」

秀太はそう言って麻衣の頭を撫でてやる。さあて、終わったことだしそろそろ…と秀太は思って窓から出ようとする

「シュウタどこに行くんです?」僕は窓から脱出しようとしたところを止められる。

おそろおそろ振り返るとそこには、王女三人、メディア、メーブル、シャルがいた。

「…………シュウター…………!!!!!!」…………みんなして、そう叫ぶといっせいに襲いかかってきた。

ボコボコに殴る、蹴るの暴行を繰り返し、最後に僕が見たのはベツトの下でぶるぶる震えている狼の姿だった。

…帰ってきてよかったのかな秀太はそう思いながら意識を失った。

7話 騒がしい日常

魔王倒して、あれから五日がたった。その間秀太は、例のボコボコ事件により寝込んでいた。

秀太は二日間、目を覚まさなかった。

腫れは、宫廷魔法師による治療で治った。しかし今、秀太は監禁生活を送っている。

正直かなり暇です。抜け出したいけど…無理だよ。常時監視がついてまわる。…さすがに部屋の中まではついてこないけど。秀太はそう思いながらため息をつく。仕方ないので秀太は自分が使っている

【終始魔法】エンディレスについて考えていた。

この間、魔王の城の位置を把握するときは、城の位置だけ把握しようとした。要するに他の情報は入ってこなかった。全体を把握できると言ったが、実際どこまで正確に把握できるか分からない。

だから、今から試してみようと秀太は思った。

「よっ」スーッと頭の中に情報が入ってくる。部屋の外にいる見張りの兵士、メイドさんの数、城の構造、城の外の様子、城下町の様…

「ぐあー!!」秀太はあまりの頭の痛さに声を出した。

バンツ!!「どうかなさいましたか!？」兵士たちが慌てて部屋に入ってくる。

「いや、大丈夫だよ何でもないよ」

「そ、そうですか、顔色が悪いですが…本当に…」

「いや、大丈夫だよ。心配してくれてありがとうね」

「ハッ！それでは、失礼いたします」

兵士たちが出て行った後、狼が飛び出してきて僕を心配そうに見つめてきた。

「ありがとうね」僕はそう言って頭を撫でてあげる。

狼は「きゅん」と言いながら、喜んでいた。

魔法を使った結果だが、城下町に入った辺りから頭が痛くなった。ここからの距離は300mだ。

たぶん予想だけど、人間の脳の許容量を超えかけたから、拒絶反応を示したんだと思う。秀太はふーっと息を吐く。

「なるほどね」僕はそう言いながらベットに倒れこむ。

僕には【魔力】がないと言われていたが、あの女の人はある？みたいな口調で話していた。何が正しくて、何が間違っているのか…分からない、判断材料が足りなさすぎる。…当面の目標はもう決まっている。元の世界に帰ること、そのためにもまずは情報収集かな…今は無理か秀太はそう思ってまた眠りにつく。

秀太が帰ってきて、五日がたったけど、秀太が気絶した後が大変だった。秀太がボコボコにされて、倒れたあとベットのしたから白色の小さな狼がでてきた。狼が出てきた後、みんなの顔が引き攣った。

「こ、これは、【白銀狼】シルバーウルフではありませんか！！」レイが驚いて言ってきた。

「【白銀狼】？何それ？」

「こ、この狼は魔獣の中でもトップクラスに入る魔獣なんですよ！！全長は100mにもなるんですよ！！」

「でも、なんでお兄ちゃんに懐いているんだろう？」麻衣はかわいい威嚇が続けている。【白銀狼】に触ろうとする。

「い、いけませんマイ！！この子がいつ大きくなるかわからないんですよ！！」メープルがとめようと私の前に割り込む。

「えっ？かわいいからいいでしょ」別に「私はそれでも触ろうとするが、やはりとめられる。」

「とりあえず、シュウタが起きなければ、ことが進みませんね」シヤルがそう言って、宮廷魔法師呼びに部屋を出て行った。

宮廷魔法師が来たが：【白銀狼】がお兄ちゃんから退こうとしなかったため、治療が行えずにいた。

私は痺れを切らして、【白銀狼】に近づいて

「あなたは、お兄ちゃんのお友達？」私は尋ねた。

『この人は私の恩人だよ』

「えっ！？しゃべれるの！？」私は体の特徴から思わず言ってしまった。

『違う、頭に声を流しているだけだよ』

「そうなんだ…。それで恩人ってどういうこと？」

『この人が私を契約から開放してくれたの！』シロは尻尾をパタパタさせながら喜んでいた。

「へえ～お兄ちゃんが…」私は感心して頷いていると、

「マイお前は誰に話しているんだ？」シャルが怪訝な表情で聞いてくる。

「えっと…この子と話しているだけだけど…」

『他の人達にはきこえないよ』

「えっ？何で？」

『あなたは【魔力】が私の声が聞こえるレベルまで達しているけど、他の人達はダメみたいね』

「そっいえば、自己紹介がまだだったね。私は三城 麻衣、麻衣でいいよ」

『よろしくねマイ』狼はそう言つて、麻衣に抱きついた。

みんなはその様子を見てびっくりしていたけど、宮廷魔法師の人はホッとした様子で、秀太の治療を始めた。傷は癒えたけど、意識はまだ回復していなかった。…疲労が溜まっていたのだろうとのこと。みんなはやりすぎたかもしれないと、反省していた。そんなこんなでお兄ちゃんが目が覚めて、事情を聞いたが、怪我をしていたので手当てをしてあげただけつと言った。みんなはそれを疑わなかったけど、麻衣は秀太が嘘をついているとしか思えなかった。

こんな感じで大変だったけど、お兄ちゃんは何を隠しているんだろう？直接聞いてもダメだろうし、どうしようつと考えていてここ数日悩んでいる。…はやく強くなって魔王を倒さなきゃ。だが、麻衣の考えは一変する。

秀太が帰ってきて六日の朝、城中なんだか慌ただしかった。何かあったの？つとメーブルに聞いてみる。

「あ、それがですね。テリユート魔国を名乗る使いが国にきたんですよ」

「えっ！？魔王がいる人の国がどうして？」

「…どうやら、魔王が何者かに殺されたらしんです。詳しい話は私には分かりませんが…」

「…うそ、じゃあ何のために私達はここによばれたのよ…」

「…申し訳ございませんマイ」悲しそうにメーブルが言ってきた

「いや、ごめんね。魔王が倒されたのは嬉しいよね」

「それと、王様が王の間に来てほしいとのことなんですが…」

「なんで？」

「マイとシュウタに聞きたいことがあるとか」

私はなんだろう？と思いながら、王の間に足を運んだ。

「おお、きたか二人とも」王様はそう言ってきた。

「何か用ですか？」

「うむ、この者が黒髪黒目の人はいないかと聞いてきたからの」

よくく見てみたら魔王の隣にいた男だった。

「あ、あなたは英雄様ではありませんか？」

「…はっ？」「…みんなが声をあげる。」

秀太はすぐさま、側近さんの近くに行き、耳うちをする。

（僕が倒したことは黙っていてくれないかな）

（どうしてです？）

（僕的能力はみんなには内緒なんだよ）

（わかりました。それでは、魔王を倒した記念の招待状なんですが）

（わかった、必ず行くからこの場をなんとか誤魔化してほしい）

（お安い御用です）そう言って男は立ち上がる。

「申し訳ございません。どうやらこの人ではありませんでした」

「うむ、そうであつたか。」苦勞であつた」

「ハッ！それでは、記念式典の件どうぞよろしくお願いいたします」
そう言って男は出て行つた。

「ねえ、お兄ちゃん一体あの人と何を話していたの？」麻衣が疑いの視線を向けてきた。

「いや、ただね誤解を解いただけだよ」

「誤解？」

「うん、なんか僕が魔王を倒したんじゃないかって」

「えっ！？お兄ちゃん魔王をたおしたの！？」麻衣が大声で言ったため、大勢の視線が刺さる。

「あはは、違うよ麻衣、いいかい、ここから魔王の城までいつたい何日かかると思っんだい？」

「え〜と急いで行って六日、普通に言って八日くらいだよな？」

「僕が居なかったのはたったの二日、物理的に考えて無理でしょ？」

「う〜ん確かにそうだね〜」

「だから、僕は違いますよ〜って言ってあげたんだよ」

「そうだったんだ〜」

どうやら、今の説明でみんなも納得してくれたらしい。秀太はふ〜っと息を吐く。

こうして、なんとか誤魔化すことができた。そして次からは変装してから行動しようと心に誓った。

7話 騒がしい日常（後書き）

今回は日常を描いただけです。退屈だったでしょうか？

8話 契約と能力

王の間での騒動が終わり、秀太は今、中庭にいる。狼と契約するか
らだ。

魔獣は契約をしないと本来の力の半分も出せないらしい。魔獣たち
のほとんどは、契約をして主人と力を共有し合うとのこと。だから、
力を取り戻して、恩返しをしたいと狼は言っていた。

契約すると言葉が通じ合うことだから、【魔力】なくてもいいらし
い。

「じゃあ、契約を始めようか」秀太はそう言って、指を軽く切って
血を白銀狼に飲ませる。

ピカアーっとの体が光ってすぐにおさまった。…どうやら契約完了
のようだった。

『私の声わかるか？』白銀狼が言ってきた。

「ああ、分かるよっていうかメスだったんだね」

『レディに対してそれは失礼なんじゃないか？』

「ごめんよ」僕はそう言って狼を撫でてやった。

『くすぐったい』そう言いながらも身を寄せてくる。

「そう言えば名前なんていうの？」

『名前は決めてほしい。新たな私のご主人』

「君の名前はシロだ」

『シロですか…。気に入った！』

「どうやら、終わったみたいですね。シロが…とても羨ましいです」
レイがそう言ってきた。

「やっぱり、かわいいよなシロは」

『ご主人、定位置に入りたいんだが』シロがそう言ってきたので胸の中に入れる。

するとレイが「な、なんてうらやま…じゃなくて、なんでそこに入れているんですか…！」

「だって、ここがシロの定位置だし…」

『ご主人、なぜ気づかない？』シロがおかしなことを言ってくる。

「うん？何に気づくかはいまいち分からないが、とりあえず部屋に戻ろうか」

『やれやれ、今度のご主人は大変だな』シロはそんなことを言っていたが秀太は気にせず部屋に戻った。

監視何時になったらはずれるのかな。部屋に着いて、どうやって抜け出そうか考えていたが秀太すぐに思いついた。

「魔法を使って、変装すればいいか」そう言って早速取り掛かる。

【僕に金髪碧眼があつたことにする】

秀太は鏡の前に行くと顔立ちの整った外国人がそこにいた。

「えっ…これ僕!？」

『ご主人なかなかだぞ？もともと容姿がいいからな』

「うん、ありがとう?」

「よし、ではでかけようかな」

『ご主人私は連れていつてくれないのか?』シロは寂しそうな表情で言ってくる。

「そうだな。そのままの姿じゃまずいから…そうだシロを人間にすればいいのか」

【シロを人間に変身できるスキルがあつたことにする】

「シロこれで人間に変身できると思うからやってみて」

『わかった』

シロはみるみる人の姿になった。銀色の瞳に腰まである髪、整った顔立ちの女の子になった。

「ではご主人早速行くぞ」

「いやいや、待とうよその姿で外に出たらいくらなんでもまずいよ」

シロは裸だったのだ。それはさすがにそれはマズイ。

秀太は魔法でワンピースと自分の男用の服をだした。ついでに秀太の分も出した。

「ご主人ゴワゴワする、脱ぎたい」そう言ってワンピースを脱ごうとする

「いや、脱いだら城下町につれていけないよ?」

「…わかった我慢する」

「では、城下町に出発!」

僕とシロは城下町に向かった。

城下町についた。人目のつかないところに瞬間移動したけど…女の子が三人組の男の人に絡まれていた。

「いいじゃねえか、オレらといいことして遊ぼうぜ」「下品な笑みを浮かべていう。

「や、やめてください」

「いいじゃんすこしグベバツッ!!」秀太はとりあえず殴った。

「な、なんだこのガキは!!ぶつ殺してやる」二人目の男は秀太に殴りかかってくる。

しかし、シロが殴ってくる手を利用してそのまま、捻って手首を折った。ベキッ!って音が路地裏に響き。

「ギャー!ー!!腕、俺のうでゲブツ!」シロは男の腹を蹴り上げた

…7m位飛んでそのままグシャッといって地面に落ちてきた。

三人目の男は逃げようとしたが、シロに捕まり、ボコボコにされた。

「大丈夫?」僕はうずくまっている女の子に優しく声をかけた。

「あ、はい私は大丈夫ですけど…そのありがとうございました」

可愛らしい女の子でした。…この世界はかわいい子しかいないのか

な〜？

「あ、あのお礼がしたいんですけど…」女の子は遠慮気味に言う。

「え〜っと城下町を案内してほしいんだけどいいかな？え〜と」

「あ、申し遅れました。私はティアと申します。」

「僕はシュウ、シュウでいいよ」

「私はシロだ私もシロで構わない」

秀太は偽名を使ってごまかした。

「よ、よろしくお願いします。シュウ、シロ」ティアはペコリと礼する。

「よろしくねティア」

「よろしく頼むティア」

僕たちは案内をしてもらうことになった。

「とりあえず、道具屋から行ってみます？私の父が経営しているんですよ」

「そっなのかい？じゃあぜひお願いしますよ」

「はい、わかりました」ティアは嬉しそうに言った。

道具屋について店に入ると、大柄の男の人がいた。

「おお、ティアおかえり、その人たちはお客さんかい？」

「はい、そうです。男の人に絡まれているところを、シュウとシロに助けてもらったんです」

「そうだったのか！ありがとうございます娘を助けてもらって！」

「いえ、こちらこそ娘さんに町を案内してもらったわけですし……」

「ガツハハ！若者が謙遜するもんじゃないぞ？今日は娘が助けてもらったんだサービスするよ」

「ありがとうございますえ」と

「ガイド。よろしくなボウズ、嬢ちゃん」

「はい、よろしくお願いします」

「よろしく頼む」

僕は並んでいる商品を見た……やくそう？

「これ一ついいですか？」

「やくそう？まあいいがそんなのでいいのか？」

「ええ、これがいいです！」

「一つ銅貨だがもう一つオマケでつけてやる」

「ありがとうございます」

秀太はさっそく、やくそくを食べた。

「「えっ!？」」「三人に何故か驚かれた。

「マ、マズイ…」秀太はそう言って舌を出す。

「ボ、ボウズ何をしているんだ」

「シュ、シュウどうしたんです!？」

「ご主人、頭を打ったのか？」

三者三様の言葉を並べた。

「食べたら、回復するんじゃないの？」

「ボウズ、やくそくは、すりつぶして傷口に塗るもんだ。一体そんな知識どこで仕入れた？」

「…自己流？」

みんなに笑われた。

ここに、来てからお兄ちゃんはずくと忙しいそうだ。城内を歩き回ってメイドさんたちに食べ物もらったり、騎士さんたちの指導をしたり、お偉いさんたちの悪行を摘発したりなど、この国にとってなくてはならない存在になったりしてる。とにかく、私の相手をしてくれない。…寂しいお兄ちゃんに会いたいなと麻衣が思っていると、麻衣の目の前に金髪碧眼の王子様がいろんな食べ物を抱えていた。

「誰？不審者？」麻衣は警戒体勢をとる。

「ひどいな。実の兄に対してそれはないよ。」

「へえ！？お兄ちゃん！？」麻衣はかなり慌てた。目の前の王子様が…いや、麻衣は元の容姿から納得した。

「これ、おいしいよ。」そう言いながら麻衣に食べ物を差し出す。

「ありがとう…じゃなくて、なんでお兄ちゃんがここにいるの！？」

「麻衣の声が聞こえた」と思ったらここにいた」

「…私そついえば、お兄ちゃんがここに居ればな」と思ってた」

「…ねえ、麻衣今ほしいものない？」突然聞いてきた。

「えっ？ほしいもの？…そうだな。ここに来てお風呂入ってないか

らお風呂に入りたい！」

ここの国は湯船につかると言う習慣がなく、湯浴みしかない。

「それを自分の中で創造してみて」

「えっ？うん」

麻衣は言われるままに、広々い湯船を創造した…えっ！？自分の目の前に広々い湯船が広がっていた。…どういうこと？

「たぶん、麻衣の魔法は創造するだけで、なんでもできるんじゃない？」

「…すごいね」麻衣はそれしか言葉が出なかった。

「とりあえず、入ったら？」

「いや、丸見えだからね！？ここ中庭だよ！？」

「作ればいいと思うけど…」

「あっ！そうか」

麻衣は創造して大浴場みたいな家を作りました。

「男湯、女湯も作っておいたから」麻衣がそういうと秀太はとても喜んでいた。

「マイ〜！これはいったいなんですか？」レイが中庭に走ってきた。

「お風呂だよ。入ってみれば分かるよ。一緒に入る？」

「オフロ？…ええ、ぜひ。マイその隣のお方は？」

「お兄ちゃんだけど？」

「えっ！？マイにはもう一人、兄がいたんですか！？」

「レイ、僕だよ。シュウタだよ。やつぱり、こんなイケメンだったら、わからないよね」お兄ちゃんは落ち込みながら言う。

「いえいえ！！ち、違うんですよ？かつこよすぎて、じゃなくて、ああ、もう」レイは憤慨していた。

「とりあえず、入ろうよ？ね？」麻衣は悪い雰囲気壊すため促した。

「うん、そうだね。ってあつ！！シロを忘れてた！！」秀太はそう言って城の中に走っていった。

…こうして、麻衣は自分の魔法について分かった。…【創造魔法】
クリエイト
と呼ぶことにした。

浴場は人気があがり、美肌効果があるとのことで、女性達には大人気であったため、もう二、三個作った。

あのあと、お兄ちゃんが頭にシロに噛み付かれながら戻ってきたのはどうしてだろう？麻衣は疑問に思った。

8話 契約と能力（後書き）

妹はチートを手に入れました。それに気付くお兄ちゃんは何者？

9話 パーティー（前書き）

累計pv11939 ユニーク2137人 ありがとうございます。

これを糧に精進していきたいとおもいます。

ちなみに前回シロちゃんの口調が、契約の後変わっているの気付きました？

9話 パーティー

「お兄ちゃん準備できた？」

「できてるよ。それじゃ、行こうか」

麻衣は白のドレスに包まれて、綺麗な清楚のイメージを出す。うんうん、さすが麻衣。秀太はそう思いながら麻衣を見る。ちなみに秀太は黒のタキシードだ。

麻衣をエスコートしながら、会場に入る。

「ミシロ シュウタ殿 ミシロ マイ殿、お入りにられます」執事さんの声で扉が開いて、中に入る。

「綺麗〜天使みたい」

「女神様みたい」

「素敵〜嫉妬するわ〜」

会場が麻衣を見てざわつく。男の人たちは口をポカンッと開けたまま立っていた。

ダンスのお誘い多そうだな〜と秀太は苦笑いしながらその様子を見ていた。

「これは、これはシュウタ殿お久しぶりです。マイ殿もご機嫌麗しゅう」男が話しかけてきた。

「お久しぶりです。え」と

「これは失礼いたしました。アーサー・ノーウェルと申します。どうぞアーサーとお呼びください」

秀太たちはアーサーとの挨拶を済ませ麻衣をレイのところに行くように促し。本題に入る。

「誰にも言っていないよね？」

「もちろんですよ。そんなことを言ってしまったては立場が危ないでしょう？」

「僕だけでなく、他の人達に被害がおよぶのは嫌だからね」

「分かっておりますとも」

「あなた意外に顔がわかる人は？」

「私とナーレス様だけです。大丈夫ですナーレス様には見つけても声に出さないように言っておりますので」

「あゝ、僕が倒れて目が覚めたときにいた王女様のことね」

「そうでございます。あの、マイ様がお困りの様子ですが…」

麻衣の方を見ると男たちに囲まれていた。

「失礼します」秀太はそう言って麻衣のもとに行き、騎士の務めを

果たした。

しばらくしたら、ナーレスが出てきて出てきてみんなに向けて挨拶をする。

「お集まりのみなさん、今日はこのような会に来ていただき誠にありがとうございます。本日は魔王を倒されたシュウタ様が来ておられます」

「がはっごほっ！」喉にジュースを詰まらせた。

会場がざわつく。アーサーを見たら、啞然としていて、放心状態だった。

「今回、魔王を倒されたシュウタ様に乾杯」そう言って締めくくる。

「ちょっと、具合が悪くなったから、席を…はずせませんよね」「麻衣とレイの形相に何も言えなくなった。

「お兄ちゃん、ぜんぶ話そうか」麻衣がにこにこで言ってくる。

「シュウタ？全部話したほうが身のためですわよ？」「レイもにこにこで言ってくるが目が笑ってない。

「何を言ってるんだい？話すことなんて何もないよ」

「お兄ちゃん？私の魔法どんなのか知ってるよね？ほとんど何でもできるんだよ？」

「そ、そうかいでも」「【自白】」ああ、実は魔王倒したの僕なんだよね」途中、麻衣に魔法をかけられた。

「どうやって、倒したの」

「何いつてるんだい？た」「【自白】」僕の【終始魔法】エンディレスでだよ」

「それは、一体どんなのです」レイが聞いてくる。

「ここで、話すのはマズイ、あと、麻衣ここで魔法つかっちゃダメでしょ？」

「ごめんなさい」

…とりあえず、いろいろな人が麻衣の魔法を聞いたみたいだし、僕たちに関する記憶を消すか。秀太はそう思って手をあげる。

【スフィード王国以外の人達に僕たち二人に関する記憶を消す】

一見変わってないように見えるが、これで、魔王が僕が倒したこと、麻衣の魔法のことも消えただろう。

「お兄ちゃん、何をしたの？」

「とりあえず、二人とも僕について来て」

会場を出るとシャルがいた。

「シャルこんなところで何をしているんだい？」

「いや、そ、その、何でもない」

シャルは赤色のドレスに包まれていて、大人の女性を存分にだしていた。

「綺麗だね。中に入ったら誰もが話しかけてくると思うよ？」

「そ、そうか！ありがとうシュウタ」シャルは顔を赤くしながらも喜んでいた。

「そうだ、シャルにも話したほうがいいね。ついて来て」

「お兄ちゃん、で【終始魔法】^{エンデイレス}って何？」

秀太が淡々と説明をして、それを聞いた麻衣たちは青ざめた。

「それでは、シュウタは国を消せるんですか！？」レイが驚愕しながら言ってくる。

「消せるって言う確証があるだけで、僕の【魔力】が持つかかわらないよ」

「お兄ちゃんは【魔力】なかったんじゃないの？」

「…僕の中に何かがあるんだけど、それが何か分からないから【魔

力』って仮定してる」

「シュウタ、お前はさっき会場にいる人達の記憶を消したが良かったのか？」シャルが心配そうに言う。

「僕だけが狙われるのは別に構わないけど、僕のせいで他の人は巻き込めないよ」

「しかし、魔王を倒したことも、思い出もなくなるんだぞ？」

「問題ないよ。所詮、僕に関しての記憶だしどうでもいいと思うけど？間違ってた？」

「「なっ！？」」「レイとシャルは驚いた。

「心配しなくていいよ。麻衣だけに危害を加えなければそんなことしないよ」

「シュウタは…他の人達にとって、大切な人かもしれませんよ！？」レイが叫ぶ。

「…麻衣かレイどっちかを選ばないとどちらかが死ぬ。というのがあったでしょう」

「お兄ちゃんも正しいよ。そこまで」私はそこで止めた。

「麻衣？どうしたんだい？」不思議そうにこちらをみてる。

「レイ、お兄ちゃんはそんな状況に絶対にさせないし、ならないよ」泣きそうなレイにそう言う。

「たえそんな状況になったとしても、絶対最後の最後まで二人が助かる方法を探すと思うよ」

レイはその場から、走り去っていった。

「レイ様お待ちください」シャルもそう言いながら、レイに続いた。
そして、お兄ちゃんと二人っきりになった。

「どうして、あんな突き放すこと言ったの？」

「…自分との距離を縮めてくる前に突き放したほうが楽かと…」

「お兄ちゃんのバカ！！なんで気づかないの？」

「気づかない？何を言ってるんだい？」本当に気づいてない様子だった。

「…レイに聞いてみたら？お兄ちゃんのことをどう思っているか？」

「レイに？僕のこと？」

「そう、聞いてきて今から！」そう言って私はお兄ちゃんの背中を押す。

レイに聞けって言われたけど、どこにいるんだろう？秀太は会場に再び入り、レイを探す。

「いた」レイは外のテラスで空を見上げていた。

「レイちよつと話したいことがあるんだけど」

「シュウタさつきあのようなことを言って、よくレイ様の前に現れたな」シャルは静かに怒っていた。

「シャル、席をはずしてもらえませんか？」レイが言う。

「しかし…わかりました」シャルはそう言って出て行った。

「話ってなんですか？」

「さつきはごめん、言いすぎたよ」僕はそう言って頭を下げる。

「いえ、もういいですわ」レイはそう言ってこちらを向く。

「えっと、そのレイは僕のことどう思ってる？」

「えっ！？へっ！？いや、その…」かなりうつろたえていた。

「やっぱり、嫌いなのかい？」

僕がそういうとレイは抱きついてきた。

「そんなはずがありません。私はシュウタのことは好きですよ。大切な人です」

「そうなんだ…ありがとう」

僕はまた、人を信じていいのだろうか？

こうしてパーティーは幕を閉じた。

9話 パーティー（後書き）

お兄ちゃん何があつたんでしょうか？

10話 過去と決意（前書き）

スイマセン、今回は短いです。

10話 過去と決意

過去、いい思い出や、思い出したくもないものさまざまある。

秀太には生まれつきの、呪いがある。それを僕は【戦者】^{ファイズ}とよんでいる。

これは二段階に分けられていて、一段階目は本気を出そうとするときに出るものでシャルと戦ったときにでるやつだ。これは【冷者】^{アイス}とよんでいる。このときの秀太は集中力がかなり上がり、冷静に対応できる。

二段階目は戦闘でテンションが上がってきたり、感情が爆発したときに出る。

これを【狂者】^{バーサーカー}とよんでいる。これはただ純粹に戦闘を楽しみ、戦闘以外どうでもよくなる。対象が倒れる、戦闘不能になるまでいたぶる。

正直いらない。これが分かったのは、5歳の頃で秀太の家の道場になった。秀太はそのときのことは覚えていない。言い忘れていたが、秀太の家では道場をしている。国公認の武術で警察や警備関係の人が多い。

秀太の父は秀太とよく似ていると言われる。兄弟？と間違われたりしたりする。性格も同じで温和だ。

秀太の母は麻衣とよく似ていて、姉妹？によく間違えられる。いつもにこにこだが怒った時は、世界で一番強いと言われている父を子供扱いするほどになる。

秀太は守らないといけない約束がある。

1、家族が本気を出していいと許可しないと出してはいけない

2、むやみに戦闘をしてはいけない

3、自分が危険な時、困っている人を助けるときは使っていていい

これをいつも秀太は守っている。

家族はみんな優しくて、大好きだ。秀太はずっと守りたいと思う。

だけど、友達はいらない。あんな辛い思いをするくらいなら、作らないほうがいい。

あれは、中学二年生の時だった。秀太は放課後忘れ物を取りに教室に戻っていた。

ドアの向こうに人がいたので、声をかけようと思ったがみんなが真剣に何かを話していたのでそれが終わるまで、廊下で待っていていようと思った。

教室には小学校からの親友と数名の男子がいた。

「なあ、あいつのことどう思う?」「Tが言った。

「あいつ? ああ、三城のこと?」

「ああ、俺あいつのこと嫌いなんだよね」秀太はこのことを聞いて、驚いた。

俺も俺もずっとみんなTに賛同していた。

「だって、あいつがいるとさ〜好きな子、み〜んなあいつのところにいくんだぜ?」

「しかも、仲良くしないと女子に睨まれるしな〜」

何で? 僕は疑問に思う。みんな、楽しそうに笑うし、小学校のときも同じだったのに…秀太は愕然とした。

「あ〜あ、あいつ消えてくれないかな〜転校でもいいからさ〜」Tがそんなことを言う。

みんながそろそろと教室から出てきた。

「しゅ、秀太? お前まさか…」Tが驚いていた。

「僕は、みんなのこと友達だと思っていただけ、僕の勘違いみたいだったね」

「違う! そ、そんなことはない。あ、あれは冗談だ」そう言うてるが、そうは思えなかった。

「…もうどうでもいいや」秀太はそう言って、走ってその場から逃げた。

何かＴが言ってくるのが聞こえたけど、無視をして学校を出た。

小学校からみんなと一緒に遊んでとても楽しかった。中学校もそんな感じだろうと思っていたけど、どうやら違ったみたいだった。秀太は自分の部屋の中で思った。

夜になるとＴから電話がかかってきた。秀太はあまり出たくなかったけどでた。

内容は今までと変わらないで接してほしい。…ふざけるな、秀太はそう言ったがＴは泣きながら、懇願してきたので承諾した。

次の日の学校、苦痛でしかなかった。嘘、嘘、嘘、偽りの世界でしかなかった。

秀太は自分に嘘の仮面をつけた。いつしか秀太は嘘をつくのが得意になってしまった。

秀太は考える。この世で本当の絆はあるのだろうか？

そして、秀太は見つけた。そう、家族だ。いつも、みんな優しくしてくれ、傍にいてくれた。

そして、家族を守ることを決意し、嫌だった道場の稽古をした。【ファイス戦者】のコントロール、近接格闘の技術を学んだ。

麻衣が中学生になったあたりから、いろんな男が絡むようになったので、秀太は全てから守った。そして、稽古をつけて半年、当主である父を越した。

父は笑いながら「僕の数十年がこつも崩れるとはね」と言っていた。
…少し寂しそうでもあった。

そして、秀太は心に誓う。家族を何があっても守り、助ける。

それが、僕の定めだ。

『いい話だったわ』黒髪黒目の女の人が言う。

——なんで、ここに僕がいるの？てか、いつから聞いてたの？

『最初からずっと聞いてたわ』

——恥ずかしいな

『でも、辛い過去があったのね』女の人が悲しそうな表情で言う。
くる。

——そうかい？

『私はあなたを裏切ることなんて絶対にないわ』

——ありがとう、うれしいよ…そろそろ名前ないと不便だね。

『聞けるかしら？私の名前はローズ——よ』

——ローズだけ聞こえた。

『ホントに？うれしいわ、私のことはローズでいいわよ？』

——わかったよ、ローズ。最近ここにいる時間が延びたような？

『ええ、延びているわ。これもあなたのおかげね』うれしそうに言ってくる。

——ねえ君はいつたい何なの？

『私はあなたを助けるため、ここにいるの』

——この間言っていた。【七神柱】セブンスゴッドって何？

『それは、組織の名前。私を閉じ込めた組織よ』

——そうなんだ。…それじゃこの異世界から帰る方法は？

『ごめんなさい、それはわからないわ』悲しそうに言った。

——そうなんだ。じゃ、自分で探すしかなさそうだね。

『私もできる限り協力するわ。そろそろみたいね。じゃあまたねシユウタ』

——またね

秀太は意識をおとした。

秀太は目が覚めると夜だった。昼から寝ていたのでずいぶん時間がたっている。

ここは、自分の部屋だ。あのパーティーから八日過ぎている。今日の昼に城についてそのままばかりとベットで寝てしまった。

んっ？窓の外に人影が…秀太は気になって、窓を開ける。するとそこには、ふわふわ浮かんでいる。青髪青目の少年がいた。

「はじめまして、シユウタ。僕は【七神柱】セブンスゴッドウオータネス水柱所属 ケイブリッチだよ」

「…【七神柱】がいったい何のよう？」

「君を組織に入れにきた」

「僕にその組織に入るメリットは？」

「願いを一つ叶えてあげるかな」

「もとの世界に帰るは？」

「んっ、それはわからない君たちをよんだのは組織だし」

「…君たちの組織が僕たちを呼んだ？」

「正確には、君だけをよんだつもりだったらしいけどね」

「なんのためにこんなことを？」

「さあ？たぶん暇つぶしなんじゃないかな？上の人たちが考えていることなんて知らないよ？」

「暇つぶし？そんなことのために、ここによばれたのか…」

「まあどうでもいいじゃないか、それよりどうするの？」

「断る。そんな狂った組織なんかに入りたくない」

「そうかい、残念だね。まあ、今回は話合いだけが目的だしこれで失礼するよ」

「逃がすと思う？」

「捕まえないと思うよ？」

【その存在をなかったことにする】

消えた。と思ったが正体は水だった。…あれは水でできた分身だったんだ。秀太はそう思いながら空を睨みつける。でも、いろいろと分かったことがある。…とりあえず、【七神柱】なんか帰る方法を知ってそうだな。

——僕をよんだことを後悔させてやる。秀太はそう思いながら窓をしめた。

10話 過去と決意（後書き）

9 / 26 嫌だった。↓嫌だった に修正しました

11話 依頼を受けよう

最近、お兄ちゃんの様子がおかしい。あの、パーティーから帰ってきてから何か隠している気がする。

心配なので、監視の魔法をお兄ちゃんにばれないようにかけた。大丈夫かな？お兄ちゃん…麻衣はに思った。

とりあえず、【七神柱】セブンスコッドについて色々調べまわったが、手がかりがない。

少数派で動いているのだろうか？それとも、別の組織の名前で動いているのか分からない。目的がはっきりしていれば探しようもあるが…秀太はずっと考えていた。

『ご主人、少し休んだらどうだ？』

「いや、大丈夫だよ。心配しないで」

『そうか、でもあまり無理はしないでほしい』

「ほどほどにするよ。…それよりもこの国では情報が得られないから、この国を出ようと思うんだけど」

『そうか、私はご主人の意向に従うよ』

「そのためには、武器をそろえなきゃな」

ナイフを持っているが、これ一本というわけにはいかないだろう。

「作るしかないかな。…やってみるか」

【刀と銃があつたことにする】

秀太がそう唱えると刀が出てきたが…あれ？銃…は？秀太はそのまま、意識を失った。

『ご主人！ご主人しつかりせんか』

そんな声が聞こえてきたので、ゆっくりと目を覚ます。

「あれ？何で寝てたの？」

『…たぶん、【魔力】が一時無くなったのだろう』

「なくなったのか。二つ同時は難しかったかな」

『一つ分できる【魔力】がご主人の今の限界なんだろうな』

「そうなんだ。まだまだだな」

『その剣は使えるのか？』

「ああ、多分大丈夫なんじゃないかな。僕が愛用していた刀と同じだし」

『ほう、そうなのか、ご主人の国は変わってるな』

「とりあえず、実戦で使ってみたいな。あとお金も稼がないといけないし」

『なぜお金がいるのだ？』

「それは、この国を出るからさ。お金は旅にはいるだろう？」

『そうか、ではギルドに行ってみてはどうだ？』

「ギルド？もしかして、依頼をこなしたら報酬がもらえるやつ？」

『そうだ、行ってみるか？ギルドに』

「うん、行ってみよう。実戦で刀使えて、お金も稼げる。一石二鳥だね」

『しかし、ご主人はお金も作れるのでは？』

「…そうだった。そうだよな」

『ご主人、考えればすぐわかるのでは？』

「でも、今は【魔力】ないから無理だね。ギルド行くしかないよ」

『あいかわらずゆるいなご主人』

「ありがとう?...とりあえず、人の姿になつて」

『褒めてないぞご主人、まあいいか』そう言つて人の姿になり、服を着る。

秀太も金髪碧眼に変わる。

「では、行くかご主人」

「りょゝかい」

秀太は瞬間移動でギルドに向かった。

ギルドに着き、中に入るとたくさんの人で賑わっていた。

受付の女の人の所に行き、説明を受ける。

ギルドには、ランクがありG、F、E、D、C、B、A、Sと分かれており、ある特定のギルドポイントが溜まるとランクが上がる。Dは一般でCがベテランと言う感じで、Sは国に数人といったところ。依頼はG、Dは誰でも受けれる。C、AはD以上が受けれる。当たり前だが、死んだら自己責任だ。

「こちらが、証明書です。なくしたら、再発行に5銀がかかります」

秀太とシロは生徒手帳くらいの大きさの証明書を受け取る。ちなみに登録した名前はそれぞれ、シュウタとシロだ。

「あちらがギルドの依頼の掲示板です。あちらから持ってきてください」

「わかりました」

僕達はさっそく依頼をさがす。…なんだこれ？

僕は張り紙をじっと見る。

ランクD 討伐 グリンポス

報酬 4金貨 パーティー必須

これは、みんな宛という感じがな。パーティーかどうしようかな？

「あんた達、この依頼を受けるの？」そんな声が聞こえたので振り返るとブロンドのポニーテールの少女がいた。

「そうしようと思ったけど…パーティーが…」

「ならよかった！！私も今探していたの！！」いきなり手をつかまれる。そしてシロに睨まれる。

「と、とりあえず落ち着いて？君は一人なの？」

「いいえ、もう二人いるわ！よかった数が揃えば勝てそうだし」

そのまま、少女に手を引かれ、仲間のもとに連れて行かれる。

美少年とフードを被った少女がいた。

「紹介するわ、こっちが私の兄のアレクスと妹のライムよ」

「はじめまして、兄のアレクスです。よろしくお願いしますね」爽やかボーイ、イケメンボーイのアレクスに挨拶される。

「わ、私はライム…です」フード越しからちらつと顔が見えたが、顔整ってましたよね？

「そして、私がファンよ。短い間だけどよろしくね」

「僕はシュウタ、こちらこそよろしくね」

「私はシロだ。よろしく」

「アレクスかっこいいな」

「あのかっこいいな…ってあなたの方が顔整ってますよ？」

「ありがとう。お世辞でもうれしいよ」

「いや、あの…」

「アレクス、この人に何を言っても無駄だぞ？」シロが言う。

「…シュウタ、あんたもしかして天然？」ファンが言う。

「天然？どう見ても違うと思うけど…」

「…そう、でも今の発言で確信したわ」

「そうかい？」

「…とりあえず、今後について話し合おう」アレクスが言う。

出発は明日の明朝で集合場所はここの外、馬車はアレクスが用意するらしい。

「じゃあ、今日は解散ね。また明日」ファンはそう言うと言つて兄妹たちと出て行った。

「とりあえず、銃が作れそうだね」明日までなら」

「そうだな、とりあえず今日は帰ろう」

「わかった」

秀太たちもギルドを出て瞬間移動で部屋にもどった。とりあえず、明日は出かけるね」と麻衣とメディアに伝えた。麻衣は私も行く！」と言ってきたが今回はダメ」と言つてあきらめさせた。…二時間かかった？

部屋に戻つて、銃を作った。ハンドレーザーガンにした。威力はどのくらいか知らない。実戦で試すしかなさそうだ。

すべて明日しだいということで、秀太は寝ようとしたら、レイが入ってきた。

「あの、一緒に寝ていいですか？」何故か顔が真っ赤だった。

「いいけど…眠れないのかい？」

「は、はいそうです。そうなんです」しきりに首を縦に振っていたが顔は真っ赤のままだ。

「どうぞ」そう言っただけで隣をあける。

「し、し、失礼します」そう言っただけで横に入る。

「じゃあ、お休み」

「えっ！？はいお休みなさい…ぐすんっ」

秀太はそうして眠りに着いた。…ベットの下からものすごいプレッシャーがきたが気にせず寝ることにした。

次の日の明朝、レイを起こさないようにそっと抜け出して、城を出た。

秀太が部屋を出る前シロに頭を噛まれた。痛かった。どうして噛んだの？と聞いてもそっぽを向いて教えてくれなかった。

「おそ〜い！！なんでおくれたのよ！！」ファンが怒ってた。

「いやシロに…僕が寝坊しました」秀太はシロに睨まれたので言い直す。

「あんだね…まあいいわ、早く乗りなさい！」

「おはようございますシユウタ」アレクスが声をかけてくれた。

「おはよう、アレクス」

「その、お、おはようがざいます。シロさん」顔を少し赤くしながら言う。

あれ？アレクス惚れたのだろうか？秀太はそう思う。

「ああ、おはよう」シロは気付いていない様子だった。

馬車に乗り込むとフードをとったライムがいた。

「おはよう」

「…おはよ」小さく挨拶を返してくれた。

「さあ、出発！！」ファンの号令とともに馬車が動き出す。

馬車はアレクスが運転してくれた。

「ねえ、そういえば、なんで三人で旅してるの？」秀太は言う。

「旅ではないわ、修行よ」ファンが言う。

「修行？それは強くなるため？」

「そう、強くなって憧れの魔法騎士団に入るのよ！！」

「三人とも？」

「いや、ライムは宮廷魔法師、アレクス兄は騎士団よ」

「お、お姉ちゃん、恥ずかしいからあんまり言わないで…」

「あら？いいじゃない、減るもんじゃないし」

「そ、そういうことじゃなくて…」

「へえ〜三人とも立派だね〜。なんでまたファンは魔法騎士団に？」

「隊長のシャーサル様に憧れているからよ！…でも最近誰かに負けたって聞いたわ」

「負けたんだ〜。一体誰に負けたんだろ？」

「知らない、けど、勝ったやつはインチキに決まってる。私がぶっ倒してやる！！」目をギラギラ燃やしながら言ってきた。

「応援するよ。頑張ってね」

「うん！ありがとう。…そういえば二人はどのくらい強いのか？できれば戦ってみたいな」わくわく顔で言ってくる。

魔王は直接すぎだし、てか魔王の名前なんだっけ？ハーレムだったし…それでいいか秀太はそう思う。

「ハーレム王より強いよ」

「誰よその人！？基準が分からないわよ！」

「…変態王とも言っ」付け加えておいた。

「だから知らないわよ！！あんた何言ってんのよ！？…シロは？」
秀太をじと目で見てシロにふる。

「変態王の次に強い」シロはどうやら分かってくれたようだった。

「…私、選ぶ人間違えたかしら…」目頭を指で押さえながら言っ。

「シロちゃんはそういえば普通の服なの？」ライムが言っ。

「動きやすいからだ。…本音を言えば服もいらない」

「えっ！？はっ！？」ライムちゃんは顔を真っ赤にしていた。

「ご主人が無理やり服を着せたんだ」

「ご、ご主人！？あ、あんたそういう趣味？」ファンが蔑んだ目で
見てくる。

「いや、シロがそう言っただけで、僕が呼ばせているわけじゃないよ」

「うむ、そうだ。…ご主人、その…今度からシュウタと呼んでいい
だろうか？」

「うんいいけど、それは別に」

「そ、そうか！ありがとう」なんか、かなりうれしそうだ。

「しかし、普段から着てない服を急に着るのはなれないものだな」

「おい、シロ」秀太は慌てて言う。

「ッ！」「二人とも声にならない声を出して、ファンがシロを抱き寄せながら秀太から離れる。

「シロ…あんた普段は服着てないの！？」

「ん？着てないが、それが普通ではないか？」

「…最悪最低、女の敵！！変態王はお前だ！！！」めっちゃ睨まれ怒られた。

「こいつ、降ろそう！！今すぐ降ろそう！！」

「まてまて、誤解だ。いろいろと間違っている」

「間違っているのは、お前だ！！！！！！！！」

「…シュウタ最低」ライムに、ぼそつと傷つくことを言われた。

アレクスには聞こえていないからよかったのかな？秀太はそうおもった。

12話 依頼を受けよう2（前書き）

最近、テスト勉強が忙しすぎて死にそうです。

12話 依頼を受けよう2

二時間ほどしてから、馬車を降りて今は森の中を歩いている。

「あの…その…」秀太はそう言つて声を何度もみんなに掛ける。

ギンツ！つと何回も睨みつけられる。

今は馬車を降りて、森の中を歩いている。グリンポスは森に生息しているらしい。

「シュウタが何かしたのか？みんな様子がさっきからおかしいぞ？」
シロが困り顔で言う。

「いいんです！何も言わないでください。まさかこんな人とはおもいませんでしたよ！」アレクスが僕を軽蔑な目で見る。

馬車を降りた後、ファンが秀太が変態王と言つことを伝えた。アレクスはシロを秀太から守るように行動をする。

誤解なんですよ！つと何回も言つても聞いてもらえず。5mくらい離れたところからちよこちよこ秀太はついていつてる。

ついでに、図書館で調べた売れる薬草を見つけるので結構うれしい。

「いた！！あそこよ」ファンが指で示す。

指を示した先には、体長5mの緑色の恐竜がいた。

「作戦を立てるわ…あんた抜きで」秀太を睨みながら言う。

「なぜシュウタを除け者にするのだ！それはおかしいぞ！」ついにシロが怒った。

「あの人はあなたに変態的行動をさせていたのよ！？どうしてそれがわからないの？」ファンが言う。

「服を着ていないのが何が悪いと言うのだ。私はシュウタを味方するぞ！！」

「…あなたそこまで洗脳されているのね」

「シロさん、大丈夫ですよ？僕がいますから、あの人をここから追い出しても構いませんし」アレクスが言う。

『シュウタもう我慢ならん！！あのことを言っけなていいか？』シロが念話で伝えてくる。

「ダメだ。僕はいくら貶けなされてもいいからよ。シロがこのことで危険になるよりいいよ」

『お前は悔しくはないのか！？』

「悔しくないよ。どうも思わない」

『…そうか、わかった』そう言ってシロがしょんぼりとする。

「お、お姉ちゃんあれ!!」ライムが急に叫ぶ。

「あ、あれは…グリーンドラゴンだわ!!」

全長は20mくらいある緑色のドラゴンだった。

グリーンドラゴンはグリーンポスの前に着地して、ガブリっとそのまま食べた。

そして、こっちに顔を向ける。

「ギャオオオオオオオ!!!!」っと咆哮をあげてこっちに走ってくる。

「やばい、みんな逃げて!!」ファンがそう言ったのと同時にみんな走り始める。

しかし、ドラゴンのほうが足がはやく、300mくらいの距離が200mくらいになっていた。

「きゃ!」そう言ってライムがこけた。

「「ライム!!」「アレクスとファンがライムに駆け寄る。

そうしているうちに100mくらいになる。

「私たち死ぬのかな…嫌だよ…」ファンが涙を見せる。

「死なないよ」秀太は言う。

「えっ？」ファンが秀太を見る。

「僕が死なせない。困った人は助ける！！」僕はそう言って刀を抜き、50m先にいたドラゴンの片足を速攻で斬る。

ドラゴンはそのままだバランスを崩し横に倒れる。

「おい、トカゲ野郎。…そのままだったほうがいいぜ？」
【冷者^{アイス}】
になった秀太は言う。

「ギヤオオオオオ！！」片足ながら立ち上がろうとした瞬間、もう片方の足を斬って、秀太はドラゴンの首に移動して首を斬った。

ドンッと首が地面に落ちて、戦闘が終わった。

ライムがつまずいてこけて、駆け寄ったときドラゴンは50mと近くにきていた。

「私たちここで死ぬのかな…嫌だよ」我慢できなくて泣いた。

「死なないよ」そんな声が聞こえた。

「えっ？」

私が振り返ると秀太がいた。

「僕が死なせない。困った人は助ける!!」そう言って、一瞬でドラゴンの片足を斬った。

何？あの人？いったい何者？どうやってあそこまで移動したの？ファンはいろいろと疑問が浮かんだが、ドラゴンが立ち上がるうとしたとき、もう片方の足を斬ったと思ったらしいのか首まで切れていた。

「ねっ？いったでしよ死なないって」いつもの優しい雰囲気ですべてくる。

「えっ？えっど？その・・・」

「ごめんね？怖いよね、あんなもの見たら」悲しそうな表情で言うてくる。

「ちがつ違うわよ！あなたのこと怖くなんかない！」

「そうかい？ありがとだね。…シロもう帰ろうか」

「…そうかわかった」

「ま、待って!!」ファンは必死に声を掛ける。

二人は振り返る。

「そ、その…助けてくれてありがと。それと疑っていてごめんなさい」ファンはそう言って頭を下げる。

「ありがとうございます。シュウタそれとご迷惑かけてすみませんでした！」

「シュウタお兄ちゃんありがとうございます。そしてごめんなさい」

「いいよ。気にしてない。兄妹三人仲良くね」そういつて手を振ってくる。

そしていつの間にか姿が消えていた。

またあえるよね？シュウタファンは居なくなつたところをぼーっとして思った。

部屋に瞬間移動してソファに座つた。シロはもとの姿にもどって秀太の横にくる。

『シュウタ、どうして助けたのだ？助けなくてもよかっただろう？』

「ああ、そうだね。でも世界でたった一つの兄妹でしょ？僕は妹がいるからわかるんだ」

『ほう、それはいいんだ？』

「絆だよ。僕は三人の絆が見えたから助けたんだ」

『絆か…私とシュウタにも絆はあるのか?』シロが不安そうに見つめてくる。

「あるよ。ちゃんとある。いつもありがとねシロ」秀太はそう言つて頭を撫でてあげる。

『ど、どういたしまして』うれしそうに目を細める。

「シュウタ! 帰ってきたの?」部屋の外からメディアの声が聞こえた。

「ああ、帰っているよ」

「失礼します。シュウタ帰ってきたのなら声をかけてよ!」顔を膨らませながら言うてくる。

「ごめんよ、次から気をつけるよ」

「あら、声がすると思つたらおかえりになられたんですね?」メーブルがそう言うて入ってきた。

「シュウタ! 帰ってきてたんですか!」レイも入ってきた。

「シュウタ、いたのか。居たのなら訓練に顔をだせ」シャルがレイと一緒に入ってきた。

「ああ、今帰ってきたんだ。訓練は後で行くよ」

「だまっていなくなるから心配したんですよ?」レイが言う。

「一応、麻衣には昨日言っていたんだけど…そういえば麻衣は？」

「お兄ちゃん！？レイと昨日一緒に寝たんだったって？」麻衣がそう言いながら入ってくる。

「「「はっ？」「」レイ以外の三人が声をあげる。

「ああ、そうだが…レイから聞いたのか？」

「えっ？私言ってますんよそんなこと」

「えっと…それはその…」ばつ悪そうに下を向く。

「そ、そんなことより、ほ、本当に一緒に寝たんですか！？」メーブルが顔を真っ赤にしながら聞いてくる。

「そうだけど…何か悪いのか？」

「…シユウタ、貴様レイ様を連れ込んだのか！？」シャルは剣を抜き秀太の首筋にあてる。

「いやいや、レイが眠れないからってきたんだよ」

「レ、レイ様？」

「そ、そのやましいことは何一つされてないし、してないよ！？」

「うらやま…じゃなくて、権力乱用ですね。レイ様」メーブルが笑顔で言う。

「いくらレイ様でも、許しがたい行為ですね？」メディアも笑顔で言う。

「そのまま寝ただけだよ？」

「それでもうらやましいというか」メディアがぶつぶつ何か言った。

「麻衣、私には魅力がないのでしょうか？」

「そんなことはないよ。お兄ちゃんは誰であつてもしないから」

麻衣とレイがなんか話していたが秀太には聞こえない。

「そうだ！今日はみんなと一緒に寝ましょう」メープルが提案してくる。

「……さんせうい」「……」シャル以外は賛成のようだった。

「レイ様！さすがにそれは……」シャルが言う。

「あれ？シャルと一緒に寝たくないの？」レイが悲しそうな表情をする。

「そんなことはありません！一緒にさせていただきます」即答した。

「んじゃ、ベットとか準備しませんとね」メープルは部屋から出て行った。

少しすると、城の使用人たちがベットを抱えて部屋に入ってきた。

『シュ、シュウタなんの騒ぎだ！？』シロが起きた。…撫でていた
らいつの間にか寝ていた。

「今日、みんなここで寝るらしいよ」

『な、なんだと！？』シロはかなり驚いていた。

そして、ベットの設置が完了した。

「これで、みんな寝れますね」メーブルが言う。

「シュウタ、訓練に行くぞ」

「ああ、わかった」秀太はそう言って部屋を出た。

13話 一つのミス

「シュウタ…その髪と目の色…変えたらどうだ？」シャルが顔を赤くしながら言う。

「…忘れてたよ」秀太はそう言って、髪と目を元に戻した。

フツフツとシャルが息をついた。

「どうしたの？何かあった？」

「い、いや何でもない！」手を顔の前でブンブン横に振る。

「そう？ならいいけど」

そっぴいながら、訓練所に向かった。

魔法騎士団の訓練所に着くと、豪華な装備をしている中年の男が見えた。

「シャル、あの人は誰？」

「ああ、また来ているのか。あの人はマイゼル公爵だ」

マイゼル公爵は訓練をしている女の人にべたべたさわっている。

「何あの人？変態さん？」

「ああ、いつも教えてやると言っただたさわってくる。一週間に三回は必ず来る」シャルは怒りながら言った。

「倒さないの？」

「そんなことをしたら、何をされるかわからない」

「…僕が何とかしようか？」

「できるのか？無茶なことをするなよ」

「大丈夫。なんとかできるから」

秀太はそう言っ、マイゼル公爵に近づく

「むっ？なんだ貴様は？関係者以外立ち入り禁止だぞ？」

「申し遅れました。私はシュウタと申します」そう言っ軽く一礼する。

「シュウタ？聞いたことないな。とつと立ち去れ！」そう言いながらもしっかり女の人をさわっている。

女の方はかなり嫌がっている様子だった。

「いえいえ、私はたいよ…マイゼル公爵に用があつて来たんですよ」頭が禿げていたから太陽さんって言いかけたよあぶない、あぶない。秀太は内心ほっとする。

「私に？　いったい何のようだ？」　少し不機嫌に言う。

「私は魔法騎士団隊長さんより強いと噂されるマイゼルさんにお手合わせを願いたいと思ひまして」

「ほう、そうだったのか。うん、そうだ私はここの隊長よりも強いぞ！」　嬉しそうに言う。

ブチッと切れる音が聞こえてきそうなほど、シャルは怒っていたが、マイゼルはそのことは知らない。

「いいだろう、私が手合わせしてやろう」　めちやくちや上機嫌に言った。

「ええ、お願いいたします。マイゼル公爵」

「いつでも来い」　そう言って剣を構えないで言う。

「わかりました」

僕はそう言って静かに言う。　【対象の胸に剣で刺された痛みがあったことにする】

「ぐあああああ！　！！」　そう言って胸をおさえる。

「どうかなさいましたか！？」　僕はそう言ってマイゼルに駆け寄る。

「胸が…痛い…　うぐっ！！」　そう言って悶える。

「ここは試合を中断…いや、大丈夫だ！！もう治った」

「そうですか、そういえばマイゼル公爵はここに通ってどのくらいになるんですか？」

「むっ？ここに来てから一ヶ月になるが…それがどうかしたのか？」

魔法騎士団ができたのは二ヶ月前だから…おいおい、半分もいたのかよ。魔法騎士団は女性だけでなくまれたものだ。騎士団は男。なぜ魔法騎士団にしたかと言うと、女性騎士団にするとバカにされるかららしい。

秀太が会わなかったのは、朝、ここで教えて、昼から騎士団のほうにいくからマイゼルには会わなかった。

「実はですね。ここの訓練所では女の人、男の人に胸を刺されて殺されているんですよ。噂なんです、ここで女性に対して嫌がらせをしたら、胸に痛みが走って死ぬと言われているんですよ」

サーッとマイゼルの血の気が引いていた。

「ま、まあ、わ、私は悪いことはしてないし、関係ないな」そう言いながらも震えている。

「まあ、そうですね。単なる。噂ですよ」

【対象の胸に剣で刺された痛みが二倍であったことにする】

「ぐああああああ……！」さっきよりも苦しい表情で叫ぶ。

「だ、大丈夫ですか！？マイゼル公爵」

「ま、まさか…わたしは…死ぬ…うわああ！…！」　そう言ってマイゼルは逃げていった。

「ま、これでここに二度と近づかないと思うよ」

「「「「「キヤ〜〜〜〜！！」「」「」　と女性人たちは声をあげる

「救世主よ」

「やっと解放されたわ」

「しかも、軽々とやってのけて」

「かつこいい！！」

そういいながら、僕に近づいて握手したり、頭撫でたりなど、もみくちにされた。

「シュウタ…その、ありがとう！！」　シャルはそう言って頭を下げる。

「いいよ〜今度、なんか困ったことがあったら相談してね」

「ああ、ありがとう！！」　シャルは今まで見たことないくらい笑顔でいた。

「隊長の笑顔はじめてみた」

「満面の笑み」

「かわいい隊長の一面をみれた」

「その原因をつくったシュウタさんは何者？」

「お前たち！！バカにするな！！」顔を真っ赤にさせて怒る。

「「「「きゃ~~~~」」」」とあきらかに楽しみながら逃げていった。

「お前たち！！訓練は終わってないぞ！！」

これを機会にシュウタは女の敵を追い払った王子様。さらにあの魔法騎士団の隊長に笑顔をもたらした紳士という噂が広まり、女性達にさらなる熱い視線を送られることになるのは本人は知る由もない。

「あゝあ、またきてるよ」麻衣は心底うんざりしながら言う。

「また、届きましたね。これで本日、100個目ですね」メーブルはおもしろそうに言う。

「全然うれしくないよ。はあいつまでくるんだろ」麻衣はそう言ってプレゼントの山を見つめる。

私の気を引くためあらゆるプレゼントが贈られてくる。とつてもいいらない。…お菓子はおいしいけど麻衣はそう思いながらため息をつく。

「そういえば、今日は大臣さんに呼ばれていたんだっけ…」

「そうだったんですか。でも…あやしいですね」

「私もそう思うから、こらしめようかな」

「あまりむちゃはしないでくださいね」

「お兄ちゃんほどじゃないから大丈夫だよ」

「ふふっ確かにシュウタは危なっかしい子供ですよ」

「うん、私が見てないと何するかわからないから」

「まあ、どっちが年上なんだか」微笑みながら言う。

「うーん、いろんな意味でやっぱりお兄ちゃんだと思っよ」

「しっかりしているところもありますからね」

「そろそろかな～じゃあ、行ってくるね」

「はい、いつてらっしゃいませ」そう言って笑顔で見送ってくる。

「おまちしておりました。麻衣様」そう言って麻衣を迎える
ガチャンッと扉が突然閉まる。

「…なんのまねですか？」私は冷たく言う。

「ぐふふ、あなたを私のモノにしようかね」そう言って下卑な笑いを浮かべる大臣。

「そうですか、じゃあおしおきですね【束縛】」

麻衣はそういつて魔法を放つ。

「ぐああー!!」そう言つて大臣は地面に倒れる。

「な、なぜだ。体が動かん」そう言つてもがこうとする大臣。

「さあなぜでしょう?」ナイトメア【悪夢】

「ぐああああああー!!」そう叫ぶ。

「苦しいですか?」

「も、もう…やめてくれ。頼む!!」そう懇願する。

「心配しなくても大丈夫ですよ?外から誰も来ませんし」

「ど、どうしたことだ!?!」

「だってこの部屋に【防音】の魔法をかけましたから」笑顔で言つてあげる。

「た、頼む。悪かった!!こ、殺さないでくれ!!」顔を青くしながら言う。

「殺しはしませんよ?く・る・し・む・だけです」

「ギャー!!!!!!!!!!!!!!」

麻衣は何回も【悪夢】^{ナイトメア}をしてあげました。

なんと、大臣は精神崩壊を起こした。麻衣はさすがに可愛いそうと思ひ精神は治してあげた。

麻衣は部屋を出てお兄ちゃんの部屋を訪れました。

「あ、麻衣。シュウタならまだ帰ってきていませんよ？」とメディアが言ってくる。

「いや、今日はシロちゃんに用があつたの」

「なんだ？私にか？」

「そうだよ。お兄ちゃんのことなんだけど」麻衣も念話を使う。
「なんだ？シュウタのことか？」

「うん、そうだよ。…お兄ちゃんがこの国をでるって言うのはホント？」

「さあ？なんのことやら」

「隠しても無駄だよ。お兄ちゃんがお金集めで依頼をしていたのも知っているから」

「…そうだったのか知っていたのか。それで私に何が聞きたい？」

「お兄ちゃんは何を探しているの？」

『…そこまでは知らん。だが危険なことだというのはわかる。本人には聞かないのか?』

『聞いても絶対に教えてくれないよ』

『ふふつ、まあシュウタらしいな』

『だからあなたにお願いする。お兄ちゃんがこの国を出て行こうとしたら私に教えて』

『監視をすれば、いいのではないか?』

『監視の魔法はつけていたけど、依頼をつけた後消された』

『…シュウタは規格外だな。私はそんなもの気づかなかったぞ?』

『気づかないような魔法も一緒にかけたんだけどね』

『そうか…わかったお前の要望はしっかり受け取った』

『ありがとう。じゃあまたね』

『ああ、またあとでな』

「…麻衣、ずっとシロを見つめにきただけ?」怪訝な顔でこちらをみてる。

「ち、違うよ。会話をしていたんだよ?」

「そ、そう…シロはしゃべっていなかったけど…」痛い人みたいな

感じて見てくる。

「念話だよ。ね・ん・わ」

「えっ！？できるの念話？」

『こんな感じかな？』

「あっ！いま麻衣の声が響いてきた！」

「そういうことだよ。じゃあまた後で」

「うん、またね」

お風呂も食事も済ませて、さあ寝ましようかとなったのはいいけど…シャル、王女三人、メーブル、メディア、麻衣、シロがいるけどみんな秀太のベットに入ってくる。

眠れん…秀太はそう思って体を起こす。

「あの～みなさん。狭くて寝れないんだけど」

「いいではありませんか」

「レイ様もこうおっしゃっているから問題ない」

「シユウタお兄ちゃんだいぢゅき」

「シュウタさん、大丈夫です」

「あらあら、いいじゃありませんか」

「シュウタの隣はわ・た・し」

「お兄ちゃん人気者だね」

『シュウタ…次の日はないぞ?』

約一名怖い発言をしてきたけど…何か忘れているような? 秀太は考える。

「そういえば、今日、ギルドでグリーンドラゴンを討伐してきたと言う人が現れたらしいです」レイが言う。

「それは本当なのですか!? レイ様」シャルが驚いて言う。

「ええ、しかしすごいですね。Aランク10人でやっと倒せる相手を三人で倒すなんて」

「三人ですか…どんな人なんでしょう?」

「明日、謁見がありますのでそのときに見れますよ」

「そうですか。楽しみですな〜戦ってみたいですよ」シャルが言う。

「頼んだらできると思いますよ」

「そうですね。明日が待ち遠しいですよ」

『シュウタそういえばギルドの登録名はそのままだったよな』

『あつ。そういえば名前教えちゃった』

『シュウタはやっぱりシュウタだな』

『それどういう意味？』

『気にするな。おやすみシュウタ』

『ああ、おやすみ』

「みんな、おやすみ」

「……おやすみ（なさい）」「……」

明日は大変そうだな。これじゃまだ国をでれないや。と秀太は思いながら眠りについた。

14話 仲間と秘密(前書き)

勉強なくなつてほしいと、この頃思います。

14話 仲間と秘密

「グリーンドラゴンを倒したと言うものをつれて参りました」と兵士さんが言う。

「うむ、通せ」王様が言う。

「ハッ！ではこちらにおこしてください」そう言って三人の人たちが入ってきた。

「お久しぶりです。王様、私はアレクス・カーズウェルです」

「おお！おおきくなったのアレクス。奴は元気にしてるか？」

「ええ、あいかわらず剣を振り回しています」

「ふふふ、そうかあいつらしいな。で、そちらの二人は？」

「はい、アレクスの妹のファンです」

「同じくライムです」

「おお、そういえば二人の娘がおると聞いたな」

「ええ、そうです。…王様聞きたいことがあるんです」

「おお、なんじゃ？」

「シュウタとシロと言う名前をご存知ありませんか？」

「ああ、そこに黒髪黒目の奴がシュウタだが…それがどうかしたのか？」

「ええ、あの人がグリーンドラゴンを倒したのです」

「……ええええー！！！！」「……みんな驚く。

「シュウタ、それは誠か？」

「…間違いありません」言い逃れができそうになかったので正直に言う。

「そうか…まあ、お主なら何でもありだからな」呆れ顔でこっちを見ってくる。

「王様、個人的にシュウタとお話がしたいのですが」

「うむ、わかった…部屋に案内してあげろ」王様はそう言うと執事が秀太と三人を連れて部屋に案内した。

部屋に入るとアレクスが秀太に頭を下げてきた。

「すみません、またご迷惑をかけたようですね」

「いや、いいよ。それよりも王様とどういう接点か？」

「実は僕たちの家は貴族でね、そういう点で王様と知り合っている

んだよ」

「貴族だったのか？なんかすごいね」

「それよりもシユウタ、君に渡したいものがある」アレクスがそう
言って袋を渡してくる。

袋の中身は金だった。

「これはいったいなんだい？」

「これは、グリーンドラゴンの素材を売ったお金だよ。倒したのは
君だし、もらってくれ」

そういつてくるが100金はいくらなんでも多いので、一人20金
ということであけた。

「あんた、本当に優しいのね。ムカツクくらい」ファンがそう言っ
てくる。

「ありがとう？」

「褒めてないわよ！…それよりも頼みがあるの」

「なんだい？」

「私を弟子にしてほしいの」

「僕も同じく」

「わ、私も」

「はい？どうしてまた？」

「あんたの強さに惚れたの！だから鍛えてほしいの！」

「でも、ライムちゃんは魔法でしょ？」

「わたしは…その、そばにいたいというか…」顔を赤くして小さく言う。

「ごめん、後半からまったく聞こえなかった」

「僕はあなたを越えたいのです」

「それなら、騎士団や宮廷魔法師になったほうがいいと僕は思うよ」

「…本当は正直に言うと、シュウタ、あんたに恩返しをしたいの」

「恩返し？別にいいよ助けたくて助けただけだし」

「お願い！そうでもしないとこの気持ちがおさまらないの！」

「僕からもお願いします！」

「私からも！」

みんなそう言って頭を下げてる。

「…わかった。でも一つだけ条件をだすね」

「「条件?」」

「僕と試合をして、僕が認めたら弟子にしてあげる」

「「えー!」」

「何も勝てとは僕は言っていないよ。認めさせるだけだよ」

「わかったわ。場所はどつするの?」

「そうだね、訓練所を借りようかな。準備はいいの?」

「ええ、もう私たちはできてるわよ」

「それじゃあいこうか」

訓練所に着いて借りたのはいいけど、観客多いな…秀太はそう思いながら周りを見る。訓練所を囲むようにして騎士団や魔法騎士団の人たちで多いつくされていた。

「さあ、はじめようかいつでもいいよ?」

「いきます!」

「いくよ!」

「いきます」

アレクスとファンは秀太の横から攻めてきた。視界を潰すいい攻撃

だ。

「いいねその攻撃」秀太はそう言ってバックステップして刀で両方受け止める。

【火よその姿をかえよ、ファイアランス火槍】

数本の槍が四方から襲ってきた。秀太はそれを避けようとしたら後ろからファンが襲ってきた。

「おっと、危ない」ファンの剣を受け止めたら、次は火槍が上からきた。

それを横に避けてたら後ろからアレクスが横に剣を振ってくる。正面でファンを受け止めているので、懐からサバイバルナイフでアレクスに対応する。

【雷よその姿をかえよ、スパークガン雷砲】

雷をまとった砲撃が横から襲い掛かる。かなり早い。

…これはまずいね。本気を出さないと、秀太は本気を出して抜け出す。

「すごいや、君たち。俺を本気にさせるなんて」

「コンビネーションだったらAランクの人に負ける自信ありませんから」

「なるほど、さすが兄妹だ。合格だよ」

「「「やったー！！」」」

三人ともかなり喜んでいた。

観客からは驚いている人がほとんどだった。実際三人とも強かった。

「なんで、三人ともDランクの仕事をしていたんだい？」

「実はギルドのは昨日入ったばかりだったんですよ」

「えっ？そうだったの？」

「ええ、ですから。最初は他の人たちと一緒に行くという話になりました、そのとき、たまたまシュウタさんを見つけたわけです」

「そうだったんだ。でもなんで僕たちを？」

「人が良さそうだったからに決まっているじゃない」ファンが言う。

「へえ…でも、僕を変態扱いにしたのに？」

「ッ！あ、あれは間違いよ。シロがご、誤解することを言うから顔を真っ赤にして否定する。」

「ふん。まあいいけど、とりあえず三人ともよろしくね」

「「「よろしく（おねがいします）」」」

こうして、弟子が秀太にできました…国を出るときどうしよう。秀

太は今更ながら悩んだ。

「あゝ、お兄ちゃんどうするんだろ？」

お兄ちゃんが弟子をつくったのはいいけど…国を出るときはほったらかし！？いくらなんでもそれはないよね。お兄ちゃん少しは後先考えてほしいな。麻衣はそう思いながら周りを見る。

「麻衣さんは弟子をつくらないのですか？」

「麻衣様どうか私を弟子に！！」

「麻衣さん弟子ではなく恋人に！」

「私は嫁に！！」

ものすごくうんざりしてます。後半は関係ないでしょ！っと突っ込みをしたくなる。麻衣は思わずため息をつく。

「ふふっ早くどこかにいきなさい。灰になりたくなければ」メープルが笑顔で言う。

「ひいゝゝ！！【火炎の魔女】！！みんな逃げろ！！」

ドタバタとみんな逃げていった。

「あらあら、ひどいですわね」【火炎の魔女】だなんて

「【火炎の魔女】？何それメープル？」

「麻衣は気にしないでいいですよ？むしろ聞いちゃだめですよ？」笑顔で攻めてくるのが怖いので聞かないことにした。

部屋に戻ると誰か人がいた。

「誰ですあなたは」メーブルが警戒する。

「初めまして、僕は【七神柱】セブンスゴッド 水柱所属 ケイブリッチです」

「セブンスゴット？なんですかそれは？」

「あら？どうやらお兄さんのほうから聞いていないみたいですね」

「お兄ちゃんが何か関係あるの？」

「ええ、それはもちろん。なんせあの人はこの世界に僕の上司がよんだもんですから」

「どういうことですか？」

「あの時は、お兄さんには話していませんでしたが、実はお兄さんはある人とつながっているんです」

「ある人？それはお兄ちゃんの魔法の力と関係あるの？」

「…ありますね、どこまでつながっているかわかりませんが」

「お兄ちゃんをどうするの？」

「わかりません。それは上が判断することですので…最悪の場合はお兄さんは殺されるでしょう」

「そこまでしないとイケない人物って誰なの？」

「大魔女ローズ」エルキナスですよ」

「なっ！ほ、本当に実在するんですか？」メーブルが慌てる。

「ええ、しますよ。この人は世界の魔物、魔獣をつくりだし世の中に、はなった人です」ケイブリッチが言う。

「それは、ほんとうなんですか！？」私は驚く。

「ええ、なかでも彼女が使う魔法は想像を越えていると言われていますからね」

「あの魔法ですか？」

「あれは僕が見た感じでは未完成と言った感じですね」

「え！？あれで未完成？」

「あくまで僕の見解です。そこまではさすがにわかりません」

「…お兄ちゃんには言わないの？」

「余計な刺激を与えるなっ」と上に言われているので、今回は麻衣さんと言っことです」

「私がお兄ちゃんに言うかもよ?」

「ご自由にっと言いたいところですがこれは他言無用と言つてご
願います」

「それは、わたしもですか?」メーブルが言う。

「もちろんですよ【火炎の魔女】さん」

「ッ!どうしてその名前を」

「情報はいくらでもありますよ。それでは僕はこれで失礼します」

「【束縛】」麻衣は魔法を放つ。

バチャッと音をたてて水だけだった。…逃げられちゃった。そう思
つて窓を見る。

「どうやら、やっかいごとにシュウタは巻き込まれたようですね」
メーブルは言う。

「うん、私はお兄ちゃんを支えないといけないね」

「私も協力します」

「ありがとうメーブル」

「お互い様ですよ。シュウタを助けたいのですから」

こうして、お兄ちゃん秘密を知ってしまったがこれからどうなる

んだらう？麻衣はこれからのことを考えて不安に思った。

14話 仲間と秘密（後書き）

王様とアレクスの名前が似ていることに気付きました。

15話 思わぬできごと

「報告は？」

「現在は、覚醒した様子はないとのことですよ」

「わかった。引き続き調査を頼む」

「承知しました」

そう言つて女の人が部屋から出る。

「…では会議を始めようか」

「やはり、あいつは殺すべきです」

「やめろ、そんなことをしたらまたいつ来るか分からんぞ」

「しかし、あいつは中に化け物をかっているんですよ？」

「だが大魔女とコンタクトがとれたのは奴が最初だ」

「まだ三人目ですよ！？そう急がなくても」

「静粛に」

しーんと静まる。

「私はまだ様子を見ていたほうが良いと思うぞ？」

「それもそうですね。中の化け物についてもまだ詳しくはわかりませんし」

「あいつのファーストコンタクトは誰にする？」

「俺がいきます」

「レッドお前が行くのか？最初はやめとけ」

「ダメだお前は後先を考えない」

「私も反対だ」

「僕も君の性格を考えてダメだと思うよ？」

「反対が多数で否決だな」

「そ、そんな俺だってやればできるんだぜ！？」

「黙れ、低脳単細胞、お前のせいで今までの二人が死んだんだぞ！」

「そ、それは俺のせいじゃなくて、魔物のせいで……って単細胞は余計だろ……！」

「ほおー、なら低脳君？あくまで君のせいではないと？」

「えっと……まあそういうこと？」

「議長コイツは代えるべきです。本当にいりません」

「まてまて！俺だって真剣に「静粛に」ッ！」

「お前はいつまでたっても成長が見られんな……代えたほうがいいか？」

「ま、待つてください、議長！チャンスをご覧ください！」

「わかった。そこまで言うなら最後のチャンスだ。…失敗したらわかってるな？」

「承知いたしました！！では私がやってまいります！」

「期待している」

「今回はこれにて終了」

会議が終わりみんなでていく。

「さあ、君はどこまでくるかな？三城 秀太 君」静かにそうつづやいた。

「起きて、おき…シュウタ」

誰？僕をよぶのは秀太は目を開けると黒髪のロングヘアの女性のシルエットが見えた。

「お母さん？」

「残念、あなたのお母さんではないわ」

「えっ？…ローズ！？」

「しっ、声が大きいわよ」

「ごめん、どうしてここにいるの?」

そう、ここはシュウタの部屋であった。どう考えてもおかしい。

「実はあなたのブレスレットからきたの」

「えっ? ああ、本当だブレスレットがないや。でも、来れるならもつと早く来ればよかったのに」

「ごめんなさい、実はさっきできるようになって、これはあなたの【魔力】を通して来ているの。だからあなたしか見えないのよ」

「へえー、それならいつでも出てこれるっていうこと?」

「そういうこと、だからいつでもあなたの傍にいれるわ」嬉しそうに微笑む。

「でも、あなたにふれられないことが悲しいわね」

「いつかはふれられるようになるんじゃないの?」

「そうよね、シュウタの言うとおりだね。これからよろしくね?」

「こちらこそ、よろしく」

「じゃあ、またね」ローズはそういうと消えていった。

『ご主人さつきから何をぶつぶついつておるのだ？』

『いや、なんでもないよ。ごめんね起こしちゃって』

『気にするな、でも無茶はしないほしい』

『ああ、ありがとう。おやすみシロ』

『おやすみ、シュウタ』

とりあえず、国を出るのは明日だな。カースウェル兄妹はどうしよう？ 今日聞いてみようかな。秀太はそう思いながら寝た。

「お兄ちゃん、今日は訓練所で修行じゃなかったの？」

「…ああ、そうだったね」

「早く起きたほうがいいよ。みんな待っているんじゃない？」

「今、何時？」

「正確にはわからないけどお昼前だよ？」

「…しまった！」

僕はそう言っであわてて準備をして訓練所に向かった。

訓練所に着くと、魔法騎士団に混ざって三人とも訓練をしていた。

「あゝ！！やつと来たわね！遅すぎよ！！」ファンはかなり剣幕な様子だった。

「いやゝごめんね、寝坊しちゃってさゝ」

「寝坊するな！あんたが午前中にやるっていったんでしょ！！」

「…今も午前中だよね？」

そう反論したがおもいつき殴られた。

「えゝつといきなりですが、今日で免許皆伝です」

「「「えー！！！！」」」

「まだ何も教わってないわよ！！」

「いきなりどうしたんです！？」

「シュウタお兄ちゃん…」

「実は明日から僕は旅にでるんだよ」

「「「・・・」」」

「いくらなんでも急すぎるでしょ！」

「これは、結構前から決まっていることなんだよ」

「いつ決めたんです？」アレクスが真剣に言ってくる。

「えっと…昨日！」

アレクスが殴ってきたので避けた。

「シュウタさん結構前という言葉はご存知ですよね？」笑顔で言ってくるが青筋浮かんでいる。

「もちろんだよ。…そんなことより、君たちはどうする？ついて来る？」

「…考えさしてください。あまりにも急すぎて準備が…」

「わかったよ。期限は明日の朝までだから、みんなよく考えてね？」

「…わたしは行く！」ファンが言う。

「…明日まで考えていいんだよ？」

「どうせ、置いて行くつもりだったんでしょ？」

鋭いね。女の勘ってやつかな？めっちゃ置いて行く気満々でしたよ。秀太は苦笑いをする。

「本当ですかそれは！？」アレクスが言う。

「…正解だね」

「あ、あなたって人は…」めっちゃ呆れあれた。

「この旅はね危険を伴うんだ。だから、ここで迷っていたら、いざ

という時にだめだからね」

「試したの？」ライムが首を傾げて言う。

「そういうことだよ。…でも本当に危険だからね。親と相談して明日言いに来て」

「…逃げたりしないでしょね？」

「逃げないよ」

「まあ、逃げても地の果てまで追いかけて、半殺しにするから」

「大丈夫だよ。心配しないで待つているから」

「ふ、ふん！わ、分かっているならいいわよ」顔を赤くしながら言う。

「まあ、とりあえず、午後からはじめようか」

「結局、午後になるわけね…」ファンが呆れながら言う。

「とりあえず、ご飯にしよう。みんなついて来て」

「あれが、持ち味ね」

「マイペースって言うんじゃない？」

「私より子供かも…」

こうして秀太と三人は食堂に向かった。

とりあえず、【七神柱】セブンスゴッドについてはわからなかった。ほとんどは聞いたことない。暗躍組織とおもうがつかめない。末端の組織があると思うけどそれらしき様子はない。ものすごく、頭のいい人がまともにいると思う。お兄ちゃんもやっかいな人に目をつけられたね。とりあえず、城の中には怪しい人はいないし、どうやってお兄ちゃんの様子をみているんだろう。麻衣はずっと考えていた。

「麻衣さつきから何を思いつめているのですか？」メーブルが聞いてくる。

「昨日のことだよ。あのことがどうも気になって…」

「気にしてもしかたありませんよ。わたしの方でも調べているんですが、手がかりがなくて」

「うん、私の方でも見つからないし、お兄ちゃんから目を離せないね」

「今は食堂のほうにいらっしゃるとのことです。城総出で見張りにあててますからね」

「それならいいけど…あまり派手なことはやってほしくないな」
「バンツといきなり扉が開いた。」

「た、たた、大変です！！」メディアがあわてて入ってくる。

「メディアノックは「レイ様が何者かに連れ去られました」えっ！
」

「どういうこと？」

「それが、シャルさんを襲って堂々とさらっていきました！！」

「シャルは大丈夫なの？」

「気絶しているとのことですよ」

「メディア落ち着いて…興奮したら敬語なんだね？」

「あっ！いやこれは…癖で…」恥ずかしそうに顔を伏せる。

「落ち着いた？それで手がかりは？」

「あっ、うん手紙が置いてあって内容が」

「“ヴォイレス火山でシュウタを待つ”だそうよ？」

【七神柱】と私は瞬間的に思った。
セブンスコリド

15話 思わぬできごと（後書き）

もしかしたら、水曜まで掲載できないかもしれません
勝手な都合で申し訳ありません

16話 火山までの道のり（前書き）

すみません、遅くなりました。

16話 火山までの道のり

「えっ！？レイが連れ去られた！？」

「はい、今全力で搜索部隊を編成しております。」兵士さんが言う。
実は今、騎士団は王国内に現れたドラゴンの討伐に行っているためいない。いるのは魔法騎士団だけなのだ。

「そうなんだ、どこに連れ去られたか検討はつくの？」

「実はこのようなものがありまして…」

紙切れみたいなものに“ヴォイレス火山でシュウタを待つ”と書いてあった。

これは、【七神柱】セブンスコルピオンに関係がありそうだな。秀太はそう思う。

「わかった。僕も行くよ準備はできているの？」

「はい、もう少ししたら完了いたします。作戦や詳細は行き先に向かいながらとのことですよ」

「わかった。すぐこっちも準備するよ」

「それとこのことですが、カースウェル家のみなさんご内密にお願いいたします」

「わかりました」アレクスが答える。

「それでは、失礼します」

兵士さんはそう言っつて、食堂を出て行った。

「ねえ、私たちはついていけないの？」ファンが聞いてくる。

「ダメだよ。搜索隊に組まれていなかったら迷惑をかけるだけだよ」

「でも！レイは親友で…」

「ダメだよファン、シュウタさんの言うとおりだ。迷惑をかけたらいけないよ。今回はやめておこう」

「…わかったわよ」俯きながら言う。

「じゃあ、僕は準備があるからこれで失礼するよ」

「はい気をつけてください」

「絶対助けてきなさい！！」

「シュウタお兄ちゃん絶対レイお姉ちゃんを助けてね！」

「ああ、絶対助けてくるよ」

秀太はそう言っつて食堂を出た。

とりあえず、部屋に戻って、シロを連れて城の外に向かった。

城の外にはシャルと麻衣とメーブルがいた。かなり辛そうな表情を

していた。

「もうみんな来ていたんだ」

「遅い！何をしていた！早く行くぞ！」シャルが切羽詰った感じでいった。

「シャル少しは落ち着いてください」メーブルが言う。

「いいからいくぞ！！一刻も早くレイ様を助けなければ！！」

メーブルはやれやれと首を横に振って、シャルの頬を引っ叩いた。

パンつと音が響いた。

「ッ！何をする！」シャルがメーブルを睨む。

「少しは落ち着いてと言ってるじゃない！冷静さを欠いた状態ではまともな判断ができないわよ？」

秀太たちは初めて敬語を使っていないメーブルを見た。とても迫力があって周りの兵士たちは引いている。

「…すまないメーブル落ち着いたよ」

「それでいいんです」笑顔でメーブルは言う。

「では、改めて出発としよう」

こうして、ヴォイレス火山に向かうことになった。

「ねえシャル、ヴォイレス火山ってどこにあるの？」

「ここから、一日歩いたところにある」シャルが答える。

「敵はどうやって逃げたの？」

「ドラゴンを使って逃げたよ…おそろしく大きかった。まあ、私を襲ったものはかなり強かったからな」シャルは苦い顔で答える。

「やっぱり、ドラゴンを使ってくるかな？」

「わからない、たぶん使ってくるとは思うが…問題はないと思う。なんせ【火炎の魔女】様がいるからな」シャルが笑いながらいう。

「シャル！！そんな不名誉な二つ名でよばないでください！」メープルが怒りながらいう。

「名前には由来があるんだよ。メープルは、し「何でもありません！！それ以上言つと燃やしますわよ？」おっと

こんな感じですよーと二人はケンカ？している。とても仲が良くみえる。隊の雰囲気もかなりいい。

「二人は姉妹みたいだね？」

「絶対がない（です）」「二人そろっていった。

「とりあえず今日はここにテントを張ろう」そうシャルが言う。

だいぶ歩いて来た。明日の夜明け前にここをでて、朝には火山に着く予定だ。

みんなテントを張ったり、食事の準備をしたりなど、いろいろ大変である。

「できました」料理をしていた兵士さんがそういうと、みんなが順番に並ぶ。

みんな、好きな場所に座って、騒いだり、談笑したりする。

「いいね、雰囲気がよくて」お兄ちゃんが言う。

「ああ、こんな感じのほうが気を張らなくていいだろ？」シャルが言う。

「そうだね。…そういえばシャルとメーブルってどんな関係なの？」

「…元冒険者だ」

「冒険者？いろんなところをまわっていたの？」お兄ちゃんが言う。

「ああ、二人でいろんな所に行ったよ。あの時のメーブルは…いや、なんでもない」メーブルの微笑でシャルの顔が引き攣っていた。

「冒険者がくなんかいいな」私は本当にそう思った。

「基本、自由だから好きな場所、好きな時間、何も縛られずいけるからな」シャルがうれしそうに答える。

「でも、何で城に着いたの？」お兄ちゃんが言う。

「それはですね、シャルがレイ様に助けられたからですよ」メープルが答える。

「えっ？どうやって助けられたの？」

「ああ、それはな商人とお金のことと揉めていたんだ。あとあと知ったんだが、その人は奴隷商人だったんだ」

「またなんでそんなことを？」

「ある店のものを不意に壊してしまつてな。弁償代が50金とか言ってきたんだ」

「…災難だね」

「払えなかったら体で払えって言ってきたからどうしようもなくて…そんなときにレイ様が現れたんだ」

「レイ様はポンつと50金をおいて、私にこう言つたんだ」

「大丈夫です。私はあなたの味方ですよ？」って言ってきたんだ」

「すごいな〜レイは」

「私は見知らぬ他人なのにどうしてここまでするのか？と聞いたたら、目の前で困っている人を助けてはいけないのですか？」と言ったんだ」

「私はこの人は女神様？って思ったよ。たいていの貴族や王族は自分のことしか考えないで他人なんか普通無視だな」

「だが、レイ様は違った。どんな人でも困った人には手を差し伸べる。…だから、私は決めたんだ。レイ様を守るって」

「…そんな経緯があっただ」私は感動した。

「…だが今回は守れなかった！それだけが悔しい！」シャルは悔しそうに言う。

「…大丈夫だよ。その気持ちがあれば取り戻せるよ」お兄ちゃんが笑顔で言う。

「そ、そうか。あ、ありがとうなシュウタ」顔を少し赤くしながら言う。

「…じゃあ今日はもう寝ましようか」メープルが若干怒りながら、そう言う。

「ああ、そうだな、おい、みんなもう寝ろ〜」シャルがそう言つと兵士の間には寝る体制になる。

こうして、夜は更けていった。

夜が明ける前に僕たちは出発した。

朝になると僕たちは火山の麓まできた。

「ここからは、火山特有の魔物が出てくる。みんな注意を怠るな」

「「はい！」」兵士たちが声をそろえて言う。

『シロ』僕はそう言いながら近くの岩場に隠れる。

『…なんだシュウタ、せっかく気持ちよく寝ていたのに』少し不機嫌に言ってくる。ちなみにシロは僕の胸の中にいる。

『そろそろ、人間になって』

『わかった』そう言う胸の中から出てきて、人間になる。そして、秀太はシロに服を渡す。

「…またこれを着るのか」

「お願いだからきて、裸のままでみんなの前にでたら僕がなんていわれるか」

「シュウタがそう言うなら着るが…」しびしび了解して着てくれた。

「それじゃあ、みんな待っているし行こうか」

「…シユウタは裸をみせても反応しないんだな」なぜか不機嫌になつていた。

「あれ？お兄ちゃんシロ連れてきてたの？」

「そうだよ、道が狭いから人間になつてもらつたけど」

「なんでシロは不機嫌になっているのだ？」

「よく分からないが、裸を見ても反応しないとか」

「…お前はもう少し女心を理解したほうがいいぞ？」シャルが呆れて言う。

「理解ならしてと思うけど？…着替えは見ないとか」

「…いや、すまない私が悪かった」なぜか謝られた。

登つて、頂上まであと少しのところまできたが、まだ魔物が現れていない。

「どういうことだ？いくらなんでもおかしいぞ」シャルがいう。

「あれ見て！」麻衣が頂上を指して言う。

「なんだ！あの数は！？」頂上付近にたくさんの魔物がいた。

「あれは、まずいね…」

【あの魔物たちをなかったことにする】

秀太はそう言つて、魔物たちに向かつて魔法を放つ。一瞬にして魔物たちが消えた。秀太は急いで頂上まで行く。

「ははははっ！すごいな報告以上の魔法だよ」赤髪赤目の青年が言う。

「お前がレイをさらつた。犯人か？」

「ああ、俺は【七神柱】セブンスゴッド火柱所属隊長 ファイルズだ。よろしくな」
ファイルズは、にやりと笑った。

16話 火山までの道のり（後書き）

戦いは次話になります。

テストが金曜まであるので、もしかしたら土曜になるかもしれない。

本当に申し訳ありません。

17話 VS ファイルズ（前書き）

テストがやっと終わりました

三人称で頑張ってみました。

もしかしたら、今回から三人称にするかもしれません。

17話 VS ファイルズ

ファイルズと名乗った青年の腕の中には、レイがぐったりとした様子でいた。

「レイに何をした？」

「あはは、そんなに怒るなよ。ただ単に眠っているだけだ。…さあ死合いしようぜ？」

「いくぞ！」秀太はそのまま突っ込んで行く。

「おやおや、特攻とは感心しねえな」ファイルズは片手をあげる。

「【火槍】」ファイアランス 何十本の火の槍が秀太を襲う。

「なっ！」秀太は横に飛ぼうとしたが間に合わず数本くらう。

「ぐっ！」秀太は気にせず突っ込む。

「だから、何度もやっても…なに！」ファイルズが後ろを向いたと同時にシロが顔を殴った。ファイルズはそのまま数メートル吹っ飛ばす。シロはその間にレイを確保してその場を退く。

「やるじゃねえかお前ら！」ファイルズがそう言った瞬間、炎の壁が数十メートルに渡ってあらわれる。

「くそ！逃げ道が！」秀太はそう言う。

「はははは！！無駄無駄！どこにも逃げ道なんてねえよ！俺が逃がすと思うか？おい、ドラゴン！敵の仲間が来たみたいだから相手をしてやれ」ファイルズはそう言うのとドラゴンがファイルズの後ろからでてきて空を飛びながら少しずつ大きくなって壁をこえていった。

「くそ！シロ、君たちだけ外に出す！麻衣たちを手伝ってやってくれ」秀太はそう言ってレイとシロにふれる。

「待て！わたしは——」シロが何か言う前に魔法を使った。

「ほお、それが例の魔法か……てめえの強さみせてもらうぜ！くらえファイアガン！【火砲】」直径三メートルの火の弾がものすごいスピードで襲い掛かる。

「【その魔法をなかったことにする】」秀太がそう言うと、跡形もなくなかった。

「すげえなおい！」ファイルズは興奮していた。

「【お前の存在をなかったことにする】」秀太は躊躇せずに次の魔法を放つ。

「あ？今何かしたか？」ファイルズは何事もなかったように振舞う。

「なっ！そんなはずは」秀太はかなり驚いた。

「あははは！もしかして、俺を消そうとしたのか？バカだなくくらファイアボールうわけねえだろ！【火柱】」

目の前に火の柱が地面からいくつも現れて秀太を襲う。

「はっ！」秀太は避けながら、ファイルズに近づく。

「もらった！」秀太はそう言って腰にかけてあった銃をとって撃つ。

直径二メートルのレーザーがファイルズに向かう。

「ファイアウォール
【火壁】」ファイルズは自分の目の前に火の壁を現させて秀太の攻撃を防いだ。

「これならどうだ！」秀太はレーザーを防いでいる間にファイルズの懐に近づいて刀を振るう。

しかし、それも読んでいたのいたのかひょいっと下にしゃがむ。

「ファイアインパクト
【火衝撃】」ファイルズは秀太の胸に火の手をぶつけてくる。

「がはあ！」肺の中に入っていた酸素を強制的にだされながら数十メートル先にある壁にぶち当たる。

「げほあ！がはあ！」秀太は、血を吐いて立ち上がる。

「いってえな！」秀太は【冷者^{アイス}】になっていた。

「あはは！！やっと本気になったかシュウタ！！これで心おきなく殺せるぜ！！」

「あ？なんかいったか？」秀太はいつの間にかファイルズの後ろに

まわりこんでいた。

「なんだつぐぼっ！」ファイルズはそのまま殴られ上に吹っ飛ぶ。

「まだいくぜ？」秀太はそのままファイルズにおいて刀でそのまま腹を斬る。

「あぶねえなおい！！」ファイルズは、刀を素手で掴んで炎を出す。

「ぐっ！」炎は刀の柄まで秀太は熱くて思わず手を離れた。そして、二人は地面に着地して対峙する。

「いいねー！今の攻撃。ちょっと腹が切れたぜ！」狂気に満ちた笑顔で言う。

「おいおい、何笑ってんだよ。…もしかしてマゾ？」

「クロス」静かにそういつて詠唱なしで【火槍】ファイアランスを放ってくる。

「【その魔法をなかったことにする】」

秀太は急いで刀を拾おうとするが火の壁に阻まれる。

「おい、どこをみてんだ？」ファイルズがいきなり横から現れた。

「ちっ！」秀太は舌打ちをして、銃で攻撃しようとする。

「おせえよ！」ファイルズは秀太の手を掴む。

「燃えろ！」そのまま秀太の手を燃やした。

「ぐああ！！」秀太は苦悶の表情を浮かべるがなんとか耐えてファイルズと距離をとる。

クソが！雇気楼かよ。秀太は心の中で毒づいた。

「【ケガをなかったことにする】」秀太はケガをすべてなかったことにした。

「…終わった？」ファイルズは、にやにやしながらこちらを見てくる。

「ああ、そうだな」秀太はそのままながした。

「いいねえクールすぎて、でもあと何回もつかない？」

「何回でももつけど、生憎、俺はお前と違ってマゾではないんでね」

「あはは！！そんなに殺してほしいのかよ！！」ファイルズは襲い掛かってくる。

秀太は銃を取り出して構える。

「あはは、そのままかよ！！つまんねえな！！」ファイルズは手の中に炎を作りだしそれを秀太に向かって放つ。

「なにっ！？」しかし、秀太には当たったが偽者だった。

「こっちだよ」秀太はそのまま銃を撃った。

「ぐああああ!!」 ファイルズの肩に貫通する。

「くっ!... な、なぜだ?」 ファイルズが苦しそうに言う。

「あ? お前の分身をつくりだしたただけだが?」

秀太は空気中の水を魔法で自分の分身をつくりだしたのだ。これなら秀太の【魔力】はそんなに減らない。

「あはは、ヒヤヒヤヒヤアアアアアアアアア!...!!」 ファイルズが突然狂うように笑い出した。

秀太はものすごく不快な表情を浮かべていた。

「ありがたく思えシウタ俺が本気で相手をしてやるよ!!」

「【解放^{リベレル}】」 ファイルズがそう言うのとドンッとファイルズから火の柱が飛び出して、背中から二本の真つ赤な翼が生える。

「なんだあれ!？」 秀太は本能的に動いた。あれはマズイ今すぐにやらないと秀太はそう思った。

「【一回だけ銃の強さを四倍にする】」 そう言うのと同時に銃を撃った。

直径10メートルのレーザーがファイルズを襲う。

ドッパンつと音が聞こえたとおもったらレーザーが弾かれた。

「冗談だろ?」

秀太は腕がギリギリ吹っ飛ばない程度の威力を撃ったのだ。吹っ飛ばないが腕の骨はボロボロだ。腕が吹っ飛んだら回復するのに【魔力】を多く使うからだ。

「【このケガをなかったことにする】」秀太は魔法をすぐに使った。ちっ！これでもう無理はできねえ…どうする？考えろ！秀太は必死に考える。

「あはは、待たせたな！！」ファイルズは火の粉を身に纏、真っ赤な二本の翼が彼の背中から生えていた。

「おいおい、俺は童話の世界でも来たのか？」

「余裕だねえ！！でもいつまでそうしてられるかな？」ファイルズはいきなり火の槍を数百本出してきて攻撃する。

冗談だろ！？これをどうやって避ければいいんだよ！！秀太は内心かなり焦っていた。策がない。何もなし。恐怖？ないな。でも、いつ以来だ？こんなに追い詰められたのは？楽しい？ああ、そうか――

ドンっ！と音が響いた。秀太を火の槍が襲った。

「なに？この火の壁は！？」高さは5メートルはあるだろう。しかもその壁を越えて何かがやってきた。

「おい、あれはレッドドラゴンじゃないか！」シャルが驚きながら言う。

大きさは50メートルで全身が赤い鱗に覆われた竜がこちらに向かってきた。

「戦闘態勢！魔法は複数で行うぞ！」シャルが指示をだす。

麻衣はドラゴンを見つめていたがこちらに向かって誰かが走ってくる。

「シロ！そしてレイ！？」シロはレイを抱えてこちらまで走ってきた。

「シロ！無事だったの？」

「ああ、しかしそれよりも！シュウタが今危ない！」

「えっ！？お兄ちゃんがどうかしたの？」

「レイを攫った奴と戦っている。私も行かないと！」

「待って！どうやってあそこに行くの？」

「無論大きくなって「待つて待つて！！それじゃここが崩れちゃうよ！！」むっ！しかし！！」

「今はこつちを手伝って！！こつちが終わったら向こうに行く方法を考えよう！！」

「わかった！…しかし、空を飛んでいるのはいかな」シロはそう言って空にいるドラゴンを見る。

「大丈夫私の魔法を使えば、【束縛】」そう麻衣が言つとドラゴンは力チンッと急に動きを止めて地面に落ちてくる。

「【浮遊】」麻衣は地面に着くすれすれで使った。

「あとはこれで倒すだけつと」麻衣は満足げに頷く。

「…むちゃくちゃだな麻衣も」シロは呆れながら言つ。

「うん！ありがとう」麻衣は照れながら言つ。

「…褒めていないがまあいいか」シロはそう言つてドラゴンの方に走っていった。

「とりあえず。レイに異常がないか調べないと」麻衣はレイを魔法で異常がないか調べた。

「薬を飲まされているみたいだね【回復】」そう言つて魔法をかける。

「うつ…あれ？ここはどこですか？」レイが寝ぼけながら言つ。

「ここはヴォイレス火山だよ？レイ、あなたはここまで攫われたんだよ？」

「あ！そうでした。麻衣助けてくれてありがとうございます！」

「いや、私じゃなくてお兄ちゃんとシロが助けてくれたんだよ？」

「そうなんですか！？シロとシュウタはどこに？」

「シロは今ドラゴンを倒しているところだけど、お兄ちゃんは……レイを攫った人と戦っているよ。ほらあそこの火の壁の向こうで」

「早く助けないと……！シュウタが！」悲痛な表情で麻衣に言う。

「うん、もちろん！だから早くあの火の壁を調べないと」

「麻衣！こっちはおわったぞ！レイ様！良くご無事で私が不甲斐ないばかりに！」シャルが目には涙を浮かべながら言う。

「いえ、いいのですシャル。それよりも今はシュウタを……！」

「うん！」麻衣は頷いて、火の壁まで近づいて調べる。

「これは……ちょっと時間かかりそうかな」麻衣はそう言う。

この火の壁は一つ一つがつなぎ合わされていて、一つだけ破壊しても復活するという厄介な魔法だった。

「なんとかならないのか？」シロが言う。

「大丈夫！やってみるよ」麻衣はそう言うにあちこち動いてスイッチ式の【解除】の魔法をかけた。

「よし！いくよ！」麻衣はそう言つと魔法を放った。

そしたら、炎の壁が消え去った。

「よし、全軍！シュウタの援護をしろ」シャルがそう指示をした。

「あはははは！！死んだぞ！あつけないな！！」ファイルズは笑い声をあげる。

「そ、そんな！シュウターー！！！」シロが叫ぶ。

「次はお前たちの——」

ザンつといきなりファイルズの右腕が斬られた。

「ぐああああ！！」ファイルズが声をあげる。

「誰が死んだ？お前か？いや、お前はこれから死ぬな。いや、もう少しだけでもう少しだけ」秀太がファイルズの右腕を刀で刺しながらぶつぶつ言っていた。

「てめえ！！ふざけやがつて！殺しつ——ぎゃああああ！！」次は左腕を斬られた。

「クロス？いや、苦しめる。楽しむ」秀太は恍惚な表情を浮かべて

ファイルズを攻撃する。

左足、右足と次々に奪っていく。

「終わり？いや、もう一回」秀太は魔法を使ってファイルズの手足を復元させる。

「な、何をした！？なぜ！？」ファイルズはもう力が残っていないのか

「もう一回、もう一回」秀太はぶつぶついいながらファイルズに近づく。

「や、やめろ！やめてくれ！！もうやめてくれ助けてくれ！！」ファイルズは恐怖で顔を真っ青に染めていた。

「消す。いや、苦しめる。楽しむ」秀太は右腕をまた斬り落とした。

「ぐああああ！！」ファイルズは苦悶の表情を浮かべて叫んだ。

「あはあはははは！！面白い！！面白すぎる！！」秀太はすべてを解放した気分だった。こんなに最高なら最初から――

「お兄ちゃん！？いったい何があったの！？」秀太は声が聞こえる方を向いた。麻衣が悲痛な表情を浮かべていた。そして隣を見ると

「うつ…ひつく！シュウタ…もう…いいから！」シロが泣いていた。

秀太は自分の中にあるものが急速に冷めていった。

「おい」秀太は言う。

「ひっ！」ファイルズは声をあげる。

「二度とこんな真似をするなしたら、次は容赦しねえ」

「わ、わかりました。次か——」ぼとつとファイルズの首が地面に落ちた。

「あ？」秀太は上を向く。

「次はないよ。役立たず君」空中に浮かんでいる緑髪緑目の少年が言う。

「誰だ？てめえは？」秀太は睨みつけながら言う。

「ああ、それはまたのお楽しみ。それでは」にこにこしながら消えていった。

「やっと、終わった…か」ばたつと秀太は倒れた。

18話 真実

——あれ？僕はどうなったんだっけ？

秀太はそう思いながら周りを見渡す。

『秀太、気がつきましたか？』ローズが秀太に声をかけてくる。

——ああ、ここは【狭間】なんだね。

『そうよ。そして、あなたに話したいことがあるの』ローズはそう言って秀太を真剣に見つめる。

——なんだい？話したいことって

『それは、あなたの中にあるものについてよ』

——僕の中にあるもの？もしかして【戦者^{ファイズ}】に関係ある？

『そうよ、人格変化についてなんだけど…実はね、秀太の中には【神の力】があるの』

——【神の力】？

『【神の力】は人間にはコントロールなんてできないわ。だから、秀太には枷があるの』

——枷？それはいったいどんなもの？

『…感情をある程度なくしたの』

——感情をなくす？どういうこと？

『人並みの感情を失うことで、一般の人よりも感情が薄いのだ』

——そうなんだ。それはやっぱり5歳のときからなの？

『そうよ、その力が発覚して、押さえ込んだのだ』

——なんでローズがそんなことを知っているの？

『私はもともと、向こうの世界の住人なの』

——えっ？そうなの？

『ええ、昔の話になるんだけど、私はこの世界にきたのは日本で言う昭和初期の時代なの』

——そうだったんだ。でもどうやって元の世界にもどったの？

『力の半分を失う条件で戻れたの。でもね失敗する可能性もあったのよ』

——でもなんでそんな賭けを？

『追われていたの。私の力のほしさに。私は疲れていたのだからね死んでもいいやって言う気持ちになっていたのよ』

——そこまで追い詰められていたなんて……一体誰に追われていたの？

『セブンスコング
【七神柱】よ。』

——またあの連中か。でも地球にもどったんだよね

『ええ、私がもどった時には平成の時代になっていたのよ。そして、私は転移のせいで力尽きてその場に倒れたの。そして、目が覚めたらあなたのお母さんがいたわ。なんでも私は秀太の家の前で倒れていたのよ』

——すごいね。奇跡なんだね。

『ええ、私はよく平成の世の中についてよくわからなかったし。落ち着くまでここで暮らしていいよって言うてくれたの。でもね、私が来て二年後事件が起きたの』

——事件？

『ええ、あなたが暴走したのよ。』

——【戦者】
ファイズ
にでもなったの？

『いいえ。神の力を出したのよ。制御しきれない感じで危ない状態だったの。だから私が押さえ込んだのすべての力を使って』

——ごめんね。ローズ。

『いいのよ。私はやりたくてやったんだから。それにねこれで借り

は少しは返せたかなって思っただの』

——そうなんだ。ありがとうね。僕を守ってくれて。

『どういたしまして。でもね、お別れの時がきたのよ』

——お別れ？　そういえばなんでローズは捕まったの？

『実は召喚魔法で私をまたここに召喚されたの』

——えっ？　いったい誰に？

『セブンス・ストーム
【七神柱】』よ。私の力の半分を使っただね』

——力の半分は失ったはずじゃなかったの？

『地球に戻るときに使った力はどうやらこの世界に残っていたらしいの。だからリーダーがその力の半分を受け継いで私を呼んだの』

——どうしてそんなことを？

『私の力のもう半分を手に入れるためよ』

——そんなことのために？　ローズを？

『そうよ。だからね私は抵抗したんだけど、そのとき私は力がなくてね捕まったの』

——僕のせいなんだね…

『そんな悲しい表情をしないで決して秀太のせいではないわ』

——うれしいよそんなことを言ってくれるなんて。それと、やっと僕の名前をちゃんと正しい発音してくれたね。

『同じ日本人だからね。ごめんねこんなことになちゃって』ローズは悲しそうに言う。

——いいよ。そしてもうひとつ目標もできた。

『目標？』

——ローズを絶対助けること。それに本当の名前も知りたいしね。

『いいのよ私のことは、それに本当の名前を教えると枷がはずれるわ』ローズが驚くことを唐突に言う。

——ありゃーそうなんだ。そしたら力の制御の修行もしないといけないね。

『そうね。その力は制御しないとイケないけど…できるの？』

——僕には頼もしいローズって言う師匠がいるからね。

『くすっそうなんだ。これからいろいろとよろしくね』

——よろしくローズ

『当面の目標だけど、あなたをまた狙ってくる可能性があるわ。あまり長居はしないほうがいいと思うわ』

——ああ、僕もそう思っていたんだよ。しかもあんなことがあったんだし、僕なんていないほうがいいよ。

『…秀太がどう思っているか知らないけど、ちゃんと考えて行動してね？』

——わかってるよ。それじゃ行こうかね。

『またね、秀太』

秀太はそのまま意識を手放した。

「おはようでいいのかな？」

秀太は起き上がって周りを見渡す。どうやら自分の部屋のようにだ。

「すうー…お兄ちゃん…」

麻衣がベットに頭を預けて眠っている。どうやら看病してくれていたみたいだ。

「…行くか」

秀太は服を着替えて黒の軽装備、刀、銃、お金とローブを羽織る。そして一枚の手紙を書いて机の上において別れを告げる。

「みんな、いままでありがとう。でも僕は行かなくちゃ。あいつらを倒して、戻る方法を――」

ガチャンッと扉が開いた。

「秀太？…何をしているんです？」レイは不思議そうにこちらを見ていた。

「おっと、タイミングを間違えたみたいだね…レイありがとう。そして、さようなら」

「えっ？秀太？」何を言っているか分からないという状態のレイを見ながら秀太は瞬間移動を使った。

19話 旅先の出会い

「マイ起きて下さい！マイ！」

「んゝ…どうしたの？」麻衣は目をこすりながら言う。

「シュウタがこんなものを！！」レイが慌てながら、手紙を渡してくる。

「お兄ちゃん？」

麻衣は手紙の内容を見た。

みんなへ

とりあえず、旅に出ることにしました。理由は元の世界に帰ることと、この世界に僕たちを呼んだ元凶を倒すためです。みんなに黙って出て行った理由はこの間の僕の姿をみて、怖がっていることを配慮しての行動です。一人で旅に出る理由はみんなを巻き込まないためです。

P・S

麻衣のことをどうぞよろしくお願いします。

「うん、とりあえず縛りあげないとね」麻衣は笑顔で言う。

「そうですわね」レイも麻衣に賛同した。

とりあえず、秀太のお見舞いに来たカースウェル兄妹にも報告した。

「やはり、シュウタさんらしいですね」

「地の果てまで追いかけること決定」

「…魔法つかってもいいよね？」

三者三様の言葉を並べた。

とりあえず、秀太を追いかけることを決定したため、会議をするこ
とになった。

「それでは、会議を始めることにしよう」サーシャル改めシャルが
言う。

とりあえず、行くメンバーは、レイ、シロ、麻衣、カースウェル兄
妹、シャル、メーブル、メディアになった。

「とりあえず、ものすごい秀太の勘違いだと思うが、シュウタのこ
とが嫌いになった奴はいるか？」シャルが言う。

しーん…誰も反応をしなかった。

「私もシュウタのあの姿を見たが…特に何も思わなかったぞ？」シ
ャルは呆れながら言う。

「そういえば、最初は惑いましたが…特には」レイは言う。

「マイ、シロはどうしている？」

「今は、人の姿になってお兄ちゃんの【魔力】を探っているよ？」

シロの人の姿になるスキルは秀太にもらったものなので、秀太の【魔力】を感じるのにいいらしい。

「見つかるのですか？」レイが言う。

「わからないけどたぶん「おい、秀太の居場所がわかったぞ」見つかったらしいよ？」シロが扉を開けながら言う。

「早かったね」麻衣が言う。

「もともと、契約していてある程度の居場所が分かる。それに秀太からもらったスキルでより正確にわかる」

「場所は？」

「国の国境付近の村あたりに滞在している」

「とりあえず準備をして、明日から行くか」シャルが言う。

居場所はいつでもわかるし、焦ることはないということになった。

「シュウタはいつも勝手だね」会ったら一発殴らないと「メディアが笑顔で言う。

「それはそうですね。私は燃やしますけど」メーブルも笑顔で言う。

「縛り上げて好きなことをするでいいんじゃない？」ファンも悪乗りする。

「各人好きなことをするで、いいと思いますよ」レイが言う。

「私はずっと胸の中に入れることを条件としてもらおう」シロが若干顔を赤くしながら言う。

「…シロさんはそんなことをできるからいいよね」ジト目でメディアが言う。

「…ずるいかも」ライムが言う。

「わ、私はこの前みたいに一緒に寝てもらいます」レイも顔を赤くしながらとんでもない発言をする。

「……この前？」

シロ以外レイをジト目で見ながら言う。

「シュウタよ、とうとうレイ様に手を出したか」

「…お兄ちゃん奥手だと思っていたのにな」

「へえ、あいついい度胸してるじゃない」

「あらあらいけませんね」シュウタ

「…許せないな」シュウタ

「…シュウタお兄ちゃん大胆かも」

「うむ、この間攻撃したが、許せなくなった」

みんな黒い笑みを浮かべて言う。

「えっ？ いや、その違うというか…」さらにレイが顔を赤くしたため

「斬る、いや分解だな」

「束縛じゃあ、たりないかもね」

「半殺し決定…」

「焦げ肉ですわね」

「…ダメだな、もうだめだ」

「シュ、シュウタお兄ちゃん獣？」

「うむ、この間と同じでいいだろう」

ごめんなさい、本当にごめんなさいシュウタさん、この様子から見てシュウタさんが無実だと言うのは僕にはわかりますよ。でも、止めれません。こんな僕を許してください。

妹たちの証言は素直に受け取るアレクスだが、いつもの冷静に物事をみて判断した結果、今回は無理だと思った。

「とりあえず、どうしようかな」秀太はぶらぶら歩きながら言う。

『秀太、本当にあの別れ方でよかったの？もう少し考えたほうが…』ローズが心配そうに言う。

「問題ないよ。たぶんみんなあの姿をみて怖がっていたし、シロなんて泣いていたからな」

『そうなの？でも拒絶的ではなかったんでしょ？』

「分からない。でも、嫌われているならこれでいいよ」

『麻衣ちゃんのこととは良かったの？』

「麻衣は確かに心配だけど、大概のことは一人でできるし、麻衣に近づく輩は排除したから問題ないよ」

秀太は麻衣に近づく男どもを秘密裏に、嫌がらせをしていたのだ。そして、麻衣には近づくなくなった。いつか話してみたい。

『そう、でもこれからどうするの？』

「とりあえず、国を抜けて情報収集といきたいね」

『瞬間移動は使わないの？』ローズはもつともな疑問をぶつける。

「あれはあまり使いたくない。いきなり敵に襲われたらひとたまりもないしね」

『詮索スキルがあるじゃないの？』

「残念ながら今の僕じゃ有効範囲が一キロしかない。大きな町に飛ぶのはいいけど、さすがに人間以外の国にいきなり入って捕まりましたっていうのは洒落にならないよ」

『確かに他の種族が入国するのは厳しいからね』

この世界の国々は結構他の種族に対する偏見が大きい。王族たちや貴族は表面上親しくしているように見えるが実際はそうでもない。

あのテリユート魔国も、戦争はしませんよアピールであのパーティーを開いたのだ。

「という訳で案内人が欲しいところなんだけど…あつ丁度いい所に馬車^が」

傭兵らしき人を二人連れて、何故か道のハズレを走っていたが、とりあえず声をかけてみようと思つた。

「すみません、街に行くなら連れていつて欲しいのですが…」

「はっ！じよ、冗談じゃない！とりあえずどこかに消えてくれ！」
商人さんみたいな人は挙動不審に答えた。

秀太は何か隠しているな、と悪い考えが浮かんた。

「いいじゃないですか。ここで会つたのも何かの縁ですし、では失礼しますね」秀太はそう言いながら、馬車の中に入った。

「あつ！！コラ！勝手に入るな！！」一瞬で中に入ったため反応できなかつた様子だ。

「おいおい、これは犯罪じゃないの？」秀太は手首や足首を拘束されている獣人の四人の少年少女達を見た。

「クソ！バレたならしかたねえ！お前らコイツを殺せ！！」商人のおっさんが言う。

「わかりやしたよ」

「了解した」

秀太はとりあえず馬車から降りて傭兵の二人から距離をとる。

「君たちは犯罪に加担しているのをなんとも思わないの？」

「はっ！金がいいから雇われたまでよ！！」大柄な男は大剣を振り回しながら言う。

「彼に同じだ。君はどこかの聖人君子か？」細いが、がっちり筋肉のついた優男が言う。

「うーん、小さい子供がこうなっているのにちよつと許せないかも」秀太はそう言いながら、大剣を躲して、大柄な男の顔を殴った。

「ぐああー！！」大柄な男はそのまま数メートル吹っ飛んで地面に倒れる。立ってこなかったので気絶してしまったようだ。

「あはは…強すぎでしょ君」優男が顔を引き攣らせながら言う。

「生憎、腕には少々自信があるよ？まだやる？」

「いや、普通なら諦めるが、今回は護衛だからしないよ！」優男はレイピアを秀太の顔に突きつけてきた。しかし、秀太は首を横

にずらして避けて、そのままレイピアを持っている右手を殴った。

「ぐっ！」バキッという音がして優男は秀太と距離をとった。

「右手折れているよ？次は意識を刈るよ？」

「あはは…やばいねこれは」優男はそれと言った後、秀太に意識を刈られた。

「さて、最後はお前だけだが…殺そうか？」秀太は商人を思いつきり睨んで言う。

「ひいひい！いい、命だけは、命だけはー！ー！！」商人は馬車から転げ落ちながら言う。とりあえず、うるさいので秀太は

意識を刈り取って縛り上げた。ついでに傭兵の二人も縛り上げた。

馬車のなかの様子を見たが、ものすごく怖がられていた。とりあえず、手足についている枷を外してあげた。

皆、驚くような表情をしていた。

「とりあえず。お腹は空いていないかい？」秀太は笑顔で子供たちに言った。

皆、戸惑いながら頷いた。

「【ステーキが四つあったことにする】」

すると子供たちの目の前にいきなりこんがり焼きあがった大ぶりの

ステーキが出てきた。

「……はっ！？（えっ！？）……」子供たちはかなり驚いていた。

「えっと……好みが分からなかったからステーキにしたけどダメだったかな？」秀太は少し困りながら言った。

ブンブンっと皆首を横に振った。

「そう！ならどうぞ召し上がれ！」秀太は無邪気な笑顔で言った。

皆、恐る恐るステーキを食べた。

「おいしい」

「今まで食べた物よりもいいかも」

「最高！！」

「美味しいです」

皆、笑顔を浮かべて喜んで食べていた。

良かった。さっきまで沈んでいた目が虚ろだったからな。秀太はそう思いながら、笑顔で子供たちが食べるのを見ていた。

19話 旅先の出会い（後書き）

フラグ立てすぎですかね。回収できなかったらたいへんですね。

20話 神様になる

獣人の少年少女の四人はステーキを食べ終えて、満足している様子だった。

「皆の名前を教えてもらっていいかな？」

「エマです」

「ユウだよ」

「スウです」

「ジャン…です」

みんな頭から茶色の耳、茶色の尻尾が生えている。髪の毛と目も茶色だ。

「皆、兄妹だつたりする？」

「」「」「」そうです」「」「」

「お兄ちゃんの名前は？」スウが聞いてくる。

「僕は秀太はよろしくね」

話を聞くと、エマが長女で10歳、スウが次女で8歳、ユウが三女で6歳、ジャンが長男で5歳らしい。

「どうして、みんな捕まっていたの？」

「みなさんでお母さんにプレゼントを買いにいったら捕まりました」
エマが言う。

「それは…みんな同時にかい？」

「お店の人がいい物があるよって言って行って行ったら捕まりました」

「…そうかい。そしたらお母さん達は心配しているだろうね」

「早くお家に帰りたいよ」ジャンが涙を浮かべて言う。

「大丈夫！僕がちゃんと連れて行くし、お母さんに会えるよ」秀太はジャンの頭を撫でながら言う。

「ありがとう…お兄ちゃん」目を細めて安心している様子だった。

「君たちの服は汚れているし、まともな仕打ちじゃなかった感じだね」

「はい…体も一週間近く洗っていませんし…その…気になりますか？」エマは恥ずかしそうに顔をふせる。スウとユウも気にしているようだった。

「心配しないで、僕が魔法で服と体を綺麗にしてあげるよ。…じゃあいくよ」

「【四人の体に付着する不純物をなかったことにする】【四人の服をあったことにする】」秀太は続けざまに唱えた。

四人は体中ピカピカになった。そして四人に似合う上質なワンピースと上下の服がでてきた。

「とりあえず、僕は外にいるからみんな着替えてね」秀太はそう言う
と馬車から降りた。

「やあ、ようやく起きたみたいだね」秀太はそう言いながら、傭兵の二人を見る。

「あんた何ものだ？」大柄な男が秀太を睨みつけながら言う。

「まずは自分から名乗るべきじゃないかな？」秀太はさらりと流しながら言う。

「ふん！そうだな俺はアッシュだ。それでコイツがサラんだ」

「どうもサランです」優男のサランが言う。

「僕は秀太、よろしく？なのかな？」

「お前はバカか？俺たちはやっちゃいけねえことをしたんだぞ？」

「ふん、そうなんだ。もともとあの商人の傭兵なの？」秀太は言う。
う。

「いや、ただの用心棒として雇われただけだよ。お金がよかったからねまさか奴隷商人だと知ったのは護衛についた直後だけど」サラ
ジュが言う。

「それでもやめなかったのは…やっぱりお金ほしさあまり？」

「ああ、どうしてもお金がいるんだよ！俺たちには！」アッシュが怒鳴りながら言う。

「…実は僕たちにはね病気にかかっている村人たちがいるんだ」サランが言う。

「なるほど、そのためにお金を集めていたのか。ちなみにいくら？」

「300金だよ。…無理だよこんなお金は」サランが落ち込みながら言う。

「治る保障はあるのかい？」

「わからない、だがこの国で有名っていう医者に頼んだら300金用意しろっていうからな」アッシュが言う。

「…僕が無料で治そうか？」

「ハア！？お前バカか？そんなことできるわけねえだろ！！」アッシュが怒ってくる。

「シユウタさん着替え終わりましたよ」エマが笑顔で言うてくる。

「そうかい、そしたら皆一度、降りてきてもらっていいかい？」

「……はい！」「……」と言って皆降りてくる。

「ど、どういうことだ？さっきまでガキどもは汚らしい姿だったのに…」アッシュが啞然として言う。

「まあ、見ててよ僕が今から魔法を見せるから」

「【この馬車を最高のものであつたことにする】」

すると馬車が王族たちが使うような広々としたものになった。

「なっ！？じよ、冗談だろ！？」アッシュはかなり驚いていた。

「…もはや神ですね」サランは呆れながら言う。

「うーん、この大きさじゃ馬は足りないから【馬を六頭であつたことにする】」

馬も六頭出てきた。

「い、生き物まで…」アッシュはうな垂れていた。

「神に確定ですね」サランは一人で頷いて言った。

きついな〜でも少し【魔力】は上がった感じだね。秀太はそう思っていた。

「おい、顔色悪いが大丈夫か？」

「問題ないよ少し派手にやりすぎただけで…」

「そ、そうか…それで、俺たちの村に来てくれるのか？」

「ああ、ここから近いのかい？」

「ああ、半日で着くが…ガキどもは大丈夫なのか？」アツシュは顎で示しながら言う。

皆、こつちを見て震えていた。

「あはは、皆、大丈夫だよ。皆に悪いことしないように約束してもらったから」

「…まだして——痛っ！」秀太はアツシュの顔を摘み横に引っ張った。

「ほら、こうしても抵抗してこないでしょ？」

「…「あはははは！」」「皆、楽しそうに笑っていた。

「おまひえほほいへほほ！（お前覚えてろよ！）」ものすごい変顔で言われた。

サランは肩を震わせながらこつちを見ないようにしていた。

とりあえず、二人は縛ったままのほうがいいかな？って秀太は四人に聞いてみたところサランだけ外していいと言った。

その時、アツシュがものすごく抵抗したが、すぐに身動きを取れないように縛り付けた。…今は子供達のおもちゃになっている。

サランと奴隷商人のことはどうするのか相談したが国に送りつけることにした。多分、斬首刑は免れないとのこと。

自分たちはこれでいいのだろうか？と言っていたが、子供たちが許してくれた。サランはお礼を述べていた。

子供たちはアッシュが弄れるならそれでいいらしい。本人は泣きながら諦めて受け入れていた。

色々しているうちに、アッシュとサランの村、アルバ村に着いた。

「とりあえず、村長のところに行こう」サランがそう言った。

そろそろ、アッシュがやばそうだったので、縄を解いてやった。怒る体力もない感じだった。

「ようこそ、おいでくださいました」そう言って村長さんが出迎えてくれた。

「村長、この人がタダで村の病気を治してくれるらしいです」サランが言う。

「な、なんじゃと！？それは誠ですか？」村長が秀太を見ながら言う。

「ええ、そうなんです。それとお願いなのですが、今夜泊まる宿とがありますか？この子たちも一緒なんですが」

秀太はそう言っ、馬車の中にいた四人を紹介する。

「うむ！わかりました。私の家の客間を使ってよろしいですよ？」
村長は笑顔で言った。

「ありがとうございます。さっそくですが案内してもらっていいですか？」

「わかりました。私が案内します。どうぞこちらです」村長はそう
言って案内する。

「皆はここで待っていて、サランの言うことを聞いて大人しくして
いてね？」

「……はい！」「……」

こうして、秀太は一軒の小屋に案内された。

「ここです。ここに病気にかかった人たちがいます」村長がそう言
った。

「…感染する恐れを考えて隔離したんですね。何人いるんです？」

「四人です。それにみな子供なんです。お願いしますどうか助けて
ってください」村長はそう言って頭を下げる。

「もちろんですよ。そのためにここにきたんですから」秀太はそう
言って扉を開いた。

中は清潔とは決して言えなかったが、それなりに整えてあった。看
病をしたのだろう。子供達の様子は呼吸が荒く、咳をしていた。肺

炎かもしれない。

と秀太は考えた。

「【この四人の体の異常をなかったことにする】」「この小屋の中を清潔であつたことにする」秀太は続けて魔法を唱えた。

すると、子供たちは落ち着きを取り戻し、今は静かに寝ている。小屋の中も新品同様ピカピカになった。

「これで、もう大丈夫ですよ」秀太は笑顔で村長に言った。

「……こりゃたまげた。あなたは神様だったのですか？」村長が秀太を崇めるよう見ていた。

「いや、僕は普通の人間ですので……神様ではありませんよ？」秀太は苦笑いで言う。

「今宵は宴じゃ、みなのもの……！！ここにいる神様が子供達の病気を治してくれたぞ……！！」村長は秀太の話をまったく聞かなかった。

「……わああああ……！！」「……」

そして、ものすごく村人に崇められて秀太は苦笑いをするしかなかった。

21話 宴（前書き）

平日なので時間がなくて短いです。
言い訳ですいません

21話 宴

「さあ、今日はこの神様であるシユウタ殿がこの村の難病から救ってくださった。シユウタ殿に感謝を示して乾杯！」村長はそう言つてグラスを掲げる

。

「……かんぱーい！！」……村の人たち全員がグラスを掲げてそう言つた。

「あはは、乾杯」秀太も苦笑いしながらグラスを掲げた。

今の秀太はどこかの王様みたいな扱いをうけている。そして、子供たち四人は神様の使者いわゆる天使みたいな感じで崇められている。

みんなものすごく恥ずかしそうにしている。

「ねえサラン……どうしてこうなつたの？」秀太は隣にいるサランに声をかける。

「どうかしましたか？神様」サランは何気ない顔で言ってくる。

「……やめてよ、居心地悪いからさ」秀太は困つた顔で言う。

「あははっ、ごめんよ悪気はないんだ」サランは笑いながら言う。

「……意地悪なんだなサランって」秀太はジト目で言う。

周りの視線がサランに突き刺さる。「クロス」とか言うのが聞こえてきそうな感じだった。

「そ、そんなことないよ！さあさあ、飲んで飲んで！」サランは慌てて秀太に言う。

「…僕、お酒飲んだら周りの人を巻き込むからダメって家族に言われているんだけど」

「酒癖が悪い？飲んだらケンカでもするのかい？」

「家族が言うのは、人に絡むらしい、特に女性を」

「…ものすごく見てみたのだが」サランはそう言って飲ませようとする。

「まって、まって、さすがに迷惑をかけるかもしれないからダメだよ」秀太はそう言ってグラスを押し返す。

すると、お酒も入り、女性と話して上機嫌になっていたアッシュが秀太に近づいて背中をバシーンと叩いた。秀太はそのままサランの持っているグラスに口をつけお酒を飲んでしまった。

「うぐっ！…」秀太は思わず苦い顔をした。

「あはははは！お前まだまだ子供だな！」

すると、秀太はいきなり立ち上がり、さっきまでアッシュと話していた女性のところに行く。

「おっおい、俺の女に手を出すのか？」アッシュは少し怪訝な顔を
した。

「あ、あの何か御用ですか？」女性は少し緊張した感じで言う。

すると、シュウタは片膝をついて女性の手の甲にキスをする。

「えっ！？」女性は顔を真っ赤ににして驚いた。

「お嬢様、もしよろしければ僕とお話をしませんか」秀太は女性を
見上げて少し首を傾げて笑顔で言った。

「えっと！あの、その…」女性は片手を顔の頬にあてて迷う。

秀太は立ち上がって彼女の耳もとで囁いた。

「お話をしてくれたら、私を好きにしていいますよ」

ボンッと音を立てたように女性の頭から湯気が出た。

「よ、よ、よろこんで…」恍惚とした表情で女性は言った。

「はい、で行きましょうか」秀太はそう言って、女性を抱き寄せ
る。

「ひゃ！」女性の高い声が聞こえた。

「…ごめんなさい、もしかして嫌でしたか？」秀太は悲しい顔を
して言う。

「そ、そんなことはありません！…もしよろしければ向こうの川までいきませんか？」秀太を見つめて言う。

「ええ、よろこんでお嬢様」秀太はそう言う。

無論、村中の女性の視線を一気に集めた。多くは嫉妬の眼差しだ。

秀太はそれに気づいたのかこう言った。「もし、よろしければ皆さんもどうです？」

「よろこんで！」

「もちろんいきます！」

「どこまでも」

「ずっと一緒にいます」

そんな声がしてすべての女性を連れて、森のほうに秀太は消えていった。

「…なあ、サラン俺の女が連れて行かれたんだが」アッシュは秀太が消えた方を睨みながらそう言う。

「そうですね。けど、あなたには女なんていませんけど」サランはさらりと言った。

「うぐっ！確かにそうだが…お前の女も連れて行かれたぞ？」アッシュはサランを見てニヤニヤしながら言う。

「そうですね…愛が足りなかったのでしょうか？」サランは遠くを見つめながら言う。

「…普通怒らねえか？」

「いや、怒るを通り越して、呆れたよ」サランは苦笑いで言う。

「…確かにそうだな。なんか集団催眠にかかったようだったな」

「言葉に一種の能力でもあるのかな？」

「そんなのだったら、詐欺し放題だぞ？」アッシュは呆れながら言う。

「そうだね、でも男性には効かない感じかな？自覚がないだけまだいいよ」サランは言う。

「自覚あっても詐欺なんてあいつはしないと俺は思うが…」

「あはは、そうだね秀太はしないと僕も思うよ」サランは笑いながら言う。

「アッシュ、遊ぼう！」一番下の男の子ジャンがアッシュに抱きつきながら言う。

「…私も！」みんなアッシュに飛びつく。

「どわっ！お前らいきなり飛びついてくるな」アッシュはそう言いながらも少し嬉しそうだった。

「サラン！アッシュと遊んできていい？」エマは嬉しそうに言う。

「ああ、もちろんだよ遊んでおいで」サランは笑顔でこたえる。

「うん！」エマはそう言ってみんなとアッシュと一緒に鬼ごっこを始めた。

「あゝ本当によかった」サランは呟いた。最初みんな緊張をして敬語を使っていたが、だんだん仲良くなって今では敬語なしで話すようになった。

子供たちの親見つかるといいなゝとサランは思いながら一人で酒を飲んだ。

22話 リムール王国へ行こう（前書き）

すいません遅くなりました。

22話 リムール王国へ行く

「シュウタ殿、この村を救っていただき本当にありがとうございました」村長は頭を下げながら言う。

「あはは、そんな大したことはしていませんよ」秀太は笑顔で言う。

「そんなことはありません！村にとって一大事でしたので…そんな謙遜なさるなんて、やはりあなたは…！！」村長は拝むように秀太を見る。

「前も言ったように違いますよ。それよりもいいんですか？アッシユとサランを護衛に連れていっても？」

「いいんですよ二人はもともとついて行くみたいな感じですし、シュウタ殿がご迷惑でなければ…」

「いえ、ご迷惑なんてありませんよ。むしろ頼もしいですよ」

「でも、お前には負けたけどな」

「本当にそうですよ」

アッシユとサランはジト目で秀太を見る。

「こら！お前たち村を救ってくれた方に何たる無礼を！！本当に申し訳ありません」村長はペコペコしながら秀太に謝る。

「いいですよ。僕はこのくらい気にしませんし、こっちの方が話しやすいですし」

「おい、そろそろ行こうぜ。いつもでもこうしちゃいらねえだろ？」アツシュが言う。

「馬車はサラン頼んだよ。僕は道詳しくなし」

「わかった。それでは行こうか」サランはそう言って、たずなを持つ。

秀太とアツシュも馬車に乗り込む。

「それでは、皆さんお元気で」秀太はそう言って村の皆に言う。

「シュウタさんこれをお持ちください」村の女性がネックレスを渡してくる。

「これはなんだい？」

「これは村の女性たちからプレゼントの精霊の加護があるネックレスです。ご迷惑でしたか？」上目遣いで女性は見てくる。

「いいえ、ご迷惑なんてありませんよ。ありがとうございます皆さん」秀太はさっそく身に付けて村の女性たちにお礼を言う。

「絶対にまたきてくださいね！」

「またお話聞かせてください！」

「できれば、村に住んで欲しいです！」

「私の家でも構いませんよ！！！」

女性達が黄色い声を出して盛り上がる。

馬車はゆっくりと動き始めた。

「そういえば、ここからリムール王国までどのくらいかかるの？」

「ああ、二日位だろう。急ぐ旅でもないしな」アッシュは手を後ろに組みながら言う。

「そういえば村の女性はみんな優しくったね。僕にこんな素敵な物をくれるし村の女性たちは恵まれているね。また行きたいよ」秀太はアッシュを見ながら言う。

「…なあお前昨日のこと覚えていないのか？だとしたら女どもは哀れだわ」アッシュはふうふうとため息をつきながら言う。

「昨日のこと？僕は何かしてのかい？」秀太は首をかしげる。

「…お前それ女の前でやらない方がいいぞ？それにあの反応をみたら大体想像はつくだろう？」

「やらないほうがいい？想像がつく？」秀太はどんどん表情が険しくなる。

「シウウタ…乙女心わからないんですか？」エマは何故か呆れていた。

「…エマこいつに言っても無駄だ。まったく羨ましい限りだぜ」アッシュはため息をつきながら言う。

「お姉ちゃん達はさっきから何を話しているの？」スウが言う。

三人はまったく分かっていない様子だった。

「スウとユウとジャンはまだ分からないかもしれないですけど…シユウタの年齢ならわからないとダメです！」エマは頬を膨らませながら言う。

「そうなんだ〜ごめんねわからなくて」秀太はエマの頭を思わず撫でた。

「…ま、まだ分からなくてもいいです」エマはそっぽを向きながらも受け入れていた。

「いや、分からないとダメだろ」アッシュはエマにツツコミをいれた。

しばらくしたら、エマ以外の子供たちとアッシュは揺れ心地が良くふかふかのソファのせいで夢の中に旅立った。

エマは優しく皆の頭を撫でていた。

「エマは寝なくていいのかい？アッシュも寝てるし」護衛の意味ないなつと苦笑いしながら秀太は言う。

「いえ…私は眠くないしそれにこの子達の面倒をみなくちゃ」エマはそう言って皆の頭を撫でる。

「さすがお姉ちゃんだね。しっかりしてるよ」

「そんなことはないです。捕まったときは怖くて何もできませんでしたし…」エマは落ち込みながら言う。

「あたり前だよ。それはいきなり捕まるし、ひどい扱いだったんでしょ？」

「そうです。まともな食事はくれないし、まるで動物扱いでした！エマは怒りながら言う。

事件のことをぼつぼつと話してくれるのは信頼されてくれることでもあり秀太は嬉しかった。

「…ひどいね。やっぱり間違っているよ。そんな人が居るなんて許せないよ」

「どうしてそんなことを人間はするんでしょうか？シュウタはこんなに優しいのに」

「そうだね。みんなが優しくかったら本当にどれだけいいことか…」秀太は遠くを見つめながら言う。

「…シュウタどうかしましたか？」エマは心配そうに見つめてくる。

「いや、何でもないよ。そうだね、エマも人に甘えてもいいんだよ？困ったら相談してね？」秀太は笑顔で言う。

「その…だったら二人のときだけお兄ちゃんと呼んでもいいですか

？」「上目遣いでエマが言う。

「もちろんいいよ」秀太は笑顔で言う。

「じゃあ、お、お兄ちゃん…抱きしめてもらってもいいですか？」
エマは顔を真っ赤にして言う。

「いいよ」秀太はそう言って静かにエマを抱き寄せる。

「う、ひっぐ…ッ」エマは秀太の胸の中で泣き出した。

「辛かったね」

「うっ、うっぐ…はいッ」

「大丈夫だよ僕や皆が居るし、今はおやすみ」秀太がそう言うとエマは静かに眠った。

23話 リムール王国

あれから二日がたち、秀太達は獣人の国リムール王国についた。

「その馬車止まれ！」王国の衛兵に止められる。

秀太はドアをあけて衛兵に話しかける。

「実は僕たちは獣人の子供達を保護したんですが」

「むっ！その子供たちは馬車にいるのか？」

「ええ、みんな降りてきて」秀太がそう言うと、子供たちが降りてきた。

「この子供達はどこで保護したのだ？」

「奴隷商人に捕まっていて、それを僕が助けました」

「なんだと！また人間共の仕業か！」衛兵はかなり憤慨していた。

なるほど、どれだけ人間が嫌いかわかるな。と秀太は思った。

「すまない、あなた達を侮辱したわけでは…」衛兵は申し訳なさそうにしていた。

「いいえ、気にしないでください。それよりもこの子達の親を探し

てほしいのですが…」

「うむ！了解した。案内人を呼ぶから少々待っていただきたい」

「ええ、わかりました」

十分くらいしたら、案内人がきた。

「どうも初めまして、案内人を務めさせていただきますレイナとい
います」レイナは銀色の耳、尻尾をもっている清楚な女性だった。

「ご丁寧にどうも、僕は秀太です」

「アッシュだ」

「サランです」

「よろしくお願いしますね。シュウタさん、アッシュさん、サラン
さん」レイナは笑顔で答えた。

（なあ、シュウタめちゃくちゃ美人で胸でかくねえか？）アッシュ
がシュウタに耳打ちをする。

（ねえサランなんかアッシュがレイナさんのこと…）秀太はサラン
に耳打ちをする。

（シュウタ、ここはアッシュがそのことを言ったとレイナさんに言
ってみては？）

（それはいいね。どんな反応するか楽しみだ）

「レイナさん、めちゃくちゃ綺麗で胸も大きいって」…もうっ！シ

ユウタさんのえっちゅ」…うん」レイナは頬を膨らませ照れている様子だった。

アッシュとサランは背を向けて肩を震わせていた。

あゝなるほど騙されたわけか…許せないかも秀太はそう思いながら笑顔で拳を握った。

「…シユウタ、胸が大きいほうがいいんですか？」エマはそう言うて俯く。

「そんなことないよ」胸があってもなくてもどうでもいいよ？」秀太は笑顔で言った。

「そ、そうなんですかよかった」エマは安堵している様子だった。

「皆ちよつと後ろ向いていてね？」皆を後ろに秀太は向かせた。

「レイナさんと衛兵さん達は城のほうを向いていただけます？」

「一体どうしたんですか？」レイナは言う。

「すぐ終わるからちよつとだけ、ねっ？」秀太は言う。

「分かりました！さあ衛兵の皆さんも！」

「…はっ！」「…」そう言う掛け声とともに衛兵たちは城の方を一齐に向く。

「…さて覚悟はできたかな？」秀太はそう言う。

「…待つてシュウタあれは事故だよ！？さすがぐぶつち！」サランはそのまま腹を殴られて数メートル先の壁にぶち当たる。

そして秀太はくるっと方向転換をしてアッシュをみる。

「おいおい待て待て！俺は関係がへぶつす！」アッシュはそのまま腹を殴られてサランと同じ目にあう。

「二人は仲良くでしょ？ああ、皆さんもういいですよ？」

「えっと…あれは何ですか思わず音がして振り返りましたが…」レイナはそう言う。

「あそこにいるのは僕をそそのかした変態たちです。気にしないでいいですよ？」秀太は笑顔で言う。

「そうなんですか…ならいいですね。では行きましょうか」

秀太は子供達を馬車に乗せて、秀太とレイナが運転をする。さすがに置いていくのは可哀想なので、倒れているサランとアッシュは縄でぐるぐる巻きに

して詰め込んだ。子供達がそう言ったからしかたなかった。

ここはある部屋の中での話し合いである。

「お兄ちゃんは、リムール王国に向かっているって本当？」麻衣が言う。

「ああ、どうやらそんな感じみたいだ。スムーズに入れるようにできないか？」シロが言う。

「そうですね。私がいっつと言う名目で行けば大丈夫だと思いますよ？」レイが言う。

「なら、そうしよう」シロが言う。

「でも、リムール王国は普通の人では入れませんよ？シユウタはどうするのでしょうか？」レイは心配そうに言う。

「あつ！大丈夫だよ。お兄ちゃん普通じゃないもん」麻衣は笑顔で言う。

「…まあ確かにあのかつこよさは普通じゃないですね」レイは両手を頬にあてて、くねくねする。

「…あいつは一体ベットで何をしたんだ！！」シャルがブチ切れる。

「落ち着いて、それは後でお話の時に聞けばいいから」麻衣はそう言いながらも額に青筋を浮かべる。

「…それもそうだな、それでは旅の準備は言いとして、とりあえず通行許可証がいるな」シャルはそう言うと言部屋から出た。

「…それよりも、シュウタさんは何に巻き込まれているのですか？」
アレクスが言う。

「…ごめん、それはまだ言えないの。信用していないっていうわけじゃないけど…ごめんね」麻衣はアレクスに申し訳なさそうに言う。

「い、いえ！こちらこそ申し訳ありません！」必死でアレクスは謝った。

しばらくして、シャルが許可書を持ってきた。麻衣達は城の外にて馬車に乗り込んだ。

「では、いくぞ」シャルがそう言うのとゆっくりと馬車が動き出した。

お兄ちゃん待っててね。麻衣はそう思いながら外を眺めていた。

23話 リムール王国（後書き）

すみません、誠に勝手ながらネタが尽きたためつくります。
もしかしたら、時間がかかるかも知れません。

24話 感動の再会（前書き）

どうも皆さんお久しぶりです。どうもテストの成績が悪すぎて親にPC禁止令が出されていました。不幸ですね…いや自分が悪いんですけど…

とりあえずこれからもぼちぼち頑張っていきますのでよろしく願います。

24話 感動の再会

「ねえ、なんかさっきから注目されている気がするんだけど…」秀太は周りを見ながら言う。

「仕方ありませんよ。だってこの馬車見たこともなければ、この大きさもありえませんか」レイラは苦笑いしながら言う。

秀太が作った馬車はこの世界において、確立されていない技術なのだ。ゴムのタイヤ、サスペンション、そして、10人は余裕で入る大きさ、さらにものすごく乗り心地良いなどかなり目立つのだ。

「少しやり過ぎたかな…作らなきゃよかったかな？とりあえず自重しなきゃ」

「…この馬車はシュウタさんが作ったのですか！？」レイラが驚きながら言う。

「え？そうだけど…何かまずかった？」

「いえいえ！この馬車の技術教えてほしいなと思ひまして…ダメでしょうか？」

「まあ別に良いけど…いつがいい？」

「そうですね…明日の朝、城に来て頂けませんか？」

「城？…いいけど」

「わかりました！では、明日、城の門の前にいますので」目をキラキラしながら言うてくる。

そんなに乗り心地がよかったのかな？秀太はそんなことを考えていた。

「あつ！場所聞いてないや」秀太はそう言って小窓を開ける。

「エマ、君の家はどこにあるんだい？」

「はい、家は住宅街の一角にある一軒家です」

「了解。んじゃ着くまでゆっくりしててね」

「わかりました」

「住宅街にいきますか」秀太は言う。

「行っくっていう距離でもないですがね…」

うん、目の前にあるのが住宅街だね。秀太は心の中で呟いた。

とりあえず、エマたちの家に着いた。エマ達の家は庭が広がった。

秀太は庭で花の世話をしている女性を見つける。見るからに元気がない様子だった。

「お母さん！！」エマがそう言いながら馬車から飛び出した。

「え、エマ！？本当にあなたなの？」お花の世話をしていた女性がエマを抱きしめながら言う。他の子供達も向かう。

「お母さん！」

「母さん！」

「ママ！」

「ユウ！、スウ！、ジャン！みんな良く無事で……！」エマ達のお母さんはみんなを抱きしめながら泣く。

「おうおう、良かったじゃねえか」アッシュが言う。

「そうだねー家族愛だねー。……すいませんそろそろ、ロープを……」サランが言う。

「……仕方ないな」秀太はそう言ってナイフでサラン達のロープを切る。

「……なあ、自由っていいな」アッシュが唐突にへんなことを言う。

「……今なら僕も分かる気がするよ」サランが言う。

「まあ、とりあえず会えてよかったと思いますよ？……それでは私はこれで」レイラが言う。

「…僕達を監視しないでいいのかい？」秀太が言う。

「くすつ、気づいていたんですか。あなた達は危害を加える人達ではないと判断しましたからいいんですよ」レイラは笑みを浮かべて言う。

「…わかった。そういうことならいいや」

「それではまた明日、シュウタさん楽しみにしていますよ？」妖艶な笑みを浮かべてレイラは帰っていった。

「…てめえ！また女を捕まえたのかよ！」アツシュが秀太にキレる。

「女の人を捕まえたことなんて一度もないんだけど…」

「くそ！くそ！なんて世の中は理不尽なんだ！俺にもチャンスくれよ！」orzこんなポーズをしながらアツシュが言う。

「あの…あなた達は一体…」エマ達のお母さんが不審の目を秀太たちに向けながら言う。

「お、お母さんあの黒髪の人が私達を助けてくれたの！」エマが言う。

「まあ…！この子達の恩人さんだったのですか…！」

「ええ、私はシュウタと申します」秀太は一礼をする。

「…丁寧にも、私はこの子達の母親のランと申します」

「護衛のアッシュです」

「同じくサランです」

二人も一礼する。

「とりあえず、中に入ってお話を聞かせてくれませんか？」

「ええ、わかりました。アッシュ、サランもちろん君達もだよ？みんなは遊んでいていいからね」分かってるよね？てきな視線を秀太はサラン達に送る。

子供達は元気よく返事をして、庭で遊ぶ。

サランとアッシュは無言で頷いた。

家の中に入ってテーブルにつく。

「お茶です」そう言ってランはお茶を秀太達に出す。

「ありがとうございます」

「どうも」

「どうもありがとうございます」

「それで、あの子達はどこにいたんです？」

「僕が見つけたときには、商人の馬車に奴隷として乗っていたんで

すよ」

「ど、奴隷としてですか!!」ガタンと音を立てながらランさんは立ち上がる。

「…そうです。話によると一週間捕まっていたそうです」

「…人間は本当にひどいですね!腹が立ちます」

「路地裏で捕まったと言っていたんですが、ここの城下町にいたんじゃないですよ?」

「ええ、確かにそのときはここにいませんでした。あのときは別の町にいたんです」

「なぜそんなところに?」

「あの子達は城下町以外の町のところに行きたいと言ったものから比較的安全なところを選びました。まさかこんなことになるとは…もうこんなことにならないようしっかりいつけます!」

「そうだったんですか…でもあの子達を責めないであげて下さい」

「どうしてですか?」

「あの子達は、ランさんにプレゼントを買ってあげたかったらしいです」

「プレゼントですか?でも何でまた…あっ!」ランさんが何か思い出したように声をあげる。

「たぶん、ランさんの誕生日プレゼントに城下町にはない珍しいものを探したかったんじゃないですか？」

「…ふふふ、そうだったんですか。まったく心配ばかりかけて…」
ランさんは目に涙を溜めながらいう。

「あと、もう一つあります」サランが真剣な表情で言う。

「一体何ですか？」ランは少し不安な表情を見せる。

サランは自分達が傭兵として奴隷商人に雇われていたこと、いけないことと分かっていること。お金がどうしても必要だったことなどを話した。

「本当に申し訳ございませんでした！」

「申し訳ございませんでした！！」

サランとアッシュは誠意を表した土下座をした。

「顔を上げてください二人とも」

二人は顔を上げてランを見つめる。

「確かにあなた達がしたことは許されることはありません。しかし…」

「くすっ、どうやら子供達には好かれているようですね」ランはそう言っただけの方を見る。

子供達がドアに隠れてじーっとこちらを見ていた。

「お母さんサランとアツシユは優しいよ」

「いい人だよ」

「遊んでくれるよ!」

「…一緒にいると楽しいよ!」

みんなランに向かって言う。

「あらあら、これじゃまるで私が悪者みたいね。二人を私は許すわ」
そう言いながらランは微笑む。

「あ、ありがとうございます」

「ありがとうございます!」

「ねえ!そんなことよりも向こうで遊ぼうよ!」

「勇者ごっこがいいな」

「じゃあ!アツシユが悪役ね!」

「サランは騎士ね」

「あつ、ちょ!おい!」アツシユは子供達に引っ張られて連れて行かれる。

「ふふふ、じゃあ僕もいこうかな」そう言ってサランは子供達についていった。

「本当に仲が良いんですね」

「ええ、そうですよ。やっぱり笑顔が一番ですよ。…エマは行かなくて良かったのかい?」

「わ、私はその…ここがいいんです！」そう言って秀太によっかる。

「？そうかい、ならいいけど」

「あらら、エマもしかして…」その光景を見てランは微笑んだ。

夕方になり秀太達は宿を探すために、ここを出ようとしたが、泊まっていたほしいと言うみんなの要望があったので今は夕食である。

「さあ！いっぱい食べてくださいね」

そう言ってたくさんの料理が並んでいく。

「うわ〜美味しそうですね」秀太はそう言ってハンバーグを食べる。

「美味しいですね。中は肉汁がたっぷりです」

「ふふふ、実はそれエマが作ったんですよ？」

「え？エマが？」秀太はそう言って隣にいるエマを見る。

エマは顔を真っ赤にしていた。

「ふふつ、美味しかったよ。エマはいいお嫁さんになれるね」秀太はそう言ってエマの頭を撫でる。

「え、えつと、あの、そ、そのシュウタさんがよければ毎日作ってあげますよー!」

「ありがとう。そう言ってくれて嬉しいよ」

「え、えつ! ?じゃあ私とけ、けけ、けけけ」頭がオーバーヒートしたみたいで湯気が出ている。

「大丈夫かい?何かすごいことになっているよ?」

「…シュウタあなたのせいだけど」サランが言う。

「ん?どういうこと?毎日作ってあげるのは無理だけど気持ちだけ受け取るよみたいな?感じで言ったただけだけど…」

「いや…もうシュウタ殴っていいか?」アツシュがそう言って立ち上がる。

「なんで?意味わからないよ」

「あら〜シュウタさんって鈍感なんですね〜エマ、直接言わないといけないよけど…」

「い、い、いや、あの、その、好きです! !大好きです! !」真っ赤になってエマは言う。

「うん、僕もエマのこと好きだよ」

「ほほほ、本当ですか! !」

「本当だよ。あと、ユウもスウもジャンも大好きだよ」秀太はそう言って皆をみて微笑む。

「どうせそんなことだろうと思ったよ」

「そうだね。期待を裏切らないよね」

「残念ねエマ」

「もういいです！ シュウタさんなんでわからないんですか？」エマは頬を膨らませていう。

「何が分からないか知らないけど、エマのことは好きだよ？」

「…もういいです」エマはそう言ってそっぽをむいた。

25話 思わぬ出来事（前書き）

今回はあまり進展がありません。
それでも、見てくれると作者は嬉しいです。

25話 思わぬ出来事

夕食後、秀太達は秀太が用意したトランプで遊んでいた。みんな初めて見るのもとても興奮していた。

コンコンつとドアを叩く音が玄関から響く。

「あら、誰かしら？」ランはそう言って玄関に向かう。

「待ってください」秀太がランを止める。

「一体どうしたんですか？」

「…気配を感じないんで怪しいですよ」玄関を示しながら言う。

「…盗賊？もしかしてまた子供達を…！！」そう言ってランは顔を青くする。

「ランさん、子供達を連れて奥に行ってください。サラン、アッシュ戦闘態勢」

ランは子供達を連れて奥へ移動する。サランとアッシュは剣を抜いて構える。

「僕が合図するまで動かないで」秀太はそう言ってドアのほうに行く。

「【透視スキルがあつたことにする】」

秀太はそう言つてドアを透視して見るが誰もいない。

どこかに移動したのか？それとも…

コンコンつとまた音がする。

やっぱり玄関にいる。秀太はそう確信した。

「敵は認識できない魔法を使っている。もしかしたら肉眼じゃ見えないかもしれない」

「了解どうする？」サランが言う。

「大きな光を出して目をくらませる。サラン、ドアを合図したら開けてくれ」

「【閃光玉をあつたことにする】」

秀太は手に収まる閃光玉を作り出した。

「わかった」サランはドアに近づく。

「目痛くなるから、ちゃんと目をつぶってね。いくよ。3・2・1
今だ！」

サランはドアを開けた瞬間にシュウタは閃光玉を投げる。

ピカッと閃光玉が光る。

「……キャー……!!」……と女性特有の悲鳴が響く。

「くっ！目が！」

「誰です！こんな悪戯をするのは!!」

「……もしかしてお兄ちゃんかな？」

「痛いですね～お仕置きが必要のようですね～」

「……許せないかも」

「うゝむ、眩しいもう朝か？」

麻衣たちが黒いオーラを出して目を押さえていた。

「【回復】」麻衣がそう言うともみんな目を押さえるのをやめた。

「お久しぶりですね？シユウタ、これは歓迎の挨拶だったりするんですか？」レイが黒い笑みを浮かべながら言う。

「やあ、僕的にはお久しぶりではないけど……話をきいてほしい」

「はい？何ですか？お話ですか？」

「いや、そんな愉快なものじゃないんだが……待ってくれシャル剣を降ろしてくれ」秀太は両手をあげて秀太の首筋に剣を当てているシャルに言う。

「なんだ？これは挨拶なんだが？」シャルはにやりと笑う。

「……悪かったでも聞いほしい。気配がまったくしなかったんだ」

「気配？ああ！そういえば認識阻害の魔法使いっぱなしだった！」

麻衣が慌てて言う。

認識障害か…僕の魔法で見えなかったのも関係があるかもしれない。まずいな…ますますこの魔法に依存できないぞ秀太は思う。

「閃光玉にびつくりして大声あげたから効果は切れたみたいだね」

「うん、ってそれよりも！お兄ちゃんどうしてあんな手紙を残して去ったの？」麻衣が秀太を真剣に見ながら言う。

「それはあんなこともあったし…嫌われているとおもったから」

「なんでそんなこと勝手に決め付けるんですか！私はシユウタのことは嫌いではありません好きですよ！！」レイが顔を真っ赤にしなから言う。

「私も！」

「私もです」

「私もだ」

「あたしも！」

「僕も」

「私…も」

「無論私もだ」

「妹の私は言うもでもないよね？」

みんな秀太を見ながら言う。

「あはは、そうだったんだ。僕の勘違いだったんだ」秀太は苦笑いする。

「そうですね！そして危険なところに行くのであればどうして私達に相談してくれないんです？」レイは頬を膨らませながら言う。

「…みんなを危険な目に合わせたくないから」笑顔で秀太は言う。

「そんなの構いません！どうして仲間を頼らないのです！？」レイは目に涙を溜めながら言う。

「自分に危険を及ぶのは構わないよ…でもね自分の都合で他人を巻き込むのは嫌なんだ」

「それは自己満足です！！シユウタが傷つくことで誰かが悲しむんですよ！！」

「…そうだったんだ。うん、確かに自己満足だね」

「…そうですね、もう少し頼ったっていいじゃないですか…」

「ごめん、今度はもう少し考えて行動するよ」秀太はレイの頭を撫でる。

「うつつ！そ…う、ですよ…」レイはそのまま秀太に抱きついた。

秀太は抱きとめてそのまま頭をゆっくり撫でる。

「どうやら今回はレイの勝ちだね」

「あんなに幸せそうなレイ様の顔みたことがないな」

「ふふふっそうですね。でもちよつと嫉妬しますわ」

「レイ様いいな、私もしてもらいたいな」

「…ずるいかも」

「別に羨ましくなんかないし!!」

「もう少しファンは素直になろうね?」

「まあ、私は胸の中に潜るという特権があるし」

みんな思い思いの言葉を述べた。

一段落ついて、ラン、子供達、サラン、アッシュに紹介をした。

「シュウタさんを追ってここまで来たんですか、ご苦労様です」

「いえ、そこまで大変なことではなかったですよ」麻衣が言う。

「居なくなった時には流石に慌ましたけど…」シャルが秀太を睨みながら言う。

「そう言えば罰を与えていませんでしたね…シヨタ化?でしたっけ?」メーブルが首をかしげながら言う。

「そうそう！お兄ちゃんシヨタ化計画だよ。これはあくまで罰だからね？」麻衣が笑顔で秀太に言う。

シヨタ化？おいおい、まさか、僕を小さくするんじゃない？逃げる！

秀太は瞬間移動を使って逃げようとする。

「【魔法無効化】さらに【束縛】」麻衣が逃がさなかった。

「ふふふっシユウタが小さくなってあんなことやこんなことを…えへ、えへへへへ」レイが恍惚な表情を浮かべる。

秀太は周りを見渡すとみんなレイと同じ表情をしていた。

「【縮小】」麻衣がそう言うのと秀太は見る見る小さくなって170後半あった背が120まで縮んだ。

「か、かか、かわいい！！」レイはそう言って秀太に抱きつく。

「レイ、苦しい」秀太はジタバタ暴れるがどうにもならない。

「ああ、声も可愛くなっていますわ。もう離しません！さあ、このままベットであんなことや…」レイは恍惚な表情を浮かべたまま二階に移動しようとする。

「ダメです！いくらレイ様でもそれは許しません！」メディアがレイを止める。

「メディア邪魔をしないでください！今から秀太と私は甘い一夜を過ごすんです！！」

「シュウタは私のご主人様です私がご奉仕します！」

「待て！それなら私もシュウタをご奉仕するぞ？」シロものつてくる。

「それなら、弟子である私も！」ファンが言う。

「わ、私も……！」

「お兄ちゃんは私ものもだよ？誰のものでもないんだけど……」

みんなそんな感じですよーっと言い争う。

秀太はサランとアツシュに助けを求めるが二人は首を竦めて苦笑いするだけだった。

いつまでこの争いが続くんだ？秀太は笑いながら眺めていた。

次の日の朝、秀太はぐったりした様子でレイナさんの約束を守るために城を訪れていた。…無論みんなを連れて

「ここがお城ですか？綺麗ですね」レイがそう言って城を見る。

城は銀色を主体とした色で、そびえ立つ高い塔、豪華な柱など、か

なり鉄壁な感じである。

「お待ちしておりましたよシュウタさん」レイナが腰に剣をぶら下げ、騎士の軽装姿で現れた。

「ああ、うんレイナさんは騎士だったんだ」

「ええ、王族直属の騎士団の副隊長ですわ」

「…すごかったんだね。驚いたよ」

「ありがとうございます。それよりも…後ろの方々はもしかして…」

「ええ、スフィード王国から参りました第一王女のレイ＝スフィードと申します」

「ああ！これは失礼しました姫様。私は案内人を務めさせていただくレイナと申します」レイナは軽く一礼をする。

「ええ、よろしくお願いします」

「では、皆さん私についてきてください」

城に入ってしばらくすると大きな扉が目の前に見えた。そしてレイナはその前に止まる。

「こちらで王が待つております。今回はスフィード王国と技術交換と言うことで先ほど伝えました。みなさんにそのように対応してもらつと助かります」

「わかりました」

「では、行きましょうか」

こうして秀太達は王との謁見が始まった。

25話 思わぬ出来事（後書き）

誤字脱字の修正をしました。

指摘してくださったカイウス様、本当にありがとうございます。

26話 最悪な出来事

三城 秀太 視点

「シャル、アレクス、大丈夫？なんかそわそわしているけど…」

「あ、ああ、大丈夫だ問題ない」

「え？あ、はい大丈夫です」

アレクスとシャルは何故か落ち着かない様子だった。

まあ、今気にすることじゃないか。秀太はそう考えた。

「…シロそろそろ胸から出て欲しいんだけど」

『私の寝床をシュウタは取るのか！？私はここがいいに決まっています！！誰にも譲らんぞ！！』高々に念話で宣言する。

「…わかったシロがそこまで言うなら…いいよ」

『ふふふっ 最高だ！これほど最高なことはないぞ！』シロはものすごく興奮しながら言う。

まあ、いいか。秀太は苦笑いしながら受け入れた。

「陛下、昨日お話した人物をお連れしました」レイナがそう言って王の前で膝つく。

「うむ、ここに来るように申せ」重く低い声が響く

「承知しました。ドアを開ける！」レイナの声が響く。

すると兵士が扉を開けて秀太達を入れた。

「黒髪黒目の男そなたが馬車を作ったと言う人物か？」金色毛並みの荘厳な王が壇上の椅子に座っていた。

「ええ、私がそうです。名前はシュウタと申します」

「うむ、シュウタ殿お主の後ろにおるのはスフィード王国の姫なのか？」

「申し遅れました私、スフィード王国第一王女レイ＝スフィードと申します」

「おお、そなたが第一王女なのか噂どおりで綺麗じゃのう」キツイ視線をレイに送る。

「お褒めの言葉ありがとうございます」どこかレイは不快そうだった。

「さて、今回はシュウタ殿お主の作った馬車の技術を我々に教えて欲しいのだ」王はどこか見下したような感じだった。

「人間嫌いは本当のようだねかしどうしてここまで…？シュウタは考える。」

「構いませんが交渉と言う形でしてもらいたいのですが…」

「ふむ、いいだろうお主は何を望む。金か？女か？それとも権力か？」毒を吐くように言ってくる。

「いいえ、ある情報について教えて欲しいのです」

「ほう、よっぽどの情報なのだろうな…申してみろ」

「ええ、それは――」

「王様大変です！！おい！その黒髪の少年を捕らえろ！！」兵士がそう叫ぶとみんな慌てて秀太を囲み出す。

「一体どうしたというのだ！！些か無礼であるぞ！！」王が激昂する。

「申し訳ございません！しかし、このものが、あの大魔女ローズ＝エルキナスと繋がりとあるとのことです！」

「なんだと！それは誰からの情報だ？」

「はい、スフィード王国に仕えるもの二名からです。二名は今、そこで妹を捕らえています」

秀太はそつちを見る。アレクスとシャルが麻衣に剣を向けていた。

二人の剣先が震えている？…どういうことだ？…まさか誰かの命令で？秀太は考える。

「こいつが大魔女と繋がっているのは本当なのか？」王が秀太を指

しながら言う。

「はい、間違いありません。大魔女が使っていたとされる魔法を使っていたとされています」シャルが言う。

「ぐぬぬ！この悪魔め！私の命を狙おうとしてもそうはさせんぞ！
！この悪魔を殺せ！！」

「しょ、承知しました…や、奴を殺せ！」レイナは戸惑いながら言う。

とりあえず麻衣を助けて逃げるか。秀太はそう考える。

【身体強化スキルと粒子を操れるスキルがあつたことにする】秀太は心の中で言った。

秀太は一瞬で10m離れた麻衣を救い出して、入口まで移動した。

「お兄ちゃん！？…この格好は恥ずかしいんだけど」麻衣が顔を真っ赤にしながら言う。

秀太は麻衣をお姫様抱っこをしていた。その様子はまるでお姫様を救い出した。どこかの王子様のようなのである。

「あれ？まずかった？でももう少し我慢してね？」

「なっ！貴様！追え！奴らを逃すな！捕らえろー！！」王が叫ぶ。

30人ほどの兵士がいつせいに襲いかかる。

「…恨まないでね？…いや、それは無理かな」

秀太の周りに光を纏った粒子が集まるそして大きな二つの翼を作り上げた。

「いけ」

いつせいに何百ものの光の刃が兵士たちに向かっていく。

「……………うわあああああああ！！」「……………」

兵士がバタバタと倒れていくしかし不思議なことに血が一滴も出ていない。

「手加減はしたよ？」

「ひっヒイイイーー！！」王が怯える。

ヒュンつと音が響いたと思ったら王が気絶していた。

「シユウタさん！どうしてこんなことをするんです！！何故、大魔女なんかに…！」

「ローズが何をしたのか知らないけど、決して他人に迷惑かける人じゃないよ」

「ですけど！大魔女は魔物をこの世に放ったんですよ！？」「レイナが悲痛な表情で叫ぶ。

…なんだ？どういうことだ？魔物をローズが放った？いや、今、考

えることじゃない秀太はそう判断する。

「彼女は僕の命の恩人なんだ」秀太は笑顔で言う。

「命の恩人!？」

「そう…だからその恩を返すためにも、しなくちゃいけないことがある」

まあ、復讐っていうのもあるけどね。秀太は心の中で言う。

「それはなんです!？そこまでする必要が——」

「【七神柱】セブンスコイル僕たちをここに呼び、利用しようとする者たち…許せないよ」秀太が遠くを睨みながら言う。

「…じゃあ行くね。たぶん会うことはもうないんじゃない?」

「シュウタさん!!待つてください!!置いていかないでください!!」レイが泣き叫びながら秀太のところに来る。

「ごめんね?レイ」

「待つて!!…いや!いや、いや!!いや——!!…」レイが追いついた時にはもう秀太は消えていた。

秀太は麻衣を抱えて王国からかなり離れた森に瞬間移動した。魔法で誰も居ないことを確認したが念には念をだ。秀太はそう思って周囲を警戒する。

「あつ…やばつ」秀太は麻衣を降ろした直後、ふらふらしながら地面に膝をついた。

「お兄ちゃん大丈夫!？」

「ああ、大丈夫だよ」

使ったことのないスキルを二つも使い、瞬間移動もして秀太は疲れていた。

「でも…」麻衣が心配そうに見てくる。

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫だから」秀太はそう言つて立ち上がる。

それほど難しいスキルじゃないからなんとかコントロール出来たけど…難しくなったら無理かなと秀太思った。

「お兄ちゃん本当にあれでよかったの？」麻衣が心配そうに見つめる。

「問題ないよ。僕たちのリスクが上がるなら切り捨てるし、関わることで危なくなるなら断ち切るよ」

「でもそれじゃあ」

「いいよ、僕のことは気にしないで、それとごめんね危険な目に会わせて」秀太は申し訳なさそうに言う。

「いいよそんなことくらい！でも…あまり自分で抱え込むのはやめてね？困ったときはちゃんと私に相談してよね？」

「ああ、その時はよろしく頼むよ…ねえシロ〱そろそろ出てきて〱」

『…む…うむ…』シロはそう言つて秀太の胸の中から顔を出した。

「やあシロ。…何が起こつたか分かつてる？」

『…ここはどこだ？一体何をしているのだ？』シロはそう言つて周りをキョロキョロ見る。

「…はあ〱」秀太と麻衣は同時にため息をついた。

とりあえず秀太はシロにこれまでの経緯を説明した。

『なるほどな、ばらされてここまで逃げてきたというわけか』

「そついう事、だからねこれから脅したと予想される【七神柱】セブン・スミス・コウジを探さないといけないんだ」

「でも検討つくの？」

「うゝん……………ないや」

ズルっとこける音が聞こえた。

『そ、そうか、なら情報収集と——秀太！！よける！！』

「おっと」秀太はとつさに横によける。

秀太がいた場所は直径1mのさら地になっていた。

「おお、今のをよけるのか。ふゝんまあいいや」

そんな声が上がから聞こえて来たので秀太は上を見る。そこにはファイルズを殺した緑眼緑髪の少年が空中に浮かんでいた。

「初めましてではないけど風柱所^{ウインディネス}属副隊長のザンス＝ライド。よろしく」

27話 それぞれの道

三城 秀太 視点

「君にひとつ聞いていいかい？」秀太はそうザンスに言う。

「君じゃなくてザンスって呼んで欲しいな」ザンスはにこにこしながら地面に降りてくる。

「攻撃してきた相手になんで、馴れ馴れしくしなきゃいけないんだい？意味がわからない」秀太はそう言ってザンスを睨みつける。

「そう警戒しないでほしい。さっきの攻撃は君を試ただけだよ」にこにこしながらザンスは言う。

「そうだとしても、いつ攻撃されるから分からない。だから警戒は解くつもりないよ」秀太、麻衣はザンスを囲むようにして警戒する。

「そうかい、まあ別にそれでもいいや。それで？聞きたいことって何？」

「シャルとアレクスを脅したのは君の仲間かい？」

「ふふっなんだもう気づいていたのかそれは失敗だったね」ザンスは笑みをこぼしながら言う。

「…何でそんなことをした？」

「君に関する情報収集と孤立をさせるためさ」

「やっぱり下衆だな君らの組織は」

「あらら、裏切られた感想はどうだったって聞こうと思っていたのにな」

「何が言いたい？」

「君は人が嫌われることをしない逆に言えば人に嫌われたくないと思っているんじゃないか？」

「最後に聞く！脅した奴は誰だ！」秀太は刀と銃を構えながら言う。

「ああ、脅しな奴？…僕に決まってるじゃないか」ザンスの周りに3mくらいの竜巻が5個現れる。

「くられ」ザンスが片手を横に振ると竜巻が秀太達を襲う。

「【この竜巻をなかったことにする】」そう言って秀太は竜巻を消した。

しかし、竜巻を放った本人は居なかった。

「お兄ちゃん！上！【束縛】！」麻衣は束縛の魔法を放つが魔法が効かなかった。

「魔法は僕には効かないよ。また会おう」ザントはそう言った瞬間、消えた。

「…逃げられたか」

「魔法が効かなかったって…何で!？」麻衣はかなり慌てていた。

「僕にも分からない。けど物理攻撃は効くよ。ファイルズがそうだった」火山で戦った時の相手を秀太は思い出していた。

「武器かゝでも私これしかもってないよ」麻衣はそう言って黒い刀身の剣を見せる。

「麻衣は創造すればいくらでもつくれるから…いいんじゃない?」

「それもそうね…それは置いといて、これからどうするの?」

「情報収集するしかないよ。変装して近くの町へ行こう」

『私は胸の中に居ていいか?』シロはキラキラと目を輝かせながら言う。

「シロが【シルバールフ白銀狼】って言うのがバレるから人間になって」

『…面倒だな』シロはそう言って秀太の胸の中から出てきて人間の姿になる。

「さあ、秀太、麻衣、町へ行くぞ!」

「「いやいや、服着ようよ」「秀太と麻衣は揃って言った。

レイ 視点

秀太達が去ってから城中大騒ぎになっていた。大魔女が復活したとか、スフィード王国は大魔女に脅されていたとか色々噂がたった。

レイ達は城の中にある部屋に案内されて皆そこに集まっていた。

「シャル、一体何があったのかはなしてください……」

レイは泣き続けたせいか、目が赤くなっている。

「はい、わかりました。実は——」

秀太 搜索、出発前日

シャルは城の警備の人がいつまでたっても交代に来ないので不審に思い、警備の場所まで向かっていた。

辺りはすっかり真っ暗で明かりがないといけない状態だった。

「なんだこれは！」シャルが目の当たりしたのは警備の奴が全員気絶していたのだ。

20人だぞ！？誰かに入られたのか！？しかし、音も立てず、気配も出さずどうやって？まさかプロの暗殺者！？王女様達が危ない！

シャルは急いで王女達が眠る部屋に移動した。

「くっ！やはりいない！！」シャルは三つの部屋を調べたが誰も居なかった。

「おや？やつと来たのかい？案外城の中の警備もザルだね」

シャルは声が聞こえたほうを向くと、緑眼緑髪少年が三人の王女達を空中に浮かせて佇んでいた。

「貴様！王女様達を離せ！！」シャルはそう言って剣を抜く。

「おっと、立場を理解して欲しい。こっちが有利なのは…わかってるよね？」にこにこしながら言う。

「まずは自己紹介だね。僕はザンス＝ラント、よろしく」

「よろしくするつもりは私にはないんだが」

「ふふふっそれは無理だよ。この子達がどうなってもいいのかい？」

「…要件はなんだ？」シャルはザンスを睨みつけながら言う。

「簡単だよ。ミシロ＝シユウタの情報と彼を罠にはめて欲しい」

「!？」シャルは驚いて目を大きく見開いた。

「ふ、ふざけるな!! 仲間を売れというのか!」

「ああ、そうさ簡単でしょ? 天秤にかけたらどっちが優先ってことくらい」ザンスは笑顔で言う。

「シユウタを一体どうする気なんだ!？」

「そこまでは教える気はないよ」

「…ぐっ!…そうか、で? 私はどうすればいい?」

「ふふふっやっぱり素直な人は好意を抱けるよ」

「下衆が…貴様などに好意を抱けたくないわ!!」

「あら、残念。それにしてもすごいね。そんなに強気でいられるなんて」

「貴様が王女を殺したら交渉が失敗するからな。殺される恐れはないと判断したまでだ」

「おや、聡明な方でもあったのかい? それは素晴らしい。これは君一人だけでもよかったかな?」

「どういう意味だ? その口調では他にもいるような雰囲気だが?」

「ああ、もう一人いるよ。アレクス・カースウェル君だったね。彼

もまた聡明だったよ。そして君と同じでシュウタに憧れている」

「お前のおかげで全てめちゃくちゃだがな」シャルは思いつきりザンスを睨みつける。

「おゝ、すごいね。今すぐにも僕を殺しそうな感じだよ」

「戯言はいい。さっさと用件をいえ!」

「ああ、そうだね。やって欲しいことは――」

「これが全容です。私は王女様達を守るためにシュウタを売りました。この罰は如何なるものでも受けるつもりです」

「僕も彼女とやったことは変わりありません。僕にも責任が――」

「いえ、もう過ぎたことです。…それよりも私はそのザンス＝ラントの素性が知りたいです!!」

「姫様、一つだけ思い当たる節があります」

「それは一体なんですか!? メープル!」

「【七神柱】セブンスゴッド そう名乗る人がシュウタを狙っていました」

「【七神柱】ですか…聞いたことありませんね」

「私もそのとき初めて聞きました。調べても情報がありませんでしたし…」

「それを国総出で調べることにします！」

「れ、レイ様！？お待ちください！そんなことをしたら狙われてしまいます！」シャルが慌てて言う。

「そんなこと問題ありません！シユウタを助けるためです！それがせめてもの償いだと私は思います！」

「し、しかし！」

「僕は姫様に賛成します！」

「私も！」

「私…もです」

カースウェル兄妹がレイに賛成した。

「それでは私もです」

「私も！」

メーブルとメディアも賛成した。

「シャル？あなたはどうするんです？」レイがシャルにそう言う。

「…わ、わかりました。私も賛成です！」

「よし！それでは早速、城に帰って調べましょう！」

シュウタ：あなたにまた会えることを私達は願っていますよ？私達は私達でシュウタを微力ながら応援します。

レイはそう思いながら窓の外を見つめた。

27話 それぞれの道（後書き）

評価の方よろしく願います。

28話 誰もいない町（前書き）

本当に遅れて申し訳ございませんでした！新作にずっと気にした拳句こうなってしまうて！

…お詫びに全話を三人称にしました

28話 誰もいない町

秀太たちは町を訪れていた。一応ここはリムール王国内になる。

「誰もいないな」秀太は誰もいない町を呆然と見る。

「そうね、どうしてかしら」

「何かあつたのではないか？」

町は静まり返っていて誰もいない。店も全て閉まっっていてかなり不気味だ。

「とりあえず人を探すしかないな」

「そうよね」

「そうだな」

秀太たちはとりあえず、町を歩くことにした。酒場が一番人が多そうだよな…。秀太はそう思って酒場を探す。

「ここがそうかな？」秀太たちは店の正面が開いていなかったの
で裏口にまわっていた。

こんこんとノックをするが誰も反応しない。

「すみませ〜ん誰かいませんか？」秀太はそう言う。が誰も反応
をしない。

「無理やり開けていいかな？」

「うーん、仕方ないんじゃない？誰も居ない感じだし」

「ああ、そうだな。いつまでもこうしているのは拉致があかないだろう」

「わかった」秀太は無理やりドアをこじ開けた。

「吸血鬼め！死ねー！！」フライパンを持った獣人の女の人が襲いかかった。

秀太はそのまま、横によけると獣人の女の人がそのままこけた。

「いたっ！」

「あの…大丈夫ですか？」秀太は心配そうに見つめる。

「きゅ、吸血鬼様、私の血は世界一マズイと有名ですのでどうかお命だけは…！」そう言っただけで震えながら言う。

「大丈夫ですよ。僕は決して吸血鬼ではありませんから」秀太はそう言っただけで、そっと頭を撫でる。

「ほえ？人間の王子様？」獣人の女の人はぼーっとしながら秀太を見つめる。

「残念、僕は王子様でもないよ」苦笑いをしながら言う。

「え？でも…あれ？人間の王女様もいらっしやる！？」獣人の女の人は慌てて頭をさげる。

「いや、私も違うから…」麻衣も苦笑いする。

「それそろ、この町に何があつたのか聞かせてくれないか？」シロが言う。

「えええ！！！ひ、姫様がなぜここに！？」慌てて土下座をしだす。

「わ、私も姫ではないのだが…それよりもここで何が起きたのかきかせてくれないだろうか？」

「ももも、もちろんですとも！！しかし、こんな汚い家ですがどうぞお上がりください」慌てて獣人の女の人は言う。

秀太たちは顔を見合わせて苦笑いをしながら中へ入っていった。

「そ、それで、ひ、姫様がこのような町に何のお御用でしょうか？」緊張した顔で言う。

「え〜と、名前を教えてもらっていいかな？」

「も、もも申し訳ございませんでした！。私はシェリーといいます。どうぞシェリーとお呼びください」

「僕はシュウよろしくね」

「シロだ」

「私は麻衣よろしくね？」

「はい！よろしく願います。シュウさん、マイさん、シロ様」

「いや、だから、私はこの国の姫ではない。様はいらないぞ？ただ、この二人と一緒に旅をしているだけだ」

「そ、そう言われれば、確かに人間の姿をしていますね…」まじまじとシロを見ながら言う。

「そういうことなんだ。だから、この町に来て人通りがなかったものでおかしいなと思ってね」秀太が言う。

「そ、そうだったんですか…。実はこの町は吸血鬼に襲われているんです」

「吸血鬼？」

「そうです。確か…1ヶ月前から襲われているんです」

「その襲われた人達は怎么样了の？」麻衣が言う。

「そ、それが、原因不明の熱でみんな倒れてしまって…私のお父さんも…」俯きながら言う。

「お父さんのところに案内してくれるかい？僕なら治せるかもしれない」

「ほ、本当ですか！？こ、こちらです！ついてきてください！」いきいきしながら案内する。

「こ、ここがお父さんのいる部屋です。お父さん、お医者さん連れ

てきましたよ」

そう言っただけに入るとシェリーに似た茶色の耳の男性がベットで横になっていた。

「シェ、シェリーか。一体どうしたんだ？こ、ここの部屋に来たらダメだ…。で、出ていきなさい」苦しそうにシェリーに向かって言う。

「お、お父さん、お医者様を連れてきたの」

「シェ、シェリー、家にはそんなお金はないぞ…」

「心配しないでください。お金は取りませんよ」秀太はシェリーの父親を覗き込むようにしている。

「そ、そうですか…。すまないが見てくれますか？」

「ええ、わかりました。少し楽にしてください」秀太はそう言う手と手をシェリーの父親の額に持っていく。

【この病気をなかったことにする】

「…これで治りましたよ」

「本当だ…！体が軽いぞ！あ、ありがとうございます！お医者様！」そう言っただけから立ち上がって頭をさげる。

「ほ、本当にありがとうございます！シュウさん！」シェリーもそう言っただけで頭もさげる。

「まだベットで安静にしてください。体力が戻ったわけではないので…」

「も、申し訳ございません」そう言ってからベットに戻る。

「それでは改めまして、助けていただきありがとうございます。私はこの酒場を経営しております。ホグと申します」

「初めましてシュウです」

「シロだ」

「初めましてマイです」

「はい、よろしくお願いしますね。シュウさん、マイさん、シロさん」

「えっとそれで吸血鬼に襲われたと聞きましたが…今、話せます？」

「大丈夫ですよ！それでも体力はあるんですから」そう言って力こぶをつくる。

「おとうさん。調子に乗らないの！病気治ったばかりなんだから」

「す、すまない」

「それで吸血鬼とは…？」

「あつ、はい、実は襲われたのは夜でして、あまりよく覚えて居ないんですよ。ほらここを」そう言って首筋を見せてくる。二つの穴

のあいた跡が残っていた。

「夜だけ襲われるんですか？」

「いえ、昼に路地裏で突然襲われたと言う人もいたので…。この町には警戒して誰もでなくなっただけです」

「襲われた人は何人います？」

「私を含めて10人です。多分私みたいに苦しんでいると思います」

「わかりました。その病気で苦しんでいる人のところまで案内できますか？」

「シェリー案内してあげなさい」

「え！で。でも…吸血鬼が現れたら…」おろおろしながら言う。

「大丈夫、僕たちが守るから」秀太は笑顔で言う。

「ほ、本当ですか！あ、ありがとうございます！…シユウさんはお優しいんですね？」

「そうかい？そう言ってもらえると嬉しいよ」

「え？あつ、えへへへ」嬉しそうに頬を染めながら言う。

「シロ、また、お兄ちゃんやかしているよ」

「まったく、罪づくりな男だな」

「二人ともぶつぶつ言っていないで早く行こう」

「わかってるよ」

「無論だ」

「何で二人とも不機嫌面——」

「「気のせいよ（だ）」二人揃って同時に言う。

「…そうですか」秀太は苦笑いで言うしかなかった。

三人はシェリーの案内で病気で苦しんでいる。人たちの家を訪れて病気を治していった。

秀太は病気を治す過程でだんだんと病気について分かってきた。病気の種類は首輪、いわゆる拘束という種類だ。自分の獲物がいる場所がわかるマーキングと同じと言ってもいいだろう。

「問題はいつ吸血鬼が来るだけだと思う？」

秀太たちは再び酒場に戻ってきて吸血鬼について話し合いをする。

「私の予想だと、今晚でもくるんじゃないかな？だって病気がいきなり治ったんでしょ？」

「ああ、私もそう思う。しかし、いきなり襲われては流石に危ないぞ？」

「それは、多分大丈夫、索敵範囲を広げれば問題ない」

「だが、吸血鬼とわかるのか？」

「ここに近づいてくる奴なんて旅人以外いないよ」

「それもそうだな…」

「とりあえず、作戦は僕が囿で、シロと麻衣が奇襲だ。いい？」

「わかったよ」

「了解した」

「でも、お兄ちゃん大丈夫なの？」麻衣が心配そうに秀太に言う。

「大丈夫だ。万が一襲われてもすぐに治ることは確証済みだからね」

索敵範囲に映らない何かをしてきたらアウトだが…秀太はそう思う。

「わかった。お兄ちゃん信じるよ」

「そうと決まれば、早速、作戦開始だ。」

時は夜、当たりの明かりは消え去り、酒場の周りだけを照らす眩い光だけがこの町の中で輝いていた。

さてと…まだ、索敵には引つかからないか。警戒は必要だな。秀太は魔法だけではなく自分の周りも警戒する。

一時間は経過したがまだ来なかった。秀太は集中するのが疲れたので力を抜いた。

「ぐわっ！」いきなり秀太の首筋に激痛が走る。

「くっ！」秀太は腰に下げている刀を抜いて振り払う。

しかし、敵は刀をひらりとよける。

「うはっ！うまい！うまさぎるよー！ちょっとしか飲んでいないのに虜になっちゃいそう♪」全身をがくがくと震わせ、頬を上気しながら、吸血鬼が言う。

「お兄ちゃん！大丈夫！？」

「シュウタ！大丈夫か！？」

麻衣とシロが心配そうに寄ってくる。

「ふ、二人とも、作戦は！？」

「いや、その…心配で」麻衣が目をそらしながら言う。

「わ、私はち、違うぞ！」そう言いながらもシロは目をそらす。

「…はあ、もういいよ。それよりもあいつをどうにかしなきゃね」そう言って刀を構える。

「うわ、またまた美味しそうな人が二人も居るよ！サイコー過ぎてやばいよ！ああ、欲しい、ずっと傍に置いておきたい」今だに全

身を震わせながら完全に目がやばい感じで言う。

薬をやってトリップしたみたい感じたな……。まあ、見たことないからわからないけど…秀太はそう思った。

「残念だけどお断りだ！」そう言って秀太は吸血鬼に斬りかかった。

29話 誰もいない町2

秀太は斬りかかったが、すぐによけられる。

「麻衣！」

「わかってる！【束縛】」そう言っで魔法を放つ。

「ぐっ！」吸血鬼は苦しそうにしながら、地面に倒れる。

「シロ！行くよ！」

「ああ！」

シロと秀太が挟み撃ちの形で襲いかかる。

「甘い！」しかし、吸血鬼は上に飛んでよける。

「なっ！何故だ！」

麻衣が【束縛】の魔法をかけて完全動きを止めたはずだ。しかし、吸血鬼は麻衣の魔法から抜け出した。

「麻衣！どうしたんだ！？」

「わからない！急に魔法が解けたの！」

「ふふふっ、何百年も生きていれば魔法耐性がつくのは当たり前よ？」吸血鬼が妖艶に微笑みながら言う。

「…なるほどな、それなら！」

【魔法耐性をなかったことにする】

「…何をした。今、お前は何をしたんだ！」吸血鬼は焦り顔で言う。

「ま、麻衣…今だ」秀太は苦しそうな顔で言う。

「分かつてる！シロ！」

「ああ！」

麻衣は【束縛】の魔法を使って吸血鬼の動きを止める。

「ぐっ！」吸血鬼はそのまま地面に向かって落ちてくる。

シロは吸血鬼を受け止めて鎖でしっかりと縛った。

「さて、何故ここの町を襲ったのか教えて欲しいんだが？」秀太はふらふらしながらも言う。

「そんなに人間の血が美味しいからに決まっているじゃない、特にあなたのなんて少しだけでもやばかったわよ？」目をトローンとしながら言う。

「血なんてどれも一緒だと思うけどね」

「全然違うわよ！特に魔力を多く持っている奴なんて最高よ？どうしてこれがわからないのかしら？本当人生損しているわ！」

遼一は胸元からナイフを取り出して指の先を少し切って舐める。

「…マズイ」

「お兄ちゃん何やってるの！？当たり前じゃない！」

「シュウタ…本当にアホだな」

「…ねえ、やっぱり美味しくないんだけど…」秀太はそう言って吸血鬼の前まで指を持っていく。

吸血鬼は必死に舐めようとするが届かない。

「た、頼む！それをな、なな、舐めさせてくれ！ああ、勿体無い！地面に一滴おちたぞ！」そうぎゃあぎゃあ喚きながら秀太に言う。

「ねえ、血を飲まないと吸血鬼は生きていけないの？」

「ああ、そうだ。正確には魔力の入った血なんだがな。それがないと一ヶ月も持たない」目をきらきらさせながら言う。

「ふーん、じゃあ、血がなくても生きていけるようにしてあげようか？」

「…冗談でも言っているのか？」ぽかんと口を開けながら言う。

「冗談じゃないよ。血が無くても生きていけるようになりたいか聞いているんだよ」

「それは勿論だ。そしたら無理に襲わなくていいからな」頷きなが

ら言っ。

「だったら、そうするね」

【吸血鬼じゃなかったことにする】

すると吸血鬼の体が見る見る人間に近づいていく。

「…いや、待て！流石に人間にしろとは言っていないぞ！？」

「あれ？不満？ていうか吸血鬼って元々人間なんだね」

「そうだ！そうだが…吸血鬼の身体能力は戻してくれないだろうか？できれば血が美味しくいただけるままで」

「…注文多いな」

「頼む！」

「…分かったよ」

【吸血鬼の身体能力があったことにする。血が美味しかったことにする】

「出来たけど…。もう…キツイ…」秀太はその場で座り込む。

「だ、大丈夫！？お兄ちゃん！」

「大丈夫か！？シュウタ！」

二人は遼一を心配そうに見る。

「すまないが…私を話してくれないだろうか？」

「…なんでよ」麻衣が吸血鬼を睨みながら言う。

「私は魔力を分け与えることができる。もしかしたら回復させることができるかもしれない」

「…いや、無理だよ。僕の魔力は人とはちょっと違うから」

「いや、お前からとった魔力を元に戻すだけだ。少しだけでも変わるだろう？」

「…それもそうだね。麻衣、解いてあげて」

「でも、お兄ちゃん！」

「いいから、大丈夫だよ」笑顔で言う。

「…わかったよ」そう言って魔法を使って鎖を外す。

「よし、少し痛むが我慢してくれ」そう言って吸血鬼は秀太の首筋にカプリと噛み付く。

「ぐっ」秀太は苦しそうな声を漏らすがいばらくすると穏やかな表情を浮かべていた。

「ふう、よし終わったぞ。それにしてもお前の魔力本当におかしいな」

「そうかい？それよりも助かった。かなり楽になったよ」

「いや、こちらご助かった。ありがとうお礼を言う」そう言って秀太に一礼する。

「ああ、それはいいさ。それよりもこれからどうするんだい？」

「…お前は私を見逃すのか？」不思議そうな顔で秀太を見る。

「だって、血を飲まないといけなかったんでしょ？僕でも吸血鬼だったら生きるための道を選ぶからね」

「そ、そうか、でもまた人を襲うかもしれないぞ？」

「だったら、僕のところになよ。血ならあげるし」そう言って指を出す。

「そ、そうか、な、ならそうする」顔を赤くしながら言う。

「し、シロ…」

「何も言っな麻衣」

二人はジト目で秀太を見る。

「ああ、そうしてくれ…えっと…」

「私はミリだ。シュウタ」

「…僕は秀太ではなくてシュウだよ」

「ん？そうなのか？でもあそこの女がシュウタと言っていたが？」
そう言いながらシロを指す。

指されたシロは拳動不審になりながらもなんとか持ち堪えていた。

「それは、僕の名前を切るところ間違えているんだ何度言っても聞いてくれないんだ」肩を竦めながら言う。

「そうなのか…。ここ最近、黒髪黒目の男でシュウタと言う奴が御尋ね者つて国中に流れているからな犯罪者と同じなのは流石に嫌だよな…」同情の視線を秀太に向ける。

「あはは、そうだね。まあでも僕は黒髪黒目じゃないし間違えられることはないよ」軽く笑いながら言う。

「それもそうだな。それではシュウ。また会おう」そう言って翼を広げて遠くへ飛んでいった。

「…またね」秀太は静かにそう呟いた。

30話 誰もいない町3

「全く。シロ、気を付けてよ」

「す、すまん！つい癖でそう呼んでしまうのだ」そう言って秀太に謝る。

「でも、まさかここまで噂が広がっているなんてね。ビックリだよ
確かにここ数日でかなり広まっていると思うが国の端のここまで広
まるのはおかしすぎる。

「考えられるのはやっぱり【七神柱】セブン・スラム・ピラーしかないね」

「やっぱりそうだよ。でも、どうしてこんなに回りくどいことを
するのかな？」思案顔で言う。

「わからないよ。謎が多過ぎる。少しでも分かればいいんだけど…」

「そうだな。しかし、次はどこに行く？宛がないのは些か無謀と言
うものだぞ？」

「そうだね。…酒場に戻ってから考えよう。今は吸血鬼がもつこ
に出来ないことを報告しないと」

「そうだな」

「そうだね」

三人は吸血鬼を倒したことを報告するために酒場に向かった。

「さ、三人とも！だ、大丈夫でしたか！？」「裏口からノックするとシェリーが慌てて飛び出てきた。」

「ああ、問題なく吸血鬼は倒したよ。ここの町に来れないようにしておいたから安心していいよ」

「ほ、ほんとうですか！？やったー！！」「そう言って秀太に思いっきり抱きつく。」

「そんなに嬉しかったのかい？それならやりがいがあったよ」秀太は笑顔で言う。

「はい！っです、すす、すいません！いきなり抱きついたりしてしまっ！」「そう言いながら慌てて頭を下げだす。」

「いや、気にしてないよ。それほど嬉しかったってことなんだしね」

「あ、ありがとうございます」どこか惚けた様子で言う。

「シロ……」

「怖いな…将来何人が……」

「あ、あの、色々とお礼がしたいので…今日はここに泊まっていてくれませんか？」シェリーは上目遣いで言う。

「ああ、もちろん。それに、色々と疲れたしね……」

「で、では！すぐに部屋の準備をしますね！」「そういつとぴゅーっ」と走り去って居なくなった。

「み、みなさん！よくぞご無事で！それに吸血鬼を倒したのは本当ですか！？」シェリーと入れ替わるようにホグが二階から降りてきた。

「ええ、倒しましたが…。ホグさん、大丈夫なんですか？まだ寝てなくて」

「いえ、大丈夫ですよ。娘から吸血鬼を倒したなんてきいたものですから、起きてくるのは当たり前ですよ！もうなんとお礼を言ったらどうか！」そう言いながら必死に頭を下げる。

「そんな大層なことはしていませんよ」

「…あなた様という人はなんと素晴らしい方なんでしょう！——七神よ。私はこのお方たちに出会えたことを感謝します」手を胸の前で組みながらそう言う。

七神か…。もしかしたら僕たちは神に喧嘩を売っているのだろうか…。いや、それはないな。どちらかと言えば【七神柱】の奴らのほうが余程喧嘩を売っているな。秀太はぼんやりと思う。

「ホグさん一つ聞きたいことがあるのですが」

「何ですか？私が答えれる範囲であればいいですよ」ホグは笑顔で秀太の要求に答える。

「最近、どこの町でもいいので何か噂になってることあります？」

「噂ですか…。…そういえばここ一ヶ月前から妙なものが手に入る

と言つのを耳にしたことがあります」

「妙なものですか？」

「ええ、そうです。ここから西に20キロ行つたマイラと言つ町です。ね。なんでも、変わった形の剣があつたとか」

「そ、それを詳しく教えてくれませんか！」秀太は思わず立ち上がつて言う。

「お兄ちゃん！落ち着いて！」

「え？あつ！ごめんなさい」

「いえいえ、いいですよ。誰でも目当ての物を見つけた時は興奮しますので」

「そ、それでどんな形が分かります？」

「えっと……確か刃が片方しかついていない剣って聞きました」

「こつという剣ですか？」秀太はそう言つて刀を見せる。

「うーん、流石に私は実物を見たことないので分かりません。申し訳ないです」

「いえ、その情報を聞いただけでも十分ですよ」

「シユウさん、マイさん、シロさん、寝台の準備ができました。今すぐにでも寝られますよ」シェリーが二階から降りてきて言う。

「ありがとう。シェリー、でもいいんですか？泊まっていっても？」

「当たり前ですよ！是非泊まっていってください！ささ、どうぞ！」
ホグが立ち上がって言う。

「ホグさん、あまり無理をしないほうが…」麻衣が心配そうに言う。

「いえいえ！私は元気が取り柄ですんで大丈夫ですよ！」

「…そうですか。ではお先に失礼します」

「すまないな。では失礼する」

「おやすみなさい」

「ええ、良い夢を」ホグの笑顔を見送りながらみんなそれぞれの部屋へ向かった。

秀太が部屋に入ると急にブレスレットが光り出した。

『秀太』ローズが出てきた。

「ローズどうかしたのかい？」

『秀太と話がしたかったのよ』笑顔で言う。

「いいよ、何が話したいの？」

『【七神柱】について話しましょうっ？』

「…今更じゃないかな？考えても分からないし…」

『そんなことないわよ。よく考えてみなさいよ』

「…まあ、疑問に思ったのが何で僕をすぐに捕まえに来なかっただね。あんな実力の人が沢山いるのなら奇襲作戦ですぐに僕は捕まると思うけど…」

『それも私は思ったわ。一つ考えれるのは、秀太の実力を恐れているからかしら』

「それはどうだろうか？そんなことはないと思うけど？」

『でも確実に力は上がっているわ。その証明として私がここまで具現化出来るし』

「何度も僕とこう話していて大丈夫なのかい？相手も感ずくはずだよ？」

『黙認されているわ。私と繋がりが強ければ強いほいって言うていたから』

「どついうことだい？」

『そこまではわからないわ。でも私との繋がりが強ければ強いほど相手の都合がいいのかもしれないわ』

「どちらにしろ、今は敵の思い通りか…」

『そついつことになるわね』

「そろそろ寝るよ今日は疲れたし」そう言って秀太はベットで横になる。

『ええ、おやすみなさい』

『ああ、おやすみ』そう言って秀太は意識をおとした。

次の日、清々しいくらいの天気に見舞われた。秀太達は町を出ようとしていた。

「ほ、本当になんてお礼を言っているのか…」町長さんが言う。

「いいですよ。僕たちも知りたい情報が手に入ったわけですし」

「…そ、そうですか。でも、この次この町に寄っていただければ最大のおもてなしをしますので」

「そんな…そこまでしなくても…」

「いいじゃないか。町長さんの御好意だありがたく頂戴しておけ」シロが慥然と言う。

「う、うん。…わかりました。この次、この町にきたらお願いします」

「ええ！もちろんですよ！酒場のお酒全て開けますので！」ホグが言う。

「おっ！それはいいな！」

「ふとつ腹だな！」

「絶対行くぞ！」

「宴だー！ー！」

町の男達が騒ぎ出す。

「あ、あの、その…シュウさん。今度来たら一緒に…」シェリーが俯きながら言う。

「ああ、一緒に楽しもう」そう笑顔で言う。

「はい！」シェリーも笑顔で言う。

「…お兄ちゃん」

「いや、これはもう一種の能力だな」

「あのマイさん、シロさん！今度来たときは一緒に過ごしませんか？」

「てめえ！抜け駆けするいぞ！」

「俺もおれも！」

「おれが先だ！」

「やんのかコラア！」

そう言って男たちの睨み合いが始まる。

「…やっぱり人気だね二人とも」秀太が苦笑いで言う。

「お兄ちゃんもだよ！」

「そうだ！シユウもだ！」

「どこを根拠にそんなことを…」秀太は呆れ顔で言う。

「…もう行こう」

「そうだな」そう言って二人は先に進み出す。

「え？なんで？ちょ、ちょっと待ってよ」秀太は慌てて二人を追いかける。

「シユウさん！絶対また来てくださいね！」

「ああ！また来るよ！」

こうして三人は町を後にした。

31話 マイラという町

秀太達はマイラに着いた。

「すげえ…人が多いね」秀太はそう言って周りを見渡す。

「確かにすごいね…」

「私達がな…」シロは呆れてため息をつく。

確かにこのマイラの町は人が多くて、活気がある。しかし、秀太達は別の意味で人を集めていた。

「綺麗あの人たち…」

「おとぎ話に出てきそう」

「なんか触ったら消える感じで…でも触れたいな」

「結婚したい！…でもレベルが高すぎる」

「お話してくれるかな？」

「麻衣…やっぱり、異世界にに来てみんなを魅了する能力が…」
秀太も視線に気付いたらしく麻衣をジト目で見る。

「いやいや！どうして毎回そうなるのかな！？どう見てもお兄ちゃんでしょ！？」麻衣は慌てて言い返す。

「え？麻衣、何言っているんだい？ほら、みんなを見てみてよ麻衣に釘付けてやつだよ？」

「シュウ…なんか色々と残念だな…」哀れむようにシロは秀太を見

る。

「これで自分はモテません宣言していたら、世の中の男性に睨まれるよ？ほら、あそこの女の子が赤い顔しながらお兄ちゃんに釘付けだよ？」麻衣はそう言っで女の子を指す。

「ふん、じゃあ！あの子に聞いてくるよ」秀太はそう言っで秀太と同じくらいの年齢の女の子のところに行く。

「あつ！ちよつとお兄ちゃん！」

「ねえ、ちよつと聞きたいことがあるんだけどいいかな？」秀太はそう言っで笑顔で近寄る。

「え？ええ！？わ、わたしですか！？」女の子はそう言っで手に持っている食材を落とす。

「あつ！落ちたよ？ごめん、いきなりで怖かったかな？」秀太はそう言っで少し落ち込む。

「え？いえいえ！？違います！全然そんなことはないですよ！？」

「え？そうなの？そしたら改めて聞くんだけど…あそこにいる金髪の女の子可愛いと思う？」

「え？ええ、可愛いと言うよりも美しいですけど…それがどうしかしたんですか？」

「いやゝなんかね。あそこにいる金髪の女の子は妹なんだけどね…。僕を君がずっと僕を見ているなんて言うからさ」

「ッ！いえ！そ、そそそ、それは、その…」顔を真っ赤にして首を激しく横に振る。

「あつ…。ご、ごめんね不快だったよね。じゃ、じゃあね」秀太は少し申し訳なさそうにして女の子のもとを去った。

「もう、麻衣の勘違いじゃん。あの子顔が真っ赤になるほど否定してたけど？」秀太はジト目で麻衣を見る。

「はあく。もういいよ行こうかシロ」麻衣は深いため息をついて言う。

「それもそうだな…」シロも呆れ顔で言った。

二人はそう言って、歩きだした。

「え？なんで？ちょっと待ってよ」秀太はそう言って二人のあとを追った。

三人は情報が多く集まろうであろう酒場に入った。

「あのくちよつといいですか？」秀太はそう言って獣人の大柄な男に声をかける。

「いらつしゃい。お？あんたらはさっきまで注目を浴びてた人達じゃねえか？一体どうしたんだ？」

「ええ、実はですね。ここの町に珍しい物があるなんて聞いたものでどこにあるのかなと思ひまして」

「ああ、そのことな。それならここから真つ直ぐ進んだところにあるぜ？…でも兄ちゃん達も物好きだな」

「…どういふことです？」

「なんでも、あそこにある商品は不思議なものがいっぱいで…。使い方が分からないものや字が読めない書物まであるんだよ。俺はあまり買つのはおすすめしないがな。まあ、でもあそこの店は武器や防具は一級品だから客は多いしそれらを買う分は文句はないけどな」

「そうなんですか？親切にありがとうございます」

「おう、いいつてことよ。兄ちゃんも大変そうだからな」麻衣達をチラチラ見て、にやにやしながら秀太の脇腹をつつく。

「お氣遣いありがとうございます？」秀太は首を傾げながら言う。

「…ああ、なんか兄ちゃんの色々なことが分かった気がするわ」苦笑いで言う。

「そうですか？では、僕たちはこれで失礼します」そう言って一礼する。

「行くぞシユウ」

「早く行くよ。お兄ちゃん」

二人は秀太を置いてさっそうと酒場から出ていく。

「…ねえ、何で怒っているの？僕が何かした？」

秀太も二人のあとを追うようにして出ていった。

「ここみたいだね。…何か雰囲気あるな」秀太はそう言っつて建物をみる。

この町の家ほとんどがレンガ作りに関わらず、ここの店は木造だ。しかもかなり年季が入っている様子だ。そして情報通りで客がそれなりに多くて賑わっている様子だ。この町でも有名なんだろう。

「それにしても人が多いね。…まあとりあえず入って見ようか」

「それもそうだな」

「そうだね」

三人は店の中に入った。

店の中に入るとそれなりに人はいるが店の中が広く、少ないような錯覚をしていた。雰囲気も静かな感じでとてもいい。

「いらっしやいませ」獣人の青年が笑顔で出迎える。

「あの、ここで、不思議な商品があるって聞いたんですけど…」

「ああ、はい！ご案内しますのでついてきてください」青年はそう言っつと誘導する。

「ここがお客様のお求めの商品欄です」

「…嘘だろ」

「なんでよ…」

秀太と麻衣は絶句して商品を見上げる。

そこにあつたのは30年前になろうであろう地球のラジオやガスランプ、書物、武器などが並んでいた。

「それではごゆっくり」青年はそういつと秀太達から離れていった。

秀太は歩きながらおそらく地球のものであるうを見ていく。ドイツ語、英語、スペイン語など外国の書物やどこから来たかわからないものが色々と揃っていた。

僕らの時代ではこれらはアンティーク物だな…収集家の人達がみたら興奮しそうだな。秀太はそう思いながら本などを手にとって確かめる。

「…お兄ちゃん、これどういうこと？なんでこんなところに地球のものが？」麻衣は訳が分からないという表情をする。

「わからない。でも…ローズが言ったとおりなら、あいつらは地球に繋がる方法を知っているかもしれない」

「ローズ？ローズって誰？」麻衣は怪訝な表情で秀太を見る。

「気にしないで、独り言みたいなものだから」

「そう？」納得していない様子だったがなんとか秀太は切り抜けた。

「お前たちはさっきから何の話をしているんだ？仲間外れはイヤだぞ？」シロはぶくつと頬を膨らませながらプイッと横を向く。

「僕たちの故郷の話をしていたんだよ」

「シュウタとマイ故郷か…。行ってみたいな…」

「…そうだな」微笑して言った。

帰ることなどできないとは言えない自分に秀太は少し嫌気がさした。

「そうだね。そのときはシロを盛大に歓迎するよ」麻衣は笑顔で言う。

「そうか！ありがとう！楽しみにしているぞ」シロはそう言って喜んでいた。

麻衣も無理している感じだな。麻衣のためにも早く帰る方法を見つけないとな。秀太は改めてそう感じた。

「あはは、やっぱり君たちで間違いないんだね？」突然そういう声が聞こえてくる。

「誰だ？」秀太はそう言っで警戒する。

「そんなに警戒しなくてもいいじゃないかシュウタ君」フードを被った奴が姿をあらわす。

「もう一度言っお前は誰だ？」

「おや？もう声を忘れちゃったかな？」そう言っでフードを取る。

「お、お前は！」

「あなたは！」

秀太と麻衣は叫びながら襲いかかろうとする。

「おっと、今はダメだよ。ここはお店だよ？それに今は戦うつもりはないよ。そして、久しぶりだねシュウタ、マイ。君たちはどのくらい強くなったかな？」

そう言っでケイブリッチは薄く笑った。

31話 マイラという町（後書き）

ケイブリッチ君、久しぶりの登場です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8541w/>

勇者の妹と温和な兄

2011年12月20日19時21分発行